黒の冥王

紅梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒の冥王

【Ｎコード】
Ｎ１２７６Ｐ

【作者名】
紅梅

【あらすじ】
家で寝ていたら、女神によって召還されてしまったアオイ。怒りながらもそこでの暮らしを受け止めた。あれ？　なんであんたもいるの？　アオイは、王子を含めた７人の中から伴侶を選ばなくてはならなくなってしまった！！　しかも、全員イケメンで！？　「え？　７人の中からじゃない？　さっき言ったのは間違い！？　ちょっと、いったい私にどーしろって言うのよ！！」困り果てたアオイは誰を選ぶのか？

プロローグ

世界を創造された女神ユリエルよ、どうかこの願いをきいてください」

広い部屋の中に男が1人、女神の像の前で祈りを捧げていた。

「花嫁となる娘を。古の時から、伝えられてきた伝説の花嫁をボクらに」

男は、必死に祈った。今までにこんなに必死に祈ったことはあったのかと自分で考えてしまうほどに祈る。

さすがにちょっとダメかなぁ？と諦めかけてきた時、

『あなたの願い聞き届けました』

声が聞こえた。

『女神ユリエルの名にかけて、あなたの願いを叶えましょう。・・・・・それに、こうして伝説の花嫁の存在を、誰かが望むのを私は長い間待っていたのだから』

後半の部分は声が小さくて聞こえなかったが、そんなことはどうだっていいんだ。

女神が、願いを叶えてくれるそれだけで良い。

「ありがとうございます、女神ユリエル」

まばゆい光と共に少女が現れた。倒れていたので、慌てて駆け寄ってみるがどうやら寝ているだけらしく、ほっとした。

『この娘を大事にしなさい。私も時々、様子を見に来ますから。酷い扱いをしたら、許しませんのでそのつもりで』

ぷつりと声が聞こえなくなった。どうやらユリエルは、去っていったようだ。

（さぁーって、この眠り姫をどうしようか。・・・・・そーだ、あいつの部屋の寝台にでも寝かせようかな。あいつの反応が楽しみだ）

男は、思い立ったら行動する性格なのか娘を抱き上げある人の部屋まで運ぶ。

（この子は、だれを選ぶ??これからが楽しみだなぁ）

どこか、子供のような顔で男は笑っていた。

プロローグ（後書き）

初めての作品です。
がんばって書いてきます！！
誤字脱字がありましたら報告お願いします。

始まりと出会い

いったいこの状況はなんなの！？

目を覚ますまで自分の家で寝てたはずなんだけど。
なのになんで、目の前に男の人の胸板があるの？？しかもしっかりと相手の腕が体に回されていて抱き枕状態。

（ダメだ・・・・理解不能なこの状況に頭がパンクしそう）

数分前まで家にいた。これは絶対にたしかなことだ。高校から帰ってきて、ご飯食べてお風呂入って一長くなるからその後は割愛で！！一「疲れたー」って言ってベッドにダイブして寝た。

（たしかに私は、1回寝たらなかなか起きないよ？　でも、この状況の変化に気づかないってことはないでしょ・・・・・・・たぶん・・・・きっと。よ、よし自分が分かるかチェックだ！！）

一名前は？一　緋野（ひの）　葵（あおい）
一年は？一　十八歳

（分かってるな。記憶は大丈夫みたい）

1人で、頷いていたら目の前の胸板もとい男が動いた。そっと葵が顔を上げてみると、碧眼の瞳と視線がぶつかった。
「だれだ？　お前は」
最初に言葉を発したのは男の方だった。

（いきなり知らない人に“だれだ？”って聞かれても困るんだけど。

なんて答えれば良いんだろう・・・・）
葵がどうしようかと考えていると、

「名を名乗れ」
男は短くそう言った。
（はぁ？　この状況でそれ聞くの？　しかも、この人名乗ってないじゃん。人の名前を聞く時は、まず最初に自分の名前を名乗るのが礼儀ってものでしょ！）
葵は、イラっときたのでとりあえず睨んでみる。男は、驚きの表情をした。

（まさかこの人、今まで生きてきて女に睨まれたことないの？　あーでも、顔が良いからなさそうだわ。それに、平手打ちとかもされたことなさそう）
そう思うと、笑い出しそうになる。しかし、ここで笑い出したら失礼な人になってしまう。それは、イヤなので必死に我慢する。
必死に笑いを我慢する葵の様子を見て、男は驚きの表情から怪訝そうな顔をした。しかし今の、葵にはその表情さえも笑いのツボでしかなく、
（も、もうダメ。笑っちゃう）

葵が吹き出しそうになった瞬間、
「やぁ、アンジェ。目覚めの気分はどうだ？」
どこからともなく聞こえてきた声に、葵は救われた。いきなりの声に、驚き今の今まで笑いそうになっていたのがどこかへ飛んで行ってしまったのだ。

（ふぅー。助かった。あのままだったら、確実に吹き出していたな。・・・ん？　今の声の人は“アンジェ”って言った？　私の名前じゃないから、この人の名前か。というか、この人いつまで私を抱き

枕状態にしておくのかなぁ？　いい加減に、放してほしい）

葵の思考には結局、吹き出しそうになったとか男の名前などよりも早く放してほしいという事だけが残った。

そんな葵の考えに気づかず男・・・・アンジェは、

「・・・クリス。これはお前の仕業か？」

上半身を起こし、寝台側に立っていた銀髪紫眼の男を睨みつけた。その時も、葵はまだ抱き枕状態だった。全然、放す気配がない。

葵は、軽く諦めてアンジェと同じように男を見た。アンジェが発した言葉からすると、この男の名は“クリス”と言うらしい。

「質問に質問で返すとは酷いね。仕方ない。今回は、特別に許してあげるよ」

「だったら早く答えろ。これはお前の仕業か？」

「まぁね。アンジェも知ってるだろ？　ボクは、２度手間が嫌いなんだ。だからさっさと起きて、隣の部屋に来てくれるかな？　早朝だけど、カイン達も呼んだから。さぁ、アンジェに抱かれているお嬢さんも一緒に」

“アンジェに抱かれているお嬢さん”？

誰のことだ？

・・・・・・・あー、私か。

自分を指さすと、クリスはそうだと言うように頷いた。

始まりと出会い（後書き）

メインキャラ出てきました。
結局アンジェは、最後まで葵を抱きしめたままでしたね（笑）

もう葵はされるがままになっています。
ちょっと同情。
ドンマイ、葵！！

誤字脱字がありましたら報告お願いします。

知りたくなかった現実（前書き）

申し訳ございません！！
加筆を行ったところ“始まりと出会い”と同じ内容になっていましたので訂正させていただきました。
最初と違う部分はありますが、それほど内容変更はされていないと思いますので安心してお読みください。

知りたくなかった現実

アンジェが寝台から降りたので、私も降りなきゃだよねっと思っていたら体が、フワリと浮いた。
（あら、不思議。体が勝手に浮いてるわ）
なんて驚いて上を見ると、アンジェの顔があったので彼が葵を抱き上げたと言うことは理解した。
理解はしたけど、
「あのー？　私、歩けるんですけど？」
正直葵は、歩けるのだから歩きたいと思って言ったのだったがアンジェは、
「気にするな」
そう言って歩き始めた。

（なんだと？　今、“気にすんるな”って言ったよね？　気にするに決まってるじゃん！！　私は、うら若き乙女だぞ！？　乙女が、異性に抱き上げられて気にしない方がおかしいだろ！！）
心の中で、あれやこれやと言いまくっていたらいつの間にか隣の部屋に着いていたようだった。
部屋の中を見渡してみると、広い・・・・広すぎる。
口を開けてポカーンとしていたら、その姿を見たらしいアンジェは鼻で笑った。
（コイツ、人のことを鼻で笑ったよ。ムッキー！！　ムカツったらありゃしない！！　こっちは、純庶民の人間なんだよ！？　こんなに大きい部屋は見たことないんだよ）
だんだんアンジェに対して怒りがわいてきたが、当の本人は気づかず部屋の中央にクリスと共に歩いて行く。
中央には、確実に座り心地が良いだろうと思われる長いすがテーブルの向かい合わせになっているように並んでいた。

（・・・・・・なんでここには、顔かたちが整っている人しかいないのか聞いても良いでしょうか？）
うっかり葵が、そんなことを考えてしまうほど美形しかいなかった。
アンジェは、葵を長いすに座らせると自分もその隣に座る。クリスは、葵たちの向かい側に座った。
（ん？　なんか視線を感じる？）
ジッと見られているような気がして、視線がする方向を見てみればクリスの隣に同じ顔が2つあった。そのうちの1人と目があったが顔を赤くされ視線をそらされてしまった。
（？　なに？　もしかして、私の顔ってそんなに変！？　たしかに容姿は、平凡だけど別段と問題があったわけじゃなかった気がするんだけど。私の気のせいだったのかなぁ？　だとしたらかなりショックなんだけどなぁ・・・・・）

「おい、いい加減に始めろ。なんで、こんな早朝に俺らを呼んだ？　ここにいるお嬢さんは、どこのどなたなんだ？　クリス、さっさと答えろ」
1人が痺れを切らしクリスに問いかけた。問いかけられたクリスは立ち上がり、ニッコリと天使のように微笑んだ。
その瞬間、葵の背中に悪寒が走った。
（なんか、イヤーな予感がする。どうか、この予感が外れていますように！！）
祈ってみるが、葵はこういうイヤな予感ほどよく当たるということを嫌と言うほど知っている。

「せっかちだなぁ、カインは。ここにいるお嬢さんは、ボクが女神ユリエルに祈って召還してもらった伝説の花嫁だよ」

（はぁ！？　今、コイツなんて言った？？）

と思っていたら、無意識のうちにいすから立ち上がりクリスを思いっきり殴っていた。今度は、殴られてよろよろとしているクリスの胸ぐらを掴んだ。

「ねぇ、今なんて言った？　召還？　冗談でしょ？ちょっとあんた、どーいうわけよ！！　ここは、地球じゃないの！？　日本じゃないの！？　ほら、さっさと答えなさいよ！！」

葵は、クリスをがくがくと揺らしながら質問をぶつけた。

「そ、そんなに激しく揺らされたら目が回っちゃう！！」

クリスは、悲鳴を上げたが、葵は無視した。

「そんなのどうでもいいから早く答えなさい！！」

「分かったから！！　なんでも答えるから、とにかく離して！！」

「その言葉、嘘じゃないよね？」

「当たり前だ！！」

その言葉に葵は、すんなり納得して手を離した。いきなり手を離したので、クリスは尻餅をついたがそんなの葵の知ったことではない。クリスを冷ややかに見下ろし、腰に手を当てて仁王立ちをする姿は、悪魔のように恐怖感を誘うようなものだったと後々彼らは語る。

「えーっとですね。ここは、キミがいた世界ではありません。それて、キミがもとの世界に帰れるのかというと帰れません。なんせ召還されたのですから。もともとの決まりで、召還した者の世界での存在は抹消されることになっているらしいので、キミのことを覚えている人は1人もいないと思われます。キミは、アンジェの伴侶に

なってもらうために召還されましたが誰を伴侶にするかは自分で決めてください。以上です」

クリスの淡々とした説明に、葵は顔を歪ませていく。
「・・・・・なにそれ。帰れない？地球での存在を抹消？　ふざけないでよ！！　まだ私は、十八歳なんだよ！？　これからもっと人生が楽しくなっていくっていう時期なのに――――――」
「ふざけてなんていない。これは、事実なんだよ。受け入れてください。それに、十八歳といえばこの世界では立派な大人だ」

そのうち、葵の瞳から涙が一筋こぼれた。
（なんなの！？　いきなり、“キミの世界でキミの存在は抹消されました”とか意味分からない！！　私にどうしろって言うの？？ふざけないでよ・・・・・。いやだ。帰りたい。帰りたいよ・・・・・・・・・・棗）

葵の中の、怒りの感情に何かが同調し爆発して目の前が真っ赤に染まった。

知りたくなかった現実（後書き）

名前は、全員出てないけどメインキャラさん達ほとんど集結です。

葵ちゃんに殴られたクリス・・・ご愁傷様ですね。

あれは、絶対に痛いよね（笑）

女神との会話

突然、葵を包み込むように黒い竜巻が起き始めた。その竜巻によって、近くにいたクリス達や長いすや机は全て吹き飛ばされてしまった。

それだけではない。部屋がどんどん凍り付き始めていく。

「おい、セシル！！　どうなってるんだ！？」

「これは・・・・彼女の魔力だ。しかも制御できずに暴走してる！！」

双子のうちの1人、セシルは青ざめながらもアンジェの問いに答えた。

（彼女は、魔力を制御しないんじゃなくてできないんだ！！　このままじゃ、彼女は魔力を使い果たして倒れるか、最悪な場合――――死ぬ）

セシルは、解決方法を必死に頭の中で考えながら自分の魔力で部屋を暖めていくが、それを遙かに上回る速さで部屋は凍り付いていく。部屋を自身の魔力で暖めているのは、セシルだけではない。ここにいる者は、差はあるけれど魔力を持っておりそれを使っているがやはりこれでも止まらない。

「どうすればいいんだ！！　このままだったら彼女は・・・・死ぬかもしれない」

セシルの叫んだ言葉に他の者は皆固まった。ほぼ無理矢理という形で、連れてこられた葵に少なからず同情心を皆抱いているのだ。

既に、同情心以上の気持ちを、抱いている者もいるが。

沈黙していた瞬間、いきなり黒い竜巻が消え凍り付いてきていた部屋も元に戻った。
竜巻の中心にいた、葵は倒れていた。それを見た、アンジェ達はすばやく葵の元に駆け寄った。

葵は、自分の状況をまったく把握できないでいた。クリスを見下ろしていたはずなのに、葵の目の前には草原が広がっていた。来たこともないし、知らない場所のはずなのになぜか懐かしく感じる。だけど、どこだか分からない。
分かることは、今のところ1つしかない。
それは、
（自分が、キレてるって事だよねぇ）
珍しいほど、葵はキレていた。なんで自分がこんな目に遭わなければならないのかと。

――ごめんなさい。これは、全てわたしの我が儘なの――

いきなり頭の中に、誰かの優しく慈愛に満ちている声が響いてきた。この声も、草原と同様に懐かしく感じる。
（あなたは、だれ？）
――わたしの名は、ユリエル。この世界を創った者。そして、あなたをこの世界に呼んだもの。あなたの名前を、教えてくれる？――

（私は、緋野　葵。ねぇ、私を呼んだって言った？　なんで？　どうして？）
キレている状態だったのが、ユリエルの声を聞いて頭が冷静になっていくのを感じた。
（私は、呼ばれた。クリスもそう言ってたから、これは確かな事実だ。でも、なんのために？　ユリエルは“わたしの我が儘なの”って言った。それはなぜ？）

――わたしは、葵に会いたくてたまらなかった。だからクリスとか言う名の神官長が、『伝説』の花嫁を召還したいという願いを聞いたの。葵の世界での“緋野　葵”という存在を抹消してしまった。本当に、ごめんなさい。わたしの我が儘で。・・・・・・・でも、そうでもしなければわたしは、葵にいつまでたっても会えなかった。この世界にいてほしかったから。葵のことが、なによりも大切なの――

後半の言葉は、小さく葵には届かなかった。
（私、ユリエルと会ったことあるの？？）

――そうね。葵が、覚えていないのは当たり前よね。神であるわたしでさえも、昔と感じる程気の遠くなるくらい昔のことだから――
ユリエルの声は、切なげで悲しそうだった。
――だから、彼らを責めないであげて。責めるなら私を――

（私に、ユリエルを責めるなんて絶対にできない。なんでかは分からないけど。ユリエルの言う通り、あの人達を責めるのはやめる。地球に帰るのも諦めて、残りの人生はこの世界で楽しむことにするよ）
葵自身でも理由が、分からないけれどユリエルの言葉に従ってしまう。なぜだろ、と内心首をかしげた。いくら考えても、答えは出

てこない。

――ありがとう、葵。この世界のことは、彼らに聞いてね。私じゃ、よく分からないから。あ、でも安心してね？　どこの言葉でも話せるし、聞けるし、書けるし、読めるから！！　どんなに、昔の言葉でも大丈夫だからね！！――

先ほどまでの、声とは違い自信に満ちあふれているような声だった。

（この世界ってユリエルが創ったんじゃないの！？　なのになんで、あの人達に聞かなきゃダメなのか聞いても良いですか！？）

――だって、すぐに国の名前とか色々変わっちゃうんだもん。だから、覚えるの面倒になっちゃって。それとこの世界には、葵の世界になかった“魔力”があるから！！　しかも、葵はこの世界でも滅多にいないほど強い魔力の持ち主だから、そこのところも彼らか誰かに説明してもらってね。わたしじゃ、うまく説明できないから。――

アハっとかわいらしい声が聞こえ、葵は思わず脱力してしまった。

（分かった。ありがとう）

言ったは良いが何に対してのお礼なのか、葵は全く分からなくなってしまった。

――いえいえ。それじゃあ、わたしは帰るわ。また会いに来てもいい？？――

（当たり前。今度は、ユリエルの顔とか見てみたいな。楽しみにしている）

――じゃあ、今度は顔を見てお話しましょうね！！　じゃあね、葵！！――

ユリエルが、別れの言葉を告げた途端に草原も消えた。

葵の意識は、暗闇の中に沈んでいった。

女神との会話（後書き）

タイトルは、内容そのまんまです。
思いつかなかったんで。

ユリエルと葵ちゃんには、過去何があったんでしょうね・・・。
ヤバい
そこんとこもきっちりと考えねば！！

ちょっと危険な男達？（前書き）

いちおーアンジェ視点になってると思います。

ちょっと危険な男達？

倒れた葵は、アンジェによって先ほどまで2人で寝ていた寝台に運ばれた。双子が、「アンジェばっかりズリぃーぞ！！」とか言いながら葵を運ぼうとしたがアンジェがその声を無視して運んだのだ。

ぶつぶつ言いながらも、しっかりと後ろについてくのを見ながらクリス達は笑っていた。いつ葵が目を覚ますのかが分からないので、全員が葵の周りにいることにした。幸い、早朝なのでまだ仕事に行く時間ではない。

「彼女を、どうするつもりだ？」

最初に口を開いたのは、この国の宰相であるカインだ。だから、カインが葵の存在を心配するのは当然だろう。

「俺、あの子気に入った。俺が花嫁にもらう！！」

「何言ってるんだよ！！　僕が気にいたんだから僕が花嫁にもらう！！」

双子のヒューズとセシルは、葵が気に入ったようだ。この二人が、女を“気に入った”とか“花嫁にもらう”などと言うのは初めて聞く。それほどまでに、この二人はモテる。しかも、それを自覚していて女遊びが激しいのだから手に負えない。

「はいはい。二人で、一生そうやって言い合ってろ」

カインは適当に二人を宥める。

「で、本当にどうするの？　誰がもらうの？　俺が、もらって良い？？」

「はぁ！？」

「だって、彼女かわいいし。別に、花嫁にできるのはこの国の人間だけじゃないでしょ？　だったら、俺が欲しい」
　こんなことを言っているのが、ラシュだ。ラシュは、隣国の皇子にもかかわらず自分の国にも帰らないでずっとこの国にいる。それもこれも、次期王となる第一皇子でも第一皇子を補佐する第二皇子でもなく第三皇子だからできることであるが。

「・・・・欲しいって、子供じゃないんだからね。しかも、彼女はモノじゃないよ？　そこのところを、分かってるかな？」
　クリスは、ニコニコ笑いながら言うが長年付き合ってきたので、その言葉に棘が含まれているのがよく分かる。

「それくらい分かってるよ。なぁアンジェ、ダメか？」
「ダメだ」
　アンジェは即答と言っていいほどの速さで答えた。周りが、答えの速さに驚いているがアンジェ自身も驚いている。
（なんで、俺は即答してるんだ？　別に、俺には関係無いはずなんだが・・・・。）
　いくら、考えてみても答えは出てこない。面倒になったので、考えるのはやめた。

「あのなぁ、ヒューもセルもラシュも自分の事ばかり考えてるだろ。自分が、花嫁に望んだとしても彼女自身が頷かなきゃ意味ないんだぞ？」
「それくらいカインに言われなくても分かってるし！！」
　うんうんと、ヒューズの言葉にセシルとラシュは頷く。

「そういうカインはどんなの？」
「俺か？　口説き落とさせてもらう。当たり前だろ？　それに、クリスもだろ？」

「当然だね。ボクを殴る子なんてそうそういないんだから、気に入った。じゃーみんな、口説き落とすことになるのか」
「だろーな。今日からの生活が楽しみだな」
クリスとカインは余裕そうな顔で笑っていた。
その時、葵は「うぅーん」と言いながら目を開けた。

ちょっと危険な男達？（後書き）

みんなそろって葵ちゃんを口説き落とすことになるました。

この６人の中で、確実に１番女扱いうまいのってカインっぽいかな

クリスも案外うまいのかな。

余裕そうな顔で最後笑ってましたし！！

逆に１番ダメなのが双子ですね。

なんかこの２人は、一晩遊んで終わりって感じかな。

男達の自己紹介

見慣れない天井。自分の部屋の天井ではない。やはりこれは、夢ではないと思い知らされる。

「起きたか」

声のする方を見てみれば、アンジェがいた。

「はぁ、起きましたけど・・・・。私に、何が起こったか聞いても？」

「お前は、魔力の暴走を起こして倒れた。それだけだ」

「そーだったんですか。ご迷惑をおかけしたようで申し訳ございませんでした」

葵は、上半身を起こし頭を下げて謝った。

「気にするな」

「――――アンジェが、“気にするな”って言った！！　明日は、雨かなぁ？？　どー思う？セシルは。」

「僕も、ラシュの意見に賛成！！」

「お前ら、うるさい」

そんな会話を聞きながら葵は、頭の中で、これからの計画を立て始めた。

（まずは、ユリエルに言われた通りこの世界と魔力について聞くとしてその先はどうしよう・・・・）

「――――か？」

うーんと頭を抱えそうなほど悩んでいたので、クリスが話し始めたのに気づかず、全く話を聞いていなかった。

「え？ごめんなさい。聞いてませんでした、もう一度お願いします」
「だから、この世界を受け入れてもらえますか？」
「あ、はい。受け入れることにしました。それ以外、選択肢はないしユリエルにもこの世界でこれからの人生を楽しむっていいましたし。あの、殴ってしまってごめんなさい。キレたからっていうのは、言い訳に過ぎません。ですから、私のことも殴ってくださって結構です」
今度は、クリスに向かって頭を下げて謝った。
「いや、傷はもう治ったから大丈夫。それに、ボクには女の人を殴るなんてできないから」
クリスは、そう言うと葵に近づき頭を優しく撫でた。
「クリス、ずるい！！」
「そーだぞ、ずるい！！」
セシルやヒューズは、クリスに「ずるい」という言葉をどんどん投げかけていくが、
「うるさいよ？」
ものすごく黒い笑みを、浮かべたクリスを見た瞬間2人は何も言えなくなった。なぜなら、とても恐ろしかったから。幼い頃から、付き合いがあるのでクリスが怒ったらどんなに恐ろしいかなを、知っているから今のクリスに口答えをすることはできなかった。
（この人って、なんか黒い。絶対腹の中は真っ黒だ）
葵は、3人のやりとりを見てそう思った。

「うん、静かになった。それと、自己紹介してなかったよね。ボクは、クリス・ブルーバル。年は、二十四歳。この国の伯爵家当主で、神官長も務めてるんだよ。遠慮しないで、“クリス”って呼んでくれたら嬉しいかな」
　クリスは、先ほどまでの黒い笑みはどこに行ったのかというくらい優しい笑みを浮かべて葵を見る。
（うわぁーこの人、こんな顔もできるんだ。ちょっと意外かも）

「先越されたな。まぁ、いいか。俺は、カイン・ブランシュ。年は、クリスより一つ上だから二十五歳になるか。この国の公爵家当主であり、宰相を務めている。俺のことは、“カイン”と呼んでくれ」
　カインは、笑顔で葵を見つめる。

「俺、ヒューズ・レイタス。年は、二十一歳です。この国のレイタス公爵家の片割れ当主で、騎士団長を務めてる。“ヒューズ”か“ヒュー”って呼んで」
「僕は、セシル・レイタス。年は、ヒューと一緒の二十一歳です。この国のレイタス公爵家の片割れ当主。双子だから、ヒューと一緒に当主をやってるんだ。魔法師団長も務めてます。“セシル”か“セル”って呼んでね」
　ヒューズとセシルは、ニコニコ笑顔で葵を見る。

「俺は、ラシュ・ソレーユだ。年は、二十三歳だったかな。この国の隣の国で、第三皇子をやっている。“ラシュ”って呼んでくれよな」
「俺は、アンジェ・シーフォ。年は、ラシュと同じ二十三歳。この国の第一皇子をやっている。“アンジェ”と呼んでくれればいい」
　葵は、驚いた。
（王子が2人も！？　しかも、第一と第三王子！？　なんなのこれは。王道設定ですか！？）

「なんか、皆さんすごいんですね」
葵は、内心動揺しながらも笑った。本物の笑顔で。本人は、まったく気づいていないが葵の顔立ちは整っているので笑うと可愛いのでヒューズとセシルは少し顔を赤くさせながら笑い、ラシュは眩しいものを見たという感じに目を細め、クリスは葵の初めて見る笑顔に驚き、カインは甘い笑みを浮かべ、アンジェは微笑んでいた。
しかし、葵の反応が今浮かべている笑顔と何も変わらないので全員驚いた表情に変わった。
この反応の変化に、葵は首をかしげた。
（なに？　私、何かしたっけ？？）

「キミは、カインのあの甘い表情を見ても平気なんだね」
感心したようにクリスは言うが、葵には理解できなかった。
（“カインの甘い表情”？　あー確かに甘い笑顔してたなぁ。でも、べつにどうってことないじゃん。いやいや、それは私が慣れてるからか。普通は、頬を赤らめたりするんだろうな。あいつの笑顔見た人全員そうだったしな）

「はい、平気です。慣れてるんで」
「“慣れてる”？　恋人のカイン並みの甘い笑顔で慣れた、とかそんな感じ？」
「いえ、恋人はいましたが私の場合は双子の弟ですね。彼女に見えろよって感じの笑顔を、いつも私に振りまいてたので」
葵は、ハハっと乾いた笑みを浮かべたが目は懐かしそうに目を細めた。

男達の自己紹介（後書き）

あれ？
男達は、全員自己紹介したのに葵ちゃんはしてないよ！？

まぁ、仕方ないと開き直って次回にまわそう！！
ううん、そうしよう。

アオイとナツメ

「キミは、双子だったんだ？　しかし、なんでキミにそんなことを？」
「ええ、まぁ、そんな感じのがいますね。私だって、知りませんよ。でも、『そういう笑顔は、彼女にしなよ。』って昔に言いましたら、『俺は、葵のことを世界で一番愛してるから良いの。』って言われましてね。――――――あー！！　私、自己紹介がまだでしたね」
葵は、「すみません」と小さく頭を下げながら笑った。

「私は、葵。緋野　葵です。こちらでいうと、アオイ・ヒノになりますね。ファミリーネームがヒノです。年は、十八歳。私のことは、好きなように呼んでください」

「そうか。アオイとは、良い名だな。ところで、話を蒸し返すようで悪いんだが双子の弟とやらの話を詳しく聞かせてもらえないか？」
「あ、それ俺も気になる！！」
「僕も―！！」
全員が、先ほどの話を詳しく聞きたがった。
「えーっと、何か気になることでもありましたか？」
アンジェ達の発言に、アオイは首をかしげた。
（なんで、あいつの話を聞きたがるんだろう？　何か気になるような話をしたっけ？　ただ単に、甘い表情を私に向けてくる人の話をしただけなんだけどなぁ）

アオイは、気づいていなかっただけだ。これは単に“葵を世界で一番愛してる”という言葉に6人が苛立ちを覚えたからだ。この感

情の名に気づいている者は、今のところヒューズとセシル、ラシュの3人だけだった。あとの三人は、まだ自分の中にある感情の名に気づくことはできなかった。

「んーっとそうですねぇ。名前は緋野　棗(なつめ)と言いまして、たぶん私の双子の弟です。たぶんっていうのは、私の両親が再婚同士・・・・・つまり、最初はお互い別の人と結婚していたけれど何らかの理由で別れて、そうして出会い結婚した。という感じです。
なので、よく分かってないんですよ。でも、私的には血のつながりはないと思ってます。顔かたちなんて、まったく似ても似つかないので。あとはー・・・・・」

アオイは一生懸命考えた。
(棗について話すことって後は、女性関係くらい？)
「あと、女性受けが大変よろしくて“来る者は拒まず去る者は追わず”でしたね。この言葉の意味というのは、“心を寄せて近づいて来る者は、どんな者でも受け入れ、離れて行こうとする者はその意志に任せて、強いて引き留めない”というものです。しかも決まって、『私より大切な人がいるんでしょう！？』って言われてフラれてますね。
棗には、本当に大切で愛している人がいるらしいんですけどその話をすると、必ず哀しそうな目で私を見ながら抱きしめてくるんですよね。私には、最後までそれがなんでだか分かりませんでしたけど」

アンジェ達の中で分かったことがあった。
それは・・・・・アオイが鈍いということと、ナツメという男がアオイのことを本当に愛していた。ということだ。

「詳しくと言ったらこれくらいですね」
「分かった。ありがとう。すまなかったな、この世界を受け入れたばかりだというのにアオイの元いた世界の話をさせてしまって」
カインは、申し訳なさそうに目を伏せた。

「いえ、大丈夫ですのでカインさん達は気になさらないでください」
アオイは、首を振りながら微笑んだ。

「あのさ、さっきから気になってたんだけどその敬語と“さん”付けってなんか一線引かれてるようでイヤだからやめてくれないか？」
突然、ラシュはそう切り出した。

「そうですか？」
「そうだ。だからやめてくれると嬉しい」
「わかり――――――分かった」
それでいいという感じにラシュは、満足そうに笑いながら頷いていた。

「話が、一段落ついたところでこの世界について話しておくよ」

アオイとナツメ（後書き）

あれれ？
アオイちゃんの自己紹介がさらっと流れてしまった。
ナツメくんの話の方が多い・・・・。
まぁ、気にしない方向で（笑）

これからは、葵ではなくアオイに統一させていただきます。

口説き落とせるように

「この世界には、2つの大陸がある。一つは、レウィーゼ大陸。もう一つは、ヨハムル大陸。この、ヨハムル大陸は小さい大陸で一つの国だけしかない。シシレイ王国っていう名前なんだけど、凄く閉鎖的な国で詳しい情報はないんだ。分かっていることは、この国には他の国には決してない知識が山ほどあるってことくらい。で、この大陸・・・つまりレウィーゼ大陸には二つの大きな国といくつかの小さな国がある。一つはここ、ヨームルダン帝国。もう一つは、本来ラシュがいるはずの国でライウィン帝国。小さい国々は、よく名前が変わるから説明はなしかなぁ」

クリスの、最後の説明になんと言っていいのか分からず適当に相づちをうった。

「それで――――――」

「失礼いたします。おはようございます、殿下。朝食の用意ができておりますのでどうぞ。あぁ、ラシュ様達もいらしていたのですね。見たところ朝食が、まだなようですので皆様もご一緒にどうぞ。――――ところで殿下、そちらにいらっしゃるお嬢様はどこのどちら様でしょうか？」

アオイから見て四十代前半くらいの女の人が、クリスの説明を遮って部屋に入ってきた。

（アンジェっが王子だから、この人は侍女っていう役職の人かな？）

「リサーナか。おはよう。いきなり入ってこられて、俺はかなり驚いたんだが？」

「あら、いつもは気づいていらっしゃるではありませんか。クリス様、真夜中を少し過ぎた頃に大きな魔力がいきなり神殿に出現した

ようですけれど、そこのお嬢様と関係がございますか？」
先ほど“リサーナ”と呼ばれていた人物は、クリスの方へと視線を移動させた。

「よく知ってるね」
「このことは、わたくし以外の者でも知っていますよ。あんなに大きな魔力を感じることは滅多にありませんから」
「あはは。だよねぇ。彼女は、ボクが女神ユリエルに願って召還された伝説の花嫁の、アオイ・ヒノ」
「まぁ！！　とうとう殿下に奥様ができるんですね！！　お初にお目にかかります、わたくしはこの王宮の侍女頭を務めさせていただいているリサーナ・マーレルと申します。わたくしのことは、リサーナとお呼びください、アオイ様」

「は、初めましてアオイ・ヒノです。あの、まだ私アンジェの奥さんになると決まったわけじゃないんです・・・・・・」
アオイは、リサーナの“殿下に奥様ができる”という発言に対し顔を引きつらせていたが、全然リサーナは気づいていなかった。

「そうなんですか！？　まったく、殿下は何をしていらっしゃるんですか！？　こんなに可愛らしいお方はそうそういらっしゃりませんよ！？」
「分かってる。これから徐々にアオイを、口説き落としていく計画だから安心しろ」
「まぁ！　それなら、安心です」
「えー！？　そーなの！？」

リサーナとアンジェの会話を聞きながら、
（きっとアンジェって、リサーナさんに頭が上がらないんだろうな

ぁ）
などと思っていたのだが、アンジェの言葉を聞いて考えていたことがどこかへ飛んで行ってしまった。
（私を口説き落としてく計画！？　なんでそーなるの！？　どうやったら、そんな考えに行き着く！？）

「バーカ。アンジェにアオイを口説き落とさせるわけないだろ？」
ラシュは優しい瞳でアオイを見る。

（救いの神が現れた！！）
と、内心喜んでいたが、
「アオイは、俺が花嫁にもらうって決めたんだからな」
見事に、ラシュはアオイの予想を裏切ってくれた。
（なんでそーなるんですか！？）
「ってことで、アオイを口説き落とせるように頑張るかな」

「待て。アオイを自分の花嫁にしたいと思ってるのは、お前達だけじゃないぞ。俺も、アオイには悪いが本気で俺の花嫁としてアオイが欲しくなった。だから、口説き落とさせてもらう」
「ボクも、アオイが本当に欲しくなったから落とすよ」
「俺だって負けないからな！！」
「何言ってるんだ！！　僕がもらう！！」

アオイは、アンジェ達の言葉に先ほどの顔の引きつりより数倍顔が引きつっていた。
「あのーみなさん？なにをそんなに――――――」
「アオイ様は、来て早々人気ですねぇ」

リサーナののんきな発言に、アオイはがくっと肩を落とした。
（元はといえば、リサーナさんの発言のせいなのに・・・・・）

口説き落とせるように（後書き）

うーん

世界の説明が、まだ全然出てない。

次回か、その次に回そう！！

気づいた感情

「いえいえ、きっと珍しいだけですよ。なにせ異世界から来たんだし」
「そんなことは絶対にありません！　皆様、女性の方々にかなり人気がありますのに一度関係を持って終わりなんです。ポイッですよ！？　ポイッ！！　なんとも酷いんですよ！　そ・れ・な・の・にですよ？　アオイ様に対しては、“花嫁にもらう！！”とか仰ってるんですよ！？　絶対に珍しいからではございません！！」

自信満々にリサーナは言うが、言葉の中には男として最低と思われてしまうような内容が入ってるとは気づいていない。
（一度で終わりってホントに最低な人達だなぁ。いつ刺し殺されてもおかしくないんじゃ・・・・・）
リサーナの言葉が、アオイの中でのなんとなく少しだけあった好感度を下げていきゼロにまで達してしまった。

「たしかに顔はいいですもんねぇ」
はぁとため息をつくアオイを見て、リサーナは小さく笑った。
「初めて見ました。殿下達のことを“顔はいい”だけで終わらせることができる人。たいていの方々は、なんて言うんでしょうか。こう、頬を赤くして固まって憧れの目を向けるって感じでしたから」
「なんかそれ納得です。免疫とか経験とかなかったら誰だってそうなると思います」
「でしょう？　だから、初めてなんですよね。皆様が、一人の女性に取り合いをするほどの執着を見せるなんて。女遊びがどんなに激しくても、なかなか本気になる相手――――――全然本気になるようなお相手がおりませんでしたので、わたくしこれからが楽しみで楽しみでしかたがありません」

「うわぁーやっぱりみなさんサイテーですね。ってか女の敵？　どーせ自分の周りにいる女は、全て自分に気があるとでも思ってるんでしょーね！！」
いまだに言い争いが続いている方を見ながらぼそっと呟いた。アンジェ達は、イロイロと身に覚えがあるのか、ばつの悪そうな顔をした。

「今までは、そうでも今この瞬間にアオイという存在を知ったから他の女となんて絶対遊ばねぇーよ」

一番に、アオイの言葉から立ち直ったカインがアオイに近づき手を伸ばしアオイの頬に触れた。ちょうど手が冷たくて気持ちいいとアオイは目を細めた。
その光景は、世界に二人しかいないように思わせるようなものだった。

カインは知った。自分の中にアオイと出会った瞬間からあった感情の名を。アオイを、一目見た瞬間に生まれたこの感情の名を。

「あら、もしかしてカイン様が一歩優勢なんですか？」
リサーナは、のほほんとそんなことを言ったがラシュ、ヒューズ、セシルの三人は非常に焦った。なぜなら、カインが心の中にできていた感情の名を知ってしまったから。これで、本当にアオイを手に入れようと仕掛けてくるだろう。三人は、アンジェとクリスは感情の名に気づかぬ事を祈ったが時は既に遅かった。

アンジェは気づいた。カインがアオイに触れているのを見て、わき起こったどす黒い感情に。そして、なぜこんな感情がわき起こる

かにも気づいた。
　クリスは理解した。自分がアオイに対してどのような感情を持っているかを。同時に、カインを殺したくなった。アオイに触れて良いのは、自分だけだと思ってしまった。

　全員が、カインに嫉妬した。殺気が生まれてくる。もちろんその殺気には、鈍いアオイは気づかなかったがカインは気づき内心冷や汗を流した。

「なんで、私っていう存在がいると女の人と遊ばないの？遊べばいいじゃん」
「バカだなぁ、アオイは。そんなの俺がアオイの事が――――――」
「ちょっと良いか？　カイン」
　良い雰囲気のまま今さっき気づいたばかりの感情を、アオイに告げようとしたら見事にクリスに邪魔をされアオイと引き離された。

「おい、何抜け駆けしようとしてるんだよ！！」
「気づいたんだ。良いだろ？　なんせ敵が多いんだから」
「良いわけないでしょ。そんなに早く思いを言おうとするなんて、カインは自信がないんだ？　まぁ、自信があってもなくてもアオイは最終的にボクの花嫁さんになるからいいけど」
「なんでそーなるんだよ！？」

（なんか、また喧嘩？始めてる。アンジェ達ってよくわかんない。でも会って数時間くらいしかしてないのに、どーいう人なのか分かったら逆に怖いか。っていうかお腹空いた）

気づいた感情（後書き）

またまた世界の説明ありませんでした（汗）

しかもアオイちゃん「お腹空いた」って！！

次回も世界の説明できないじゃないか！！

皆様は、黒の冥王な中でだれが好きなんだろうか・・・・。

ってこれ活動報告にも書いてるかもしれない（笑）

食べ物は粗末にしない

「リサーナさん、私お腹が空いたんですけど何か食べるもの持ってませんか？」
「なにも持っておりませんが、よろしければ殿下達を放っておいて朝食を食べに行きませんか？」
「良いんですか！？　良いなら行きたいです！！」
「もちろん良いのですよ。それでは、参りましょうか。」
まだ喧嘩が続いているらしいアンジェ達を置いて、アオイとリサーナは朝食が用意されている部屋へと向かった。アオイが、最初に目をさました時に連れて行かれた部屋へと繋がる扉とはまた違う扉を通った。

（いったい、この部屋はどんだけ違う部屋に繋がってるんだろう？今度探検させてもらおう）
そうしようと、心の中で決めた時部屋に着いた。
そこには、色とりどりの料理が並べられていた。料理を、見た途端にお腹の音が盛大に鳴ってしまいアオイは恥ずかしいと顔を赤らめた。リサーナは、そんなアオイの姿を可愛らしいと微笑んでいた。

「うぅーすみません。いっぱいあって、しかも美味しそうで」
「かまいませんよ。どうぞ、お好きなだけ召し上がってください。料理が、アオイ様のお口に合うと良いのですが・・・」
「そのことについては、まったく全然心配いらないと思います。私、元いた世界でも嫌いな食べ物なかったので。しかも人に教えられて初めて知ったんですけど、私って誰もが呆れるくらいの大食らいらしいんですよ。
自分じゃ、食べるのは好きだけど、大食いだなんて思ったこともないんですけどね。だから、リサーナさんが好きなだけ食べて良い

って仰ってくれて嬉しいです」
　てへっとアオイは、可愛くリサーナに笑いかけてみた。
（ホント、自分じゃ自覚がまったくないけど棗が言うんだから確かなんだよねぇ・・・・・きっと）
「まぁ、そうだったんですか。でしたら、どんどんお召し上がりくださいませ。なんでしたら殿下達の分まで食べてしまっても大丈夫ですよ」

「やった！！　どれが、アンジェ達の分なのかわかんないけどいっただきまーす！！　なにこれー！！　おいしー！！　見た目、赤色のスープなのにカボチャスープの味がする。これ。食パンだ！！見た目も味も食べ方も食パンだ。こっちの世界でも、食パンってあるんだぁー。なんかこれ、毒々しい感じの見た目なのに滑らかな舌触りでおいしー！！――――――」

　何かを食べるごとに感想を言っていくアオイを、リサーナはニコニコ顔で見ていたが内心ではどんどん料理の山が減っていくことに驚いている。
「見た目が、リンゴか梨なのに味がバナナってのが笑えるな。リサーナさん、この果物の名前ってなんですか？」
「それは、スーレと申します」
「スーレですか。ありがとうございます。この世界にも、元いた世界と同じような食べ物やまるっきり同じ食べ物があって驚きです」
　アオイは、そう言って笑いながら食事を再開した。アオイの中で、一時間くらい経っただろうか。並べられていた料理が、全てアオイのお腹の中に納められた。後から出てきたデザート類もだ。今は、食後に出てきたなんとなく緑茶のような味のお茶を楽しんでいた。

「はぁーおいしかったです。ごちそうさまでした」
「お口にあったようで良かったです。ところで、アオイ様。先ほど口に出しておられた“いただきます”と“ごちそうさまでした”とはなんなのですか？」

「私がいた国の、食前食後に言う挨拶なんです。“いただきます”は、食事を作ってくれた人達と食材とその食材を作ってくれた人達に対しての感謝を表します。“ごちそうさまでした”は。食材を調達してくださった人達への感謝を表しているんです。この国には、こういった挨拶はないんですか？」

「その言葉には、深い意味があるんですね。この国と言いますか、この世界は言葉ではなく祈りを捧げるのが食前にすることですね。食後には、特に何もしていません」
（祈りを捧げるかぁ。アメリカとかも確かそうだった気がするなぁ。）

食べ物は粗末にしない（後書き）

アオイちゃん、大食いなのは良いけど後から腹痛にならないように！！

腹痛になったら、みなさんに笑われちゃうよ！？

誤字脱字や「おいおい、そこの言葉はそっちじゃなくてこっちだろ！？」というのがありましたらどんどんお教えください。

自分じゃ気づかないことが多いので・・・・・。

留まらせるための理由（前書き）

お気に入り登録１００件突破！！
嬉しいです。泣きそうです。

記念に何か番外編を書こうと思ってるんですけど、内容がまったく決まってません。
というかアイディアが全然出てきてません。
なので募集です！！
こんな番外編を書いて欲しい―！！とか思うようなアイディアがありましたらください！！
何かアイディアを私に！！

留まらせるための理由

「腹減ったー」
そんな言葉と共に、扉がすごい勢いで開けられた。一番最初に、入ってきたのはラシュだからさっきの言葉はラシュが発したものだろう。笑顔で入ってきたラシュだったが、すぐに笑顔が固まってしまった。

「ねぇ、アンジェ。・・・・・料理がない」
「ホントだ。オレの食事がない。というか、皿しか残ってねぇじゃん」
ラシュが一番最初。次にアンジェ。ヒューズとセシルが仲良く入ってきて、最後にクリスとカインが入ってきたが全員誰が見ても分かるほど顔が固まっていた。しかも、直立不動で全く動かなかった。
（そりゃーまぁ、顔も固まるし動かなくもなるよねぇ。なんかご飯楽しみにしてたみたいだし？　全部食べちゃって悪い事したなぁー）
そんなことを思っていても、実は本当に悪いとは思っていなかったりする。来るのが遅い方が悪い。食事は、争奪戦だとアオイは思っている。しかし、アオイは争奪戦になるような家庭で育ったわけではないのだが・・・・・。

「まぁ、殿下達遅かったですね。食事でしたら、殿下達が遅いので先ほどアオイ様が豪快に全て食べてしまわれました」
「アオイが！？」
信じられないという目でアンジェ達はアオイを見る。
「うん。好きなだけ食べて良いって言われたから、ホントに好きなだけ食べさせてもらったよ。お腹空いてたし、ここの料理美味しいかったしでいつの間にか全部食べちゃった」
「ありえねぇ。どんだけ食うんだよ・・・・・」

「リサーナ」
「はいはい。わかっていますよ。わたくしは、厨房に料理の追加を頼んできますね。アオイ様はどういたしますか??　まだお食べになられますか??」
　リサーナの質問にアンジェ達は、こいつまだ食うのかよ!?とでも言いたそうな目でアオイを見た。
「さすがに食べ過ぎました。私はもういいです」
「わかりました。それでは、料理が来るまでお待ちくださいませ」
　そう言って出て行こうとしたリサーナを、アンジェが「待て」と言って止めた。

「なんでございましょうか?」
「厨房に行くついでに、アオイの部屋の手配と侍女などの手配も頼む」
「かしこまりました」
　リサーナは、今度こそ出て行った。アンジェ達は、直立不動をやめ席に着いた。アオイの両隣には、ちゃっかりラシュとカインが座った。それを、残りの四人が恨みがましそうな顔で見たが二人は知らん顔だった。仕方なく、アオイの向かいの席に残りの人達は座った。

「ねぇ、アンジェ。私、ここで暮らすの??」
「当たり前だろ。お前は、伝説の花嫁なんだからな。この王宮に迎えさせてもらう。そうじゃないと、女神ユリエルから雷でも落とされる」
「ユリエルが〜??そんなことしないよ。ユリエル優しいもん」
「はいはい。そう思っとけ」
　アンジェに抗議をしたアオイだが、適当に流された。実は、伝説

の花嫁とユリエルから雷を落とされるという言葉はただの口実にすぎなかった。アンジェは、アオイに王宮・・・・・否、自分の傍にいてほしいから自分の住んでる場所に住まわせたかったのだ。
「テキトーに流された！！　でもさ、そもそも“伝説の花嫁”ってなんなの？？」
「あぁ、まだ話していなかったね。料理もまだ、来ないし説明をしようか」
「うん。お願いします」

「この国に限らず、この世界の王族や皇族は全員恋愛結婚をしなければならないというめちゃくちゃな決まりがあるんだよ。それなのに、初代のこの国の皇帝は二十歳になっても恋のお相手が一人もいらしゃらなかった。
性欲求を解消する相手は、ちゃんといたらしいんだが本気になるお相手がいなかったそうだ。全然、恋愛する気配のない皇帝を心配して親友であった神官長が女神ユリエルに祈りを捧げた。そうしたら、女神ユリエルが一人の女性を異世界から召還してくれた。
こうして、皇帝はその女性と恋に落ち結婚した。まぁ、皇帝だけではなくその神官長や他の親友の人達も揃って恋に落ちた。幸い、この世界は皇族や王族は多夫多妻制だったから全員が結婚できた。
それから、二十歳以上になっても皇帝が恋をしない場合は女神ユリエルに祈りを捧げることになった。“伝説の花嫁”という名の由来は、まったく恋愛する気配のなかった皇帝を恋に落とした功績をたたえてらしいけど、よく分からないんだよね」

留まらせるための理由（後書き）

やっと世界の説明がちょっと出てきました。
例えちょっとでも出せれてよかった。

これから頑張ってもっと出せれるようにしたい・・・・と思います。

愛してるの言葉（前書き）

今回は番外編です。
本編も進んでいないのに等しいわけですが書いちゃいました（笑）
棗くん視点です。
楽しんでいただけたらうれしいです

愛してるの言葉

（可愛くて愛しい、オレの葵。いつになったらお前は、オレの気持ちに気づくんだ？　もしかしたらお前は、鈍いから一生気づかないかもしれないな）

いつもの休日。
棗は、葵と2人でゆっくり過ごしていた。両親は、忙しいらしく休日も関係無く会社に行った。
（まぁ、オレには父さんと母さんが休日いなくても別に良いけど。葵と二人きりの時間が増えて逆に、嬉しいし）
幸せな時間を棗と葵は過ごしていたが、昼を食べ終えそろそろ昼寝でもしようかと話している時、この幸せな時間を壊す邪魔な人間が現れた。
「なつめー、なんか彼女さん来たよ？」
「は？　彼女？オレに？？」
「うん。本人がそう言ってるから。玄関にいるから、待たせちゃダメだよ？」
インターホンが鳴ったからと、リビングから出て行った葵は問題を抱えて戻ってきた。
（オレに“彼女”ねぇ。どこの誰だ。そんな勘違いをしてる馬鹿な女は）

玄関に行くと化粧が濃く、距離があっても臭ってくるようなキツい香水をした派手な女が立っていた。しかし、棗にはまったく見覚えがなかった。
「あ～！！　やっと、来たぁ。棗、おそーい！！　ずーっと———

――」
「オレに何の用？」
女の言葉を遮るように言った。棗は、イライラしていた。本来なら、今日のような休日に来客等はあまり来ないので、葵の傍にずっといることができる大切な時間なのに邪魔をされて機嫌は最悪に悪い。

「何って、デートしよ！　私たち、恋人なんだから」
「恋人？笑わせんなよ？　オレはキミの彼氏になった覚えはないし、ましてやキミがオレの彼女？　ありえねぇーから」
「どういうこと！？」
「わからないの？　オレは、キミのことを何とも思っていない。他に大事な女がいるから。それに、オレ言ったよね？　一回だけの関係だって。それでも良いと言ったのはキミ」
（まぁ、オレが大事に想っててもあいつは鈍いから全く気づかないのがショックだけどな）
「な、何よそれ！！　ベッドの中では、優しい言葉も言ってくれたし大事に扱ってくれたから私は他の人達とは別なんでしょ！？」
“他の人達とは別”？　何を言ってるのかな？　キミも前の女達と同じだ。それに、オレはキミの名前も残念ながら覚えていない。ということで、帰ってくれるかな？　今、オレにとって一番大事な時間を過ごしてるからものすごくキミ、邪魔なんだよね」
「もういいわよ！！」
女は、わめくだけわめいて出て行った。本当に、最初から最後までうるさいだけの女だった。

「あれ？　もう話終わったの？？　それで、結局あの女の人は棗の彼女？」
ひょっこりとリビングの扉から葵が顔を出した。
「終わったよ。いや、違う。勘違いされてこっちは、いい迷惑だ。

一回だけの関係だって最初から言ってあるってのに。あーまじ、あの女ムカツク。だれが、あんなめんどくさそうな女と付き合うかっての」
「だよねぇ。ちょっと、棗の趣味を疑うとこだった。それにみんな、いつも優しい棗に騙されて関係持っちゃうんだよね。きっと」
葵は、軽く笑った。そんな笑みに、棗は癒される。
「そんなのは、騙される方が悪い。まぁ少し、イライラしてたけど葵の顔見てたら癒されてきた」

棗が笑うと、葵はちょっと苦笑していた。
「だから、そういう笑顔は彼女にしなよ。好きな子いるんでしょ？」
何回目よ、このセリフ。とぶつぶつ葵は言っている。
（いつ聞いても、このセリフはオレの胸に突き刺さるな。いい加減に、葵がオレの気持ちに気づいてくれないかな・・・・・）

「良いんだ。オレは、お前を世界で一番愛してるから」
そう言いながら、手招きをすると素直にリビングから出てきて棗の傍まで行く。そんな葵を、可愛いと思いながら抱きしめた。
「ちょっと棗？」
「何？？」
「それは、こっちにセリフ。なんで、抱きしめられてんの？私」
「オレが、葵不足だから。さっきの女と話してるので、エネルギーを使い切ったから充電しないとな。オレのエネルギーの源は葵だから。ってことで、葵。ホントに昼寝をしよう？」
「何それ。でも、まぁいいよ。しよっか。私、さっきから眠かったんだ」
棗は、あくびをする葵の手を優しく引っ張りリビングに入りソファーベッドを用意し、その間に葵は毛布を持ってきた。準備ができたところで、ベッドに入り葵を自分の方へと抱き寄せた。葵は、おとなしくされるがままになっていた。

「おやすみ、葵」
「ん。おやすみぃ、棗」
葵は返事した後、すでに寝ていた。
（いつも、あどけない寝顔をしてるな。そんなトコも、可愛いと思ってしまうオレは相当重症だな）
「葵、愛してる。今までも、そしてこれからも葵だけを一生愛し続けるよ。オレの一生を葵にあげる。だから、早くオレの気持ちに気づいてくれよ。そうじゃないと、理性が効かなくなってオレは本能のまま葵を押し倒しちゃいそうだから」
そう言って、葵に額に口付けを落とし少し抱きしめている力を強めて棗も眠りについた。

愛してるの言葉（後書き）

鈍いって哀しいことですね（笑）
棗くんの気持ちにまったく気づいていない葵ちゃんでした。

次は本編に戻ります。

選べない

アオイは、話を聞いていて一つ疑問に思ったことがあった。
「ねぇ、皇族が多夫多妻制なんでしょ？　だったら、さっきの話だと何人とも結婚できるのって皇帝だけじゃないの？？」
そう。皇族だけが、何人とも結婚できるのに皇族ではないその女の人は何人とも結婚しても良いのか？という疑問が思い浮かんだのだ。
「ボクも、よくは知らないんだけど女神ユリエルが認めたらしいんだ。彼女が召還した人間は全員は、この帝国でもっと偉い皇帝よりも高い位に位置しこの世界で女神ユリエルの次くらいに偉い位置にいる。それだったら、皇族と同じように多夫多妻制で良いかって事になったらしい」
「てきとーだね」
「だねぇ。もちろん、アオイも女神ユリエルに召還された人間だからこの世界で二番目に偉いから多夫多妻制ね」

（今、コイツ気軽に“多夫多妻制”って言った・・・・。こっちは、一夫一婦制で育ってんだからいきなり言われても正直無理だわぁ）
一瞬だけ、かなり気軽に言ったクリスに対して殺意が目覚めた。
が、すぐに消えた。それはアオイの常識が、この世界で通じないことを理解し始めたからだ。
（ユリエルが言うには、この世界には魔法あるらしいし、電気通ってなさそうだし、城なんてなかったし。私の常識が、どんどん音を立てて崩れてく――――――）
「結婚については、ゆっくり考えてくれればいいよ。最初の花嫁は皇帝達を選んだけど、必ずしも恋に落ちる訳じゃない。
ボク達はこの中から選んでほしいけど、アオイが自分の意思を持ってアオイ自身が決めればいいよ」

「ありがと。正直、今選べって言われても無理だから助かった。会って全然時間が経ってないし、アンジェ達がどんな人達なのか分からない限り選べない」
「分かってるよ」
クリスの言葉に、アオイは本当に安堵した。今のままでは誰も選べない。アンジェ達に事を、名前と役職くらいしか知らないから。そんな人達と結婚なんてアオイには絶対にできない。

「じゃあ、次はこの世界の時間とかの――――――」
「お食事を運んで参りました」
またもやクリスの説明は、リサーナによって遮られた。リサーナは、そんなことを気にせずに料理を運んできた。色とりどりの料理が出てきた。
「あのね、リサーナ。今、ボクがアオイに世界の説明をしていたんだけど？」
「まぁ！　まだ、説明をしていなかったんですか！？　ですが、早くお召し上がりになられませんと皆様すでに仕事を始めてますよ？」
「それは本当か！？」
「はい」
リサーナの言葉に、アオイを除いた全員が顔をしかめた。
「アオイ、悪い。時間がないから、説明がこれ以上できそうにない」
申し訳なさそうに、クリスは言うがそれほどアオイは気にしていなかった。
「気にしないで。食事を優先させた方が良い。話に聞いたところ、みんな重役に就いてるみたいだからみんながいなかったら、他の人達が困るでしょ」
アオイはにこやかに笑う。そんなアオイを見て、アンジェ達はほっとした。
「そう言ってくれると助かる。リサーナ、アオイの部屋は？」
「殿下の部屋の隣に用意させていただきました」

「用意が良いな。アオイを連れて行ってやってくれ。それで、着替えさせたりして俺たちの代わりに世界の説明と皇宮の案内を頼んだ」
「お任せくださいませ。アオイ様、こちらへどうぞ」
「はい。じゃーね！！」
リサーナが、アオイを連れて行った後アンジェがカイン達にねちねちと部屋のことで嫌みを言われ続けたのは言うまでもないことだった。

「どうぞ。こちらでございます」
「えぇー！！！！　ここですか！？」
「何か問題でもございましたか？　もしかしてもっと大きな部屋がよろしいのでしょうか？　でしたら他の大きな部屋を用意いたしますけれども」
「いえ！！　いいです。ここで良いですから、本当にもっと大きな部屋を用意するなんて言わないでください！！」
案内された部屋は、高校などの教室よりも遙かに大きくて広かった。純庶民のアオイは、リサーナの言葉に泣きかけた。
（これより大きい部屋なんて絶対に無理！！）
「かしこまりました。それからアオイ様に専属の侍女を一名付けさせていただきます。普段は、その者がお傍におりますのでなんなりとお申し付けください。他の侍女は、交代になりますので」
「分かりました」
その時、扉が勢いよくドンドンと叩かれた。
「まだですか！？　わたし、早く姫様にお会いたいです！！　ですから、早く紹介してください！！」
元気よく聞こえた声にアオイは驚く。リサーナは、はぁ。と額に手を当てながらため息をついた。

「申し訳ございません。専属侍女に選んだ者が扉の前で待っているんです。コニーデ、入ってきなさい」
「はい！！」
返事と共に入ってきたのは、笑顔が眩しいほどに輝くアオイとさほど変わらないような少女だった。

選べない（後書き）

なんかアオイちゃんとクリスくんの会話が主で他の人が全員出てないよ！？
やっぱりみんな勝手に動き回るのが好きなんだね（泣）

攻防戦

「初めまして、姫様！！　わたしは、今この時から姫様の専属侍女になりましたコニーデ・マーレルと申します。よろしくお願いいたします。どうか、仲良くしてください！！」
「コラッ！！　仲良くしてくださいじゃないの！！　精一杯、お世話いたしますでしょ！？」
「ですが、母様！！」
「ここでは、“母様”と呼ぶんじゃありません！！」
「はっ！　申し訳ございませんでした。しかしですね、リサーナ様。まずは、仲良くならなければ精一杯お世話しても空回りするだけじゃないですか！！」
「・・・・・それもそうですね」
「でしょ！！」
　あまりにもすごい速さで行われていく会話に、アオイは呆然と立ち尽くしているほかなかった。が、面白かった。アンジェ達の会話（何を話しているのかは分からなかった）やそこにリサーナが加わった時の会話も面白かったが、この世界に来てこの二人の会話がなぜだか一番面白かった。
　そんなアオイに気づいた二人は、はっとし頭を下げた。
「申し訳ございません。みっともないところをお見せしてしまい・・・」
「いえ、大丈夫ですよ？　だから、顔を上げてください」
「ひ、姫様！！　なんとお優しい！！」
　コニーデは、頬を紅潮させうっとりとした目でアオイを見た。
「いや、あの、優しくないですよ？　それと私の事は“アオイ”と呼んでください。もちろん呼び捨てで！　あと、敬語もなにしてください」

「まぁ！　わたしに敬語なんて不要です。では、わたしのことを“コニーデ”もしくは“コニ”と呼び捨てでお呼びください」
「そうしたら、私の言った通りにしてくれる？」
「二人きりの時だけでよければ」
「ありがと！！　嬉しい。これからよろしくね、コニ！！」
「こちらこそよろしくね、アオイ！！」
アオイとコニーデは、仲良く手を取り合って微笑んだ。アオイに、この世界で初めて友達ができた瞬間だった。

「さっそく、仲良くなったところでアオイ様にはお風呂に入っていただきます。コニーデ」
「はい、お任せを。さぁ、こちらですよ」
有無を言わさずコニーデに連行されたアオイであった。風呂場では、「いやー！！　一人で入れるから来ないで！！」、「何を言いますか！！　入浴の手伝いをしない侍女は、侍女とはまったく言えないのですよ！！　ですからアオイの入浴を手伝わせてもらいます！！」という攻防戦をしていることが簡単に予想できる叫び声が上がった。結局、コニーデに一人で入ることを認めてもらえなかったアオイは、風呂場から出てきた時点でヘトヘトになっていた。

「次は、お着替えですよ。こちらに」
リサーナにつれられ、大きなクローゼットの前までやってきた。中を開くとあらゆるドレスやらワンピースやらが入っていた。
「どれにしましょうか」
「これはどうでしょうか！？」
「いいわねぇー。こっちは？」
「それもいいですね」
嬉々として選ぶ二人にアオイは、自然とため息をついていた。

（もう好きにして！！って感じだわ）

「これにしましょう！！」

「はい！！　絶対、よくお似合いになります！！」

「アオイ様、これにしました」

そう言って、リサーナ達が出してきたのはチュールとスカラレース重ねでふんわりラインのスカートデザインのフェミニンなワンピースだった。色はローズパープル。それに合わせて、靴や小物を出してくる。むき出しの肩では、寒いだろうとショート丈のレースボレロも出してくる。

（これって、いつ用意したんだろ・・・・・）

ふと疑問に思ったが、聞けるような雰囲気ではなかったのでまたの機会に聞くことにした。

「ほんとーにお似合いです！！」

「ステキ！！」

着替えた後、化粧などなどをリサーナ達（いつの間にか、ほかの侍女さんもいた！！）にやってもらい今はようやく終了した。アオイ自身は、自覚をしていないが整った顔立ちをしているので化粧をしたら、さらに磨きがかかったように綺麗になった。

張り切って化粧等を施したリサーナ達は、次々にアオイを褒め称えていく。中には「自分は、なんて良い仕事をしたんだ！」とうっすら涙を浮かべながらアオイをほめる人もいた。

「これから毎日が、楽しみです！！」

「え？　まさか、毎日こんな感じに着飾るの！？」

「もちろんです！！　安心してくださいませ、アオイ様。わたくし達に、全てお任せください！！　わたくし達が、着せ替えにん・・・・・いえ、アオイ様がさらに美しくなられますよう誠心誠意お選びいたしますので！！」

リサーナ達は、目を輝かせ握り拳を作り熱弁していた。
「これからが、楽しみです！！」
「わたくしたち頑張ります！！」
他の侍女（コニーデ含み）は、これからの毎日に心を躍らせていた。反対にアオイは、
（ちょいまてー！！！　この人着せ替え人形って言おうとしたよ！？　つまり、何？　これから毎日、私は着せ替え人形にならなきゃなの！？）
そのことを想像するだけで、アオイはげっそりとした。
「ではアオイ様、参りましょう。皇宮の中をわたしがご案内します」
コニーデに導かれ、皇宮探検にアオイは出発した。

攻防戦（後書き）

アオイちゃんＶＳコニーデちゃん
勝者はコニーデちゃんです（笑）

誤字脱字など「この言葉の使い方違うだろ！！」とかありましたら
こっそりと報告お願いします。
良いですか！？こっそりですよ！！

本音がだだ漏れ（前書き）

第１４話あたりのコニーデちゃん視点です。

なんていうか激しいかも？

本音がだだ漏れ

母様・・・・いえ、リサーナ様についに召還されたという伝説の花嫁様の専属女官にと早朝に命じられた時は心臓が止まるかと思ったわ。

正直まだ、経験の浅いわたしがなっても大丈夫かしら？とか心配事がたくさんあった。

けど、召還された姫様に早く会ってみたいという気持ちの方が強かったかもしれない。

扉の前で、待たされて我慢できずについつい

「まだですか！？　わたし、姫様にお会いしたいです！！　ですから、早く紹介してください！！」

なんて言っちゃった。

しかも、その後リサーナ様との言い合いも見られちゃったし。

あれは、恥ずかしかった。

頭を下げた後優しい声で、

「いえ、大丈夫ですよ？　だから、頭を上げてください」

って言われて頭を上げた時、初めて姫様のお顔を見たわ。

見た瞬間、なんて綺麗な方なんだろって思ったの。

話してみたら、なんと「名前を呼び捨てで。敬語もなし」って言われてすっごく驚いたわ。

だった、そんなこと初めて言われたんだもの。

今まで、見てきた方々はなんて言うのかしら・・・・・・

自信たっぷりで、化粧が厚くて、無駄にうるさくて本当に最悪だ

ったけどこの方は、そんなところが一つもない。

それに、私の直感がこの方は良い方だって判断した。
私の直感って、あまり外れることないんですもの。
だから、信じることにしたの。

入浴の時、恥じらっていて可愛かったわ。
それに、体の体型が素晴らしいの！！
締まってるトコは締まってて、出てるトコは出てるんですもの！！
ほどよく筋肉がついていて、無駄なお肉がないんですよ！？
なにかしていらしたのかしら？
・・・・・あぁ、ホントにうらやましい。
あら、うっかり本音が。

お着替えの時だって、アオイに似合う服がたくさんありすぎてリサーナ様と選ぶのに時間がかかってしまったわ。
でも、ここにある服全部似合うから選ぶのに時間がかかるのは仕方ないことだと思う。

リサーナ様曰く、ここにある服の代金は全てアンジェ殿下達持ちらしいです。
なんでも、皆様方はもうアオイに惚れてしまったらしいの。
まぁ、それも無理ないわ。アオイは、ステキで可愛らしいもの。
でも、当の本人であるアオイは全然自覚していないらしい。
殿下達が、「鈍すぎるだろ」とか「無自覚すぎる」って呟いていたのをリサーナ様は聞いていたみたい。
それなら、とことん無自覚のアオイに振り回されれば良いと思うわ。
だって、そうなったらしばらくの間は侍女仲間達の間での話題は

これに決まるじゃない？
それで、殿下達の過去話がきっとたくさん出てくるはずだわ。それを、アオイにこっそり教えてアオイがどんな反応をするか見てみたいんですもの！！
きっと今のままだと、「サイテーね、みんな」とか言うんだと思うなぁ。
アオイが、最初の方であっさりと殿下達に「サイテー」って言ったらしいからね。
たぶんアオイがいたら、わたし達侍女の間の話題にも困らないと思う。
なんかいつも、わたしの予想を良い意味で裏切ってくれるもの。
アオイが、全然自覚しないから殿下達は自分がお金を出したものでアオイを着飾らせてそれを、他の人に見せびらかしたいらしい。
うーん。これって、確実に他の人がアオイに手を出さないようにするための牽制よねぇ。というか、むしろ独占欲？？

とにかくわたしには、そういう独占欲とかってよく分からないけどアオイを着飾らせる機会をくれたのには大変感謝しています。
これからの毎日が、楽しみだわ。
だって、磨けば磨くほどアオイは綺麗になるんですもの。
本当にアオイって、自分では自覚していないようだけど綺麗だわ。
化粧映えもするけど、化粧をしていないままでも良いくらい。
肌も綺麗だし。
そこら辺にいるような、傲慢女や化粧が濃すぎて元の顔が分からない女よりもステキ。あーいう女は、遊ばれて終わりってのが多いみたいだし。まぁ、どんなに傲慢な女でも化粧が濃すぎる女でも家柄さえあれば男は寄ってくるんだけどね。そーいう男は、ろくでもないって決まってるわ。
おっと、本音がだだ漏れでしたね。
とにかく、アオイは絶対に家柄がなくても綺麗ですごく魅力的だ

から男が寄ってくると思うの。
だから、わたしは精一杯アオイを守れるようにしなくちゃ。
あ、殿下達がいる時は殿下達に守ってもらうわよ？
それくらいもできなきゃ惚れた女を口説く資格なんてないわ！！

他の侍女達も出てきて、みんな嬉々としてアオイを着飾らせてる。
こんな機会、前までなかったもんね。
皇宮内で、女を抱くとか皆様しなかったから。
んーでも、もし皇宮内でそんなことがあったとしてもわたし達は絶対にその人達の世話はしなかったでしょうね。
だって、ろくでもない女に決まってるもの。そんな人のお世話なんてまっぴらだわ。
また、うっかり本音が出てしまったわ。でも、これだけは言っておくわ！！
世話をしたくないっていうのは、私だけでなくリサーナ様をはじめとする侍女達全員の意見だから！！
その点、アオイはお世話のしがいがあると思う。
だから、みんな嬉々としてるのよ。

でもね？
そんな侍女仲間に人達でも、どうしても譲れないことがあるの。

それは、アオイの専属侍女は絶対にわたしって事！！

これだけは、絶対に譲れないわ！！
まさに、一目惚れ？だもの。

こんなステキな人に、仕えられる機会なんて滅多にないし。

さて、アオイに皇宮案内をしなきゃ。
最初に案内するのは神殿にしよう。
そして、女神ユリエルの像の前でアオイに伝えよう。

専属侍女の誓いを。
わたしは、この命が尽きるまでの忠誠をあなたに誓います。
あなたが、困っているならわたしはそれを全力で解決できるように努めます。
あなたが、どこに行こうとわたしはそれに付いていきます。
わたしは、唯一無二の主人をあなたとします。

本音がだだ漏れ（後書き）

いやぁータイトル通り本音がだだ漏れだよ、コニーデちゃん（笑）
まさしく、アオイちゃん大好き人間の完成ですね。

次回は、ついに皇宮案内もしくはそれをしながらの世界の説明になるかと。

神官長と侍女の言い争い（前書き）

なんの捻りもないタイトルです（汗）

神官長と侍女の言い争い

「最初に、神殿に行きたいんだけど良いかな??」
「うん、良いよ」
「ありがと!!じゃ、出発」

アオイと、コニーデは神殿を目指して歩き出した。高いヒールの靴だからか、最初は何回かこけそうになったが今は慣れたように歩けるようになった。

神殿は、どうやら皇宮の一番端にあるらしくいろんな場所を通り過ぎていった。
頻繁に人とすれ違い、そのたびに頭を下げられたのでアオイもペコリと頭を下げといた。そのたびに、コニーデから「頭を下げなくてもいいの!!」って叱られた。頭を下げられた本人達は、顔を赤くし足早に去っていった。
(そう言われても、しょーがないでしょ。日本人の習性として、もう身についちゃってるんだもん。頭を下げられたら、下げ返さないと失礼じゃん。こっちじゃ、違うのかなぁ??
あーでも、なんとなく違うっぽいよね。ちゃんとした上下関係あるみたいだし。なんか、アンジェの伝説の花嫁? として召還されちゃったから立場は、私のが上って事だよね・・・・。はぁ、めんどくさそうだわ)
あれこれ、考えても結局最終的に結論は“めんどくさそう”にいくアオイだった。

「着きましたよ」

コニーデととりとめのないことを話しながら歩き、その合間合間に周囲を見ていたりしていたのでアオイは気づかなかった。前方に、大きな神殿があることを。
「うわ、デカっ！！」
（まさに、神殿って感じ。なんか、よくファンタジー漫画とかに出てくる神殿と一緒だよ！！）
「大げさだよ。さぁ、入ろっか」
ちょっと、コニーデに笑われアオイは恥ずかしかった。
案内されたのは、全体的に白で統一されている広い部屋で前に女神の像が建っていた。
「こっち」
手を引かれ、女神の像の前までやってきた。
「神殿は、当たり前だけど基本的に神官しかいないわ。今の神官長は、アオイも知ってるはずだけど、クリス・ブルーバル様。そしてこの部屋は、この神殿で唯一女神ユリエルの像が置かれてる部屋なの。
だから、儀式とかでよく使われるわ。例えば、結婚式とか。たぶん、アオイの召還もこの部屋で行われたはずよ。とても神聖な場所らしいから。」
「へぇー。そーなんだ」
口では感心したように言っているが内心は、
（こんなに、デカイのにユリエルの像が置いてあるのがこの部屋だけって・・・。ケチケチしてるんだなー！！もっと生産すればいいのに。あ、でもそれだとありがたみがなくなるのか？　うーん、それだと大量生産はまずいよねぇ）
なんてことを思っていた。
その時、コニーデがアオイの目の前で跪いた。

「わたくしは、貴方様が困っている時、悩み苦しんでいる時それを全力で解決できるように努めます

わたしくは、貴方様がどこへ行こうとそれに着いていきます

わたくし、コニーデ・マーレルの唯一無二の主を貴方様としこの命が尽きるその時まで絶対の忠誠を誓います

この誓いを貴方様に立てることをお許し願いますでしょうか？」

「へ？」

「どうか、許していただけるのなら“許す”と。許さないのでしたら“許さない”とはっきり仰ってくださいませ」

「えーっと。許す。許します！！　だから、子犬が縋るよーな目で私を見ないでぇぇぇぇ！！」

「ありがとうございます！！　これからは、ずっとお傍にいますから！！」

捨て犬が「ボクを拾って！！」とでも言うかのように縋ってくる目と同じ目をしたコニーデにアオイは敗北した。

ニコニコ笑顔でアオイの両手をギュッとコニーデは握ってくる。

（あぁ、可愛いからもうなんでもいいや）

「なにか、楽しそうだね」

（・・・・ん？　何か、声が聞こえた？？　でもこの声って――――）

「ボクを、無視するなんて良い度胸だね、アオイ？」
すぐ後ろにクリスがいた。しかし、アオイはコニーデの笑顔をぼけーと見ていたので気づかなかったのだ。
「ひぃぃー。く、クリス！？　む、無視だなんてめめめめ滅相もない！！　あは、あはははは」
アオイは、引きつり笑いになったが笑っておいた。なんといっても、今クリスが醸し出している雰囲気が怖いのだ。

「ふーん。それならいいけど」
どこか拗ねたようなクリスは、怖い雰囲気を醸し出していたとは思えないほどかわいい。口には、決して出せないが。
「クリス様は、どうしてこちらにいらっしゃるんですか？　お仕事の方は大丈夫なんでしょうか？」
訳「クリス様、こんなとこでなにしてんだよ。はやく仕事に戻れや」

「なんか、アオイの悲鳴みたいなものが聞こえてきたから来てみたんだよ。アオイに何かあったら大変だろ？」
訳「アオイの悲鳴が聞こえてきたからね。ボクのアオイに何かしたんじゃないよね？」

「まぁ、アオイ様になにかあるなんてありえませんわ。アオイ様に、専属侍女の誓いを申し上げて許しをいただいていたんです」
訳「アオイに何かあるわけないでしょ！！　それにアオイは、貴方のじゃないわ！！　わたしのよ！！　なんたってわたしは、アオイの専属侍女なんだから」

普通の会話のはずなのに、どうしてもアオイには裏の言葉のような声が聞こえてきてしまう。
（うへぇー、こえーな）

「そうだったんだ。ところでアオイ？」
「は、はい？」
ぼんやりと会話を聞いていてたので反応が少し遅れた。
「なんで、神殿に来てるのにボクのところへ最初に来てくれなかったの？　神官達が、『かわいい女性達がいらしてるんですよ』って嬉しそうにボクのとこに言いに来るからもしやと思って来てみればアオイの悲鳴はするしで驚いたんだからね？」
「えっと、あのーごめんなさい？」
「本当に悪いと思ってる？？」
「も、もちろんデストモ！！」
まだ疑っているかのようにクリスはアオイをじーっと見つめる。その視線に居心地が悪そうに自分の視線を明後日の方向へやる。

「さぁ、アオイ様。次の場所に参りましょう。神殿は、ここ以外案内するところもございませんし」
「コニーデは、ボクとアオイの逢瀬を邪魔する気かな？？」
「滅相もございません。ですが、アオイ様には案内しなくてはならない場所とまだ、この世界のことを何もお教えしてませんので時間がないんです」
「そう。それは、とても残念だ。だけど、アオイのためを思うなら引き留めちゃダメだね。じゃ、ボクは仕事に戻るとするよ」
「仕事、頑張ってね」
「ありがとう、アオイ。あと、アオイは可愛いから男には十分注意すること。浮気とかしたらボク、その男を殺さないっていう自信ないから。神官長に人殺しさせないでね？」
クリスは、アオイに近づくと軽くアオイの頬に口付けさっさとどこかへ消えた。

「なっ！　クリスのばかぁ！！」
あとには顔を赤くしたアオイと、イラっとしたような表情をしたコニーデが残された。

「あの男、わたしのアオイに何してくれちゃってるのよ！！　ダメよ？　そんなに無防備な姿を男に見せちゃ！！・・・・・・・・・・・それに独占欲丸出しじゃない。でも、アオイは気づいてないみたい。いい気味だわ」
「ん？　最後の方なんて言ったの？　よく、聞こえなかった」
「ううん。なんでもない」
コニーデは、ハンカチを取り出しごしごしと痛いほどクリスが口付けた頬をこすった。
「い、痛いよ？」
「あら、ごめんなさい。まぁ、これでいいわ。さぁ、次に行きましょう」
「はーい。次は、どこ？」
「うーん・・・・・・あ、騎士団と魔法士団の詰め所に行きましょうか」
「そこって、ヒューズとセシルがいるところ？」
「そうだよ」
「行ってみたい！！」
次の目的地は、騎士団と魔法士団の詰め所とし歩き始めた。神殿を出る時、多くの神官達に見送られたのがアオイには謎だった。

神官長と侍女の言い争い（後書き）

アオイちゃん、専属侍女をゲットしました（笑）
子犬みたいな目で縋られたら、拒否なんてできません！！
しかも、公私の区別をはっきりつけてるコニーデちゃん。
えらい！！↑当たり前か（笑）

地球に似てる（前書き）

長くなってしまったので分割します。
なので、騎士団&魔法師団での話がもう1話続きます

地球に似てる

「実は、騎士団と魔法士団の詰め所って神殿の反対側にあるからけっこう歩くことになるの。だから、この世界の話をしておくね」

（オイオイ、なんでこの子は反対側にあるとこにつれてくのかねぇ。まぁ、いいけどさ）

「この世界は、一年が三百六十八日で四つの月に分かれてるの。春夏秋冬で月が分かれてて春が、花冠（かかん）の月。夏が、迅雷（じんらい）の月。秋が、豊穣（ほうじょう）の月。冬が、白雪（しらゆき）の月というわ」

コニーデは、どんどん歩きながら説明をしていく。アオイは、コニーデの話に集中しすぎて周りの景色を見忘れていた。

「一月、九十二日。一週間は、七日。それぞれ、白の日・黄の日・赤の日・青の日・緑の日・紫の日・茶の日・ってなってるの。

一日、二十四刻。それぞれ一の刻から二十四の刻まで。

ちなみに今日は、花冠の月の緑の七十五日。時間は、九の刻半を少し過ぎたとこ」

（へぇー、ほとんど地球と一緒なんだ。それなら、普通に暮らしてけるかも）

「この世界には、魔力が存在して魔法があるわ。弱い人から強い人まで様々ね。それでも、持ってないっていう人はいないわ。

それぞれ属性があって、炎・水・土・風・光・闇。必ず、その人にあった属性があるの。私は、風だったわね。

あと、光と闇属性はほとんどいないわ。

今のところ、光は数人。闇は、たしかいないらしいわ。

まぁ、魔力とか魔法の話はセシル様にまた今度教えてもらうとい

いわ。私も、詳しく知ってるってわけでもないし。さて、これくらいかしら。何か、質問ある？」
「うーん、今のところないかも」
「分かった。なにかあったら言ってね」
「はーい」
「あ、着いたわ」
　いつの間にか、目の前には騎士団の鍛錬場と思われるところで多くの人達が打ち合いみたいなものをしているようだった。鍛錬所の隣には、詰め所と思われる家のような小屋のような建物が建っていた。奥の方には、魔法師団の鍛錬所のようだ。魔法師団の詰め所が見あたらないので、騎士団と共用しているということが分かる。

「ここが、騎士団と魔法師団の詰め所があるとこ？」
「そうだよ。で、知っていると思うけど騎士団長は、ヒューズ・レイタス様。魔法師団長は、セシル・レイタス様。
　目の前に見えるのは、騎士団の鍛錬場で奥の方に見えるのは魔法師団の鍛錬場よ。今は、だいたいの人が朝の鍛錬中」
「あ、女の人もいるんだね」
「えぇ。女性も、志願すれば騎士にも魔法師にもなれるの」
「すごいね！！　私も、志願すればなれるかな！？」
　無理だと分かっていながらもアオイは、好奇心から聞かないではいられなかった。そんなアオイに、コニーデは苦笑した。
「アオイは、絶対に無理ね。殿下が許すとは思えないし、他の方々も許さないと思うわ」
「だよねぇ」

「「アーオーイー！！！」」

「ん～？」
声がする方向を向けば、ヒューズとセシルがアオイたちのところへ走ってくるところだった。他の騎士達は、鍛錬を止めアオイとコニーデを注目して見ていた。
「ね、ねぇ、ちょっとコニーデ。なんか、わたし達のこと見てるよ！？　何で！？　なんか、わたし達した！？」
「落ち着いて。大丈夫。アオイが伝説の花嫁で、かわいいからみんな見てるのよ。伝説の花嫁が、召還されたことは一気に広まったから」
「そーだよ。アオイが、可愛いから！！」
会話に割り込んでいた、ヒューズは勢いよくアオイに飛びついた。その反動で、アオイはこけそうになったがセシルが支えてくれた。そのせいで、ヒューズとセシルに挟まれるような形になってしまった。つまり、サンドイッチ状態だ。

「ちょっと！　びっくりしたじゃんか。」
「ごめんごめん。その前に、なんでこんなに可愛い格好してるの！？」
「は？」
「そーだぞ！！　アオイが、可愛いのにさらに可愛い格好したら『どうぞ襲ってください』って言ってるもんじゃねーか！！　ほら、見てみろ。みんな、見てるぞ」
「いや、私に言われても・・・・・・・」
いまだに放してもらえず、なぜか二人から説教（？）を受けているアオイは、助けを求めるようにコニーデを見る。コニーデは、了解したというように頷いてからアオイに手を伸ばしグイっと力ずくで助け出した。

「なにするのかな？　今、僕達は大事な話をしてるんだけど？」
「それは、アオイ様がなぜ可愛い格好をしているのか？　というこ

とについてですよね。それなら、文句は言わせません。まだ、店始めをしていなかったにもかかわらず仕立て屋を強引に開店させて服を購入されていたのは、どこのどちら様ご一行でしたか？」
「っう。それは、俺たちだけど！！――――――」
「服の採寸も、アオイ様が寝てるうちにされたんですよね？」
「いや、あれは――――」
「どのように、実用すればいいのか分からないようなものまでありましたね。まぁ、それは早急に処分させていただきましたけど」
「・・・・・」
　とうとう、ヒューズとセシルはコニーデによって黙らされた。アオイには、コニーデは可愛らしい笑顔をしながら言葉を発しているけれど背後には悪魔がいそうなほど怖かった。

（この笑顔、さっき見たクリスの笑顔に似てる！！　やべぇ。めちゃめちゃ怖い！！　ヒューズもセシルも顔が真っ青だ。クリスとのやりとりしてるのを見て思ったけど、コニってクリスと絶対に同類だよ。あれは、同族嫌悪ってやつだよね・・・・・あれ？　今、コニって私が、寝てる間に服の採寸って言った？　ヒューズ達が・・・・・？　それって――――）

「へ、変態ーーーーーーーー！！」

地球に似てる（後書き）

コニーデちゃん、黒いです。
クリスくんと同類の匂いが・・・・・。
フツーに、負けてしまった哀れな2人でした。

もう1話続くわけですが、早めに掲載できるようがんばります！！

騎士団とは（前書き）

あれれ？
終わらない・・・・。

騎士団とは

「寝てる人間に、何するのよー！！！！！！！」
気づけば、アオイは叫んでいた。

「で、でもね？　魔法で採寸したから！！」
「魔法でも何でも、採寸したことには変わりないじゃない！！　私の、全てのサイズ知ってるってことでしょ！？　恥ずかしいじゃない！！」
「恥ずかしがるほどのサイズじゃねぇーだろ。今着てる服を見て分かるけど、出てるトコは出てて、締まってるトコは締まってるじゃんかよ。それの何が問題なんだ！？」
「そーいう問題じゃないの！！　心の問題よ！！　見ず知らずの人に、知らない間に採寸されてみなさいよ。本当に、恥ずかしいんだから」
「見ず知らずの人じゃないよ」
拗ねたように、セシルはそっぽを向くがアオイはギロッと睨んだ。
睨まれたセシルは、「ひぃ」と小さい悲鳴を上げた。

「何は、“見ず知らずの人じゃない”よ！　あの時の私からしたら、十分に見ず知らずの人よ。それか、もしくは不審者！！分かった！？」
「だけど・・・・・・」
「わ・か・り・ま・し・た・か？」
「は、はい」
結局は、アオイの剣幕に負けた。その時、拍手がわき起こった。
見てみると、アオイ達を先ほどから見ていた騎士団や魔法師団の人達のようだ。

「さすがは、姫様です。自分は、感動しました！！　今まで、団長達を黙らせれる人なんて陛下方しかおられなかったのですが、今のやりとりを見て本当に感動いたしました！！」
「そうです！！　いつも、横暴な団長達が姫様にけちょんけちょんにやられてしまうなんて。とてもいい気味・・・・・ゴホン、感動ものです」
そう言って、涙を本当に流す人まで出てきた。

（今、この人達“いい気味”って・・・・・。よし、そこはあえて突っ込まないようにしよう。うん。それが良い）

「「キミたち、本当に言い根性してるよね。鍛え直してあげなきゃ」」
ニコニコ笑いながら、アオイから離れどんどん近づいていく。喜んでいたはずの人達は、一斉に顔を真っ青にした。そして、視線だけでアオイに助けを求めた。
アオイはため息をつきながら、
「ヒューとセル？　やめなさい」
と2人を呼び止めた。

「だって～」
「あいつらが～」
「はいはい。“だって～”でも“あいつらが～”って可愛く言ってもダメ。みなさんを、困らせちゃダメだよ？」
「困らせてない」
「あのね～無自覚でも、困らせてるの。わかった？」
「はい」
しゅんとうなだれている2人の姿は、まるで犬のようだなとアオ

イは思った。そのせいか、無性に頭を撫でたくなったので2人の傍に行きよしよしと撫でてしまった。また、その行動に感動を呼んだのであった。
撫でられてる本人達は、顔を赤くしていた。
「ん？顔が赤いけど大丈夫！？熱でもあるんじゃ・・」
「だ、大丈夫だよ！！」
「うん。熱なんてないよ！！」
「そう？ならいいけど」
納得がいかないような顔で2人を見るアオイだが、当の二人はハハハと笑っていた。
この時、騎士団。そして、魔法師団の人間は悟った。
姫様は、鈍感なお人なのだと。

「ところで、ここに来たって事は何か俺らに聞きたいことでもあったのか？」
「ううん。コニに、ここの案内をしてもらってたところだよ。まぁ、聞きたいことならあるけど？　騎士団って主に何をするところなのか？　とか魔力についてだとか、他いろいろと。ここに来るまでの間、いろいろ教えてもらったけどやっぱり専門の人に聞かなきゃわかんないこともあるし」
「そうか。じゃあ、今のうちに教えとくか」
ヒューズ達は、団員達に鍛錬を続けとくよう言いながらアオイとコニーデを鍛錬所の隅の方にある長いすへ座らせた。
「まずは、騎士団の話からで良いか？」
「うん」

「騎士団は、って言っても魔法師団もそうだけどこの国の軍なんだ。だから、役割は城下の警備と皇宮の警備そして、陛下やアンジェみ

たいな皇族の護衛。
城下の警備は、城下にも騎士団と魔法師団の詰め所があって、そこに配属されている人間で行われてる。もし、増援が欲しい場合はここに連絡が来て増援を送ることになってる。
皇宮の警備は、ここにいる人間で交代制行われている。だから、今ここにいるのは総員の半分近くしかいないな。
皇族の護衛は、その本人と契約を躱した者が行うんだ。例えば、陛下なら陛下と契約を交わした者が護衛に付く。陛下やアンジェの護衛にはこの国、屈指の人間が付いている。俺やセルは、団長だから全体を見なくちゃいけないから、契約を交わせないんだ。
もちろん、アオイは伝説の花嫁として召還されたから陛下よりも高い位にいるから、護衛を付けなきゃいけない。自分と契約する人間は、自分の意思で決めるんだ。基本的に、護衛を申し込まれたらよっぽどの事情・・・・・まぁ、俺らみたいな立場の人間以外は断るということをしない。
騎士団と魔法師団から一人ずつ選ぶ事になるが中には、ほんの一握りだが騎士団と魔法師団の両方に所属している者がいる。つまり、そいつらは剣とかの武器を扱う騎士団としての能力も高いし、魔力も高いってことだ。
そいつらを選ぶ場合は、一人で良いんだ。といっても、そーいう奴らに限ってクセがあったりして手懐けるのが難しかったりするんだけどな。
これで、騎士団の話は終わるけど何か質問は？」
「ん～。護衛って、別に男女関係無く選んで良いんでしょ？」
「もちろんだ。」

「私が、選んだ人に反対はしないよね？」
「たぶんな。何せ、自分の意思で選ぶんだ。俺たちは、よっぽどの事がない限りアオイの意思を尊重するよ」
「分かった。ありがと。今のところ、それ以外質問はないよ」

「じゃあ、次は僕の番だね」

騎士団とは（後書き）

ごめんなさい＞m（__）m＜
嘘つきとどうか罵ってください！！
分割して書いたらもう1話必要になりました（汗）

じ、次回こそ騎士団&魔法師団への訪問を終わらせてみせます！！

魔法とは（前書き）

お、終わったー！！

魔法とは

「アオイは、どこまで魔法とかのこと知ってるの？」

「んーっと、魔力は弱い人から強い人までみんな持っていて、持ってないっていう人はいないっていうことと、属性があってそれでその人にあった属性があって、今は、光が数人で闇はだれもいないってことかな」

「大まかなところまでは、知ってるって事だね。そうだねー、たしかに人には一つ属性があるけどその属性しか使えないって事はないんだよね」

「っってことは、例えば水の属性の人は水系の魔法だけ使えるって事じゃなくて、風でもなんでも使えるのって事？」

「そういうこと。簡単に言うとね、自分の属性は簡単に考えるだけだったり無意識でも扱えるけど、自分の属性ではない他の属性は色々と頭の中で構成を考えなきゃいけないんだ。

例えば、自分の属性が炎だったとしたら炎は、火を付けたいなーとかこの肉を焼きたいなーとかそんな感じのことを考えれば、すぐに炎が出てくるんだ。

でも、他の属性だと、どんな形態が良いのか。そして、形態を頭の中に浮かべたりしなきゃいけないんだ。

だから、みんな極力自分の属性以外は使わないようにしてるんだ。そうじゃないと、頭が疲れちゃうからね」

なかなか面倒でしょ？とセシルは、アオイに笑う。

（たしかに、これは面倒だわ）

「あと、例外もあるんだ」
まだ、あるのかとアオイはつい顔をしかめてしまった。
「そんな顔しないで。とても簡単だから。例外は、光と闇の属性はどうやっても使えないって事。
あ、もちろん光か闇の属性の人は使えるよ？
でも、光の属性の人は闇は使えないし闇の属性の人は光は使えない。
そのどちらの属性でもない人は、どう頑張っても両方の属性は使えない」
「なんか、色々とややこしいね。でもさ、魔法って何に使うの？やっぱり、闘う時とかに使うものなの？？」
アオイが、知っている魔法とはファンタジー小説の物語に出てくるものであり、話の中ではアオイが言った通り闘いの場面くらいしか魔法が登場してこないのだ。
「それもあるけど、日常生活の中でも使うよ。
火を灯したりとか、水を汲んだりとか、洗濯物を乾かしたりとか僕達の日常は多くの魔法で溢れてるんだよ」
「へぇー。それは、便利だね。でも、形態を想像するのに疲れないの？」
「うーんとね、これは慣れかな。一回想像すると、次に使いたい時はそれを思い出すだけで良いし。ところで、アオイの世界には、魔法はなかったの？」
（この質問、やっぱりきたか。まぁ、自分の世界では当たり前のことを知らないんだから当然気になるよね）
内心、苦笑いをしながら
「うん。なんせ私の世界じゃ、魔法とは非科学的存在だったからね」
と答えた。
（次の質問も予想はできるけど、なんて答えたらいいかわかんないや。説明すると長くなりそうだしなぁ。ここはいっちょ“アレ”でいきますか）

「“非科学的存在”？　なに？　それ。」
「科学ではない存在ってこと。私の世界には、魔法の代わりに科学という存在があるんだ。多分、魔法よりも便利だよ。科学とは、何かっていうことについても説明してあげたいけど長くなるから割愛ね！！」
　アオイが言っていた“アレ”とは、割愛のことであった。何か説明が面倒だったりする時とか、長かったりする時はよっぽど重要な内容でない限りアオイは、この割愛を重宝して使っていた。初めて出会った時は、なんて便利なんだ！！と感動していた。
　だからか、アオイの周りの人間はよっぽどの事がない限りアオイには説明を求めないようにしていた。アオイが、一を聞いて十を知ることができる人間が多かったのだ。
　その筆頭は、棗だということは言わずとも知れていた。棗の場合、アオイが何かを言う前に察するということが多かったが。

「そっか。長くなる説明は、勘弁してもらいたいな。寝ちゃうかもしれないから」
「寝ちゃうって事は、長い話を聞くのはダメって人間？」
「まぁね。頑張っても、寝ちゃうんだ」
　アハハと可愛く笑っているが、寝ちゃダメなんじゃないか？とアオイは思った。

「なんとなーくだけど、魔法のこととか分かった気がする。ありがとね」
「どういたしまして。あと、これだけは言っとくね？　早く、護衛は決めておいた方がいいと思うよ。アオイを、良く思ってない人とか絶対いるから。きっとその人達が、手を出してくると思うんだよね。僕達で、守れる時は良いけど守れない時だってあるから」
「ん。分かった」

真剣な表情で言うセシルに、こちらも真剣な表情で返事をしたアオイだった。

「アオイ様、そろそろお昼の時間でございますよ？」
「もうそんな時間なんだ。じゃ、行こうか」
「はい」
「ってことで、行くね？　色々と話してくれてありがとう」
「じゃーな」
「また後でね。何か聞きたいことがあったら、いつでも聞いてくれて良いからね」
　セシル達には手を振り、団員の人達にはペコッと頭を下げ騎士団詰め所と魔法師団詰め所を後にした。

「あのさー、行こうかって言ったのは良いけどこに行けばいいの！？」
「そんなことだろうと思った。部屋に戻って食事をするのとわたしみたいな、皇宮仕えが食事をする食堂に行くのどっちが良い？」
「食堂が良い！！　大勢の人達と食事する方が絶対楽しい！！」
「了解よ。じゃ、行きましょうか」
「うん！！」
　目をキラキラと輝かせながら、歩き出したコニーデの後をアオイは付いて歩いて行った。

魔法とは（後書き）

よし！
次は、食堂です！！
アオイちゃんが、大好きな食事の時間になります。

気さくな方です

「ここが、食堂よ」

騎士団と魔法師団の詰め所から、歩き始め皇宮内に戻ってきて歩きに歩いて辿り着いたのは扉のないとてつもなく大きな部屋だった。

中に入ると、やはりお昼時だからか多くの人達が食事を取っている。ちらっと、誰が入ってきたのかを見ようと視線を向けた人達は持っていた食べ物を床に、ポロッと落としてしまった。

皇帝や皇太子の賓客は今のところラシュしかいない。しかもラシュは男であって女ではない。そういう趣味を、ラシュが持っていたら分からないが。

しかし、顔を見ればラシュでないことがすぐにわかる。だから、まだ正式に発表されていないが、アオイが誰なのかが一発で分かった。

誰が、予想するだろうか。

伝説の花嫁として、召還された人物が使用人や団員が使う食堂に来るということを。

誰も予想することは、できなかっただろう。

そんな驚きから、アオイを食堂にいる全員が驚きの目で見つめる中、コニーデとアオイは入ってきた。アオイは先ほどの、騎士団と魔法師団で注目されるのに慣れ視線を気にしないでいた。

「ここ？」

「そーよ。皇宮で働く人が、全員ここで食事を取るから部屋が大きいのよ。さ、行くわよ。自分で好きな食べ物を取ってくる形式だから、自分の食べたいものをどんどん取ればいいわ」

（なるほど。バイキング形式なわけね）

コニーデに、皿を渡され食べ物の前に行ったらアオイの目はキラキラと輝きだした。
なぜかというと・・・・・・・・・・・・全て美味しそうだからである。朝から、歩きっぱなしだったためアオイの空腹度は絶頂にあったのだ。

「なにこれー！！　おいしそう。好きなだけ、食べて良いの??」
「もちろん。腹を膨らませないと、次の仕事に支障を出してしまうもの」
「そう」
アオイは、コニーデに話しかけながらも食べ物を取るのをやめない。
「アオイ、今はこのくらいにしましょうか。足りなかったら、また取ってくればいい話だし」
「だね」
アオイは、皿を三枚持って。コニーデは、皿を二枚持って席に移動した。

「隣、良いですか??」
「はははははは、はいいいいい！！！！！！　どどど、どうぞ！！
あの、自分今すぐどきますから！！」
「なぜ?　そのままでいいですよ?　もしかして、私がなんかよくわからない伝説の花嫁だからかしら?　それだったら気にしないでください。私にしたら、不本意なので。それともあれかしら?　私が隣で、食事をするのがいやなのかしら?　それなら、わたし達が別の席に行くから安心してください」
「めめめめめめ、滅相もない！！　よよよよよ、よろしいのでしたらぜひぜひ食事をご一緒させてください！！！！！！！！　いえ、自分はご一緒したいです！！！」

「もちろんよ。アオイ・ヒノよ。よろしくね？」
ニッコリ、アオイが笑うと閑散としていた周りに一気に人だかりがあっという間にできた。アオイは、こうして使用人や団員の心を掴んでいったのであった。

「姫様、僕もご一緒させてください！！」
「姫様、わたくしも！！」
「ずるいわ！！　わたしもお願いします！！」
人が多すぎて、喧嘩になってしまった。

「お、落ち着いて？　みんなで、食べれば良いでしょう？」
「「「「「「「「「はい！！！！！」」」」」」」」」
結局、机を移動させたりして仲良く食事にありつくことにした。
食事の合間、それぞれアオイに帝都の城下町の話をしていた。

「へぇー。楽しそうね。行ってみたいわ」
「姫様の行くような場所じゃないですよ！？」
「いいじゃない。私は姫って呼ばれるような人間じゃないし。だから、みんなも私の事を“姫様”って呼ばないように。それに、私がいた世界じゃ、私は庶民だったのよ？　今日からさせられるような、豪華な生活は好きじゃないのよねー。だから、行ってみたいの」
「そうなんですか？　全然、そんな風には見えません。では、なんとお呼びすれば？？」
「アオイって呼んでくれたら嬉しいな」
「いいのですか！？　もちろん、呼ばせていただきます！！　でも、アオイ様。アオイ様が、行きたいと仰っても殿下方がお許しになられないかと・・・・・・」
使用人達が言いたかったのは、アンジェ達が絶対にアオイの外出を認めないだろうということであったがアオイは、
「なんだ、そんなこと」

と軽く笑った。

「多少、強引にでもアンジェ達の許可を取ればいいことよ。ねぇ、コニ？」

「そうですね」

その、“多少、強引”の中身が知りたかったが本能が、「聞くな！！」と警告を出していたので誰も聞くことはなかった。

「城下町に行く時は、誰か案内してね？」

「もちろんです！！　喜んで案内させてもらいますよ」

「よろしく」

ふんわり笑いながら、食事を再開してくアオイだが、食べていく内に顔色がみるみる変わっていった。やがて完食したアオイは立ち上がり、

「料理を作っている人達は、どこにいるの？？」

「あっちに、見える厨房ですけど・・・・？」

アオイは、走って厨房に飛び込んだ。

「アオイ様、どうかされました？」

そう問いかけてくるコニーデを綺麗に無視して、

「料理長はどなた？」

「私ですけど・・・・」

奥の方から、ガタイの良いおじさんが出てきた。

「まぁ、貴方が！！　朝の、食事を作ったのも貴方達？」

「はい。そうですが、なにかありましたでしょうか？」

「私、すごく美味しい！！　って伝えたいなって思って。本当に、美味しいからいくらでも食べれちゃうわ！！　だから朝、アンジェ達の分まで食べちゃったの」

アオイの言葉に、料理長達は笑いが飛び交った。

「あぁ、それでリサーナが朝食の追加を頼んできたんですか。ここ

で働くようになって、二十五年くらい経ちますが初めてでしたよ。朝食の追加をされたのは」
「ご、ごめんなさい。二度手間を取らせてしまって」
「いえ、嬉しかったですよ。私どもの、料理が認められたような気がして」
「本当に美味しかったです！！　でも、今ここで食べた料理の方が朝食よりおいしさ倍増でした。朝食は、冷えてて、それでも美味しかったです。
　だけど、やっぱり温かい料理の方が美味しかったです。また、食べに来たいと思ってるんですけど良いですか？」
「もちろんですよ。お待ちしてます」
「ありがとうございます！！」
　料理長の言葉に、何度も頷いて厨房を去った。

　食堂では、どうしたのかとハラハラしながら使用人たちが待っていた。
「あ、アオイ様！！　どうなさったんですか？？」
「料理が美味しかったって伝えてきただけだよ。これから、昼食はここで食べようかな」
「ぜひ、そうしてください。きっと滅多に、アオイ様に会うことはないと思うので」
「それなら、そうさせてもらおう。良いよね？コニ」
「いいと思いますよ。ダメと言われても、無理矢理にでも許可を取ればいい話ですから」
　サラッと怖いことを言ってのけたコニーデに、一歩後退した人達が多くいた。アオイは、気にせずうなずき
「それもそうね」
　と同意した。

　同意しちゃうんですか！？

と思ったが、先ほどの発言の時のように脳内で「言うな！！」と警告が出ていたので何も言わなかった。

「じゃあ、また来るわ。皇宮内で会ったら声をかけてね？」

「「「「「「「はい！！！！！」」」」」」」

その返事に、満足したアオイはコニーデと共に食堂をあとにした。

こうして、使用人や騎士団、魔法師団の中で、

アオイ様は、気さくな方で自分たちのような低い身分の者にでも、声をかけてくれるステキな方だ

と話が広まっていった。

そしてアオイが、昼食を取りに来る時間の食堂は前よりも人で溢れるようになった。

気さくな方です（後書き）

ということで、アオイちゃんは皇宮で働く人達の心を掴んじゃいました。

しかも、厨房に飛び込んで行きましたw

まぁ、アオイちゃんらしいかも？

誤字脱字など色々ありましたらこっそり↑ここ重要！！

教えてください

図書室では静かに

「うーん。次は、どこに行こうか？行きたいところとかある？」
「行きたいところか。あ！　図書室とかある？」
「あるわよ。じゃ、行こうか」

次の行き先を、図書室としてアオイとコニーデは歩き始めだした。
道中、先ほど見た騎士団や魔法師団の人間に会い、笑顔で会釈をしたりした。
コニーデが、一つの大きな扉の前で立ち止まり扉を開けた。アオイが、中を見ると本がずらりと並んでいた。

「本が、いっぱいある！！！」
「そうよ～？　なんか、何代前かの皇帝陛下と皇妃陛下が本が好きらしくて集めたらしいからね。だからすごく、いろんな種類の本があるのよ。絵本から歴史書まで。皇宮にいる人間は自由に、読めるから人気なの」
「へぇー。すごい。私、読書とかすっごく好きなんだ。ねぇ、コニーデ。本見てもいい！？　読んでも良い！？」
「もちろん、どうぞ」
コニーデの言葉を聞いた途端アオイは、子供のようにはしゃぎながら本棚に向かった。コニーデも、気になる本があったのを思い出しその本のところに行き手に取り読み始める。

一方アオイは何冊も本を手に取っていた。種類は、歴史書から恋愛物までさまざまだった。今は机にそれらを積み重ねて一冊ずつ集中して読んでいるところであった。
だから、アオイは隣に誰かが座ったのに気づかなかった。
一冊読み終えたところで、視線を感じ隣を見ればラシュがじっと

アオイを見ていた。

「あれ？ラシュ、いたんだ」
「まぁな。ずっと前からアオイを見てたんだけど、全然気づかないからちょっと寂しかったなー」
「ごめん。私、読書に集中してたから全然気づかなかった」
「ひでーな」
ラシュは、嘘泣きをするがアオイは、それが嘘泣きだと分かっているからかただ笑っているだけだであった。

「そんなことより、なんでラシュはここにいるの？」
「えっ！？　まぁ、それはその・・・・・・。」
言いにくそうに、視線を泳がせるラシュだが遠くから誰かが「ラシュ殿下！！　どちらにおいでなのですかー！？」と叫んでいるのが分かる。
（ふーん。もしかして、逃げてきたのかな？　ってか、第三皇子でも仕事あるよね！？　この国にいてもいいの？？）
考えれば考えるほど、謎は深まってきたような気がする。

「ラシュ様、侍従の方がお探しになられていますが？」
そう言いながら、コニーデが姿をあらわした。
「何をしてるのかな？　ラシュは」
アオイは、なぜラシュがここにいるのかについて、確信を持っていたがあえて聞いてみることにした。

「実は、仕事から逃げてきました」
「コニ、ラシュの侍従の方を呼んできて」
「そんな・・・・・」
「ラシュ？　ちゃんと、仕事をしないとダメだよ？　“働かざる者

食うべからず”なんだから！！」
「なに？　それ」
「怠けて働こうとしない人は、ご飯を食べてはいけません。ってこと。だから、ご飯が食べたかったらちゃんと仕事しなきゃ。ね？」
可愛く笑いながら首をかしげるアオイは、破壊力抜群の可愛さを持っていた。
ラシュは顔に、熱が集まるのを感じながらもコクコクと何回も頷いた。
「ラシュ殿下、こんなところにいらしゃったのですね。ささ、仕事に戻りますよ」
こうして、ラシュは侍従と一緒に仕事へ戻って行った。

「ねぇ、コニ？　今、何時？？」
「今は、十五の刻を少し過ぎたくらい。ここに来たのは、十三の刻半を少し過ぎた頃だったか一刻半ここに居たことになるわね」
「そっか。なんか、集中して本を読んだら小腹が空いた」
「それなら、お茶の時間にしましょうか」
「いいねぇ。じゃあ、侍女さん達誘ってお茶会でもしようか」
「アオイが、そう言うならそうしよう。部屋に戻ろうか」
「読みたい本も持ってて良い？」
「えぇ。アオイなら良いでしょ」
五冊くらいの本を抱えて、アオイはコニーデと共に自室へと向かった。

自室に戻り、コニーデが「お茶会の用意とみんなに声をかけてくる」と言い出てったのでアオイは持ってきた本を読むことにした。
読むには、歴史書のような物だ。
主に伝説の花嫁に関して書かれている、薄っぺらい本であったの

ですぐに読む事ができた。

本曰く、
今までに召還された花嫁の数は四人である。
花嫁の容姿は様々だが、髪は金髪がほとんどで一人赤髪がいた。
初代花嫁は、皇帝や皇帝の親友らと結婚した。
二代目は、中級貴族の騎士と結婚した。
三代目は、皇帝と宰相と結婚した。
四代目は、一般庶民と結婚した。
全員、恋愛をして結婚をした。
死ぬまで、幸せに暮らした。
必ず、皇帝と結婚しなければならないということではない。
結婚相手が伝説の花嫁ではなくても、花嫁を召還すれば一年以内に相手は見つかる。
そして、花嫁は自分の意思で伴侶を選ぶ。
これは、強制されてはならない。

以上。

（なーんだ。絶対に、皇帝と結婚しなくちゃいけないってわけじゃないんだ。
ん？　あれ？　でも、アンジェって皇帝じゃないよね？　だったら何で、伝説の花嫁を召還する必要があったんだろ？
これって、皇帝が二十歳以上になっても相手がいない場合でしょ？　だったら、アンジェは皇帝じゃないんだからおかしい。
また、後でクリスか誰かに聞いてみよう。
まずは、お茶会だ。きっと、侍女さん達なら、アンジェ達の女性歴とか知ってそうだから絶対聞かなきゃ。リサーナさんの話じゃ結構遊んでるみたいだし）

コニーデがカートを押しながら、「失礼します」と言い入ってきた。後ろには、数人の侍女さん達がコニーデのようにカートを押しながら入ってきた。

図書室では静かに（後書き）

ラシュくん、アオイちゃんに怒られました。

次回は、お茶会です。

みんなの女性歴が登場の予定ｗｗ

１日から全然進んでませんが多分、一気に日数が跳ぶと思います（汗）

女の噂話は恐ろしい

アオイの隣には、誰が座るのかなど揉めにもめたがなんとか収まり、お茶の時間が始まった。

集まった人数は、コニーデを含めて四人。その中には、リサーナもいた。

（あれ？？　リサーナさんって、侍女頭っていう役職に就いてなかったっけ！？　こんなとこにいてもいいのかなぁ？　でも、いるんだからいいんだろうな。うん。そう思っておこう）

アオイは、疑問をそのまま口には出さず自分の心の中にしまっておくことにした。

「本日は、お招きありがとうございます。本当は、もっと多くの者が「行きたいです！！！！」と言っていたのですが、それではアオイ様の迷惑になるだろうと考え、公正な籤（くじ）の結果、私どもになった次第でございます」

「そうだったんですか！　もっと、多くの方が来てくださってもよかったのに。でも、それはまたの機会で良いか。そうだ！　これから、お茶の時間は侍女さん達としよう！！　女同士でしかできないような話もあるだろうし。いいですか！？」

「もちろん、喜んで！！　アオイ様にそう言っていただけて嬉しいです」

「よかった」

そう言いながら、紅茶に似たお茶……あとから聞いたら紅茶で良いそうだ……を一口飲んだ。

コニーデ達は、遠慮をしているところをアオイが無理矢理飲ませ、食べさせをしたのでそこからは自分から飲み食いするようになった。

「それで、私どもに何か聞きたいことでもあるんでしょうか？？」

「うーん。まずは、アンジェ達の女性歴が知りたいですね。そうだ

なー、カイン辺りからで！！」
誰からにしようかを、まったく考えていなかったので適当に考えついた名前から言っていくことにした。

「カイン様ですね。分かりました。あの方は、年下から年上まで範囲が広いって噂ですね」
「確か、十六歳から四十五歳くらいの方まで様々ですね」
「まぁ、一回抱いたらポイってするらしいですけど」
「それでも、相手をしてもらいたいっていう人が多くいるらしいですよ」
「それと――――――――」
「それは、どうかと思うよ」
結果、カインは守備範囲の広い変態らしい。
それを聞いたコニーデ達は、絶対違うと思いながらも何も言わなかった。

「次は、アンジェ！！」
「アンジェ様ですか。上級の娼婦館のもっとも高級な人が多いって話ですね」
「なんでも、『貴族の女は、後々になって面倒だ。』と仰ってるそうですわ」
「でも、時々は同年代の方には手を出してるみたいですよ」
「あとは――――――――」
「なんて、言ったらいいかわかんない」
結果、アンジェは完全に何を言ったらいいか分からないらしい。
それを聞いたコニーデ達は、同意するように頷いていた。

「次は、クリス！！」
「分かりました。クリス様ですね」
「未亡人や、年上の奥方との噂が多いですね」
「年上の方々って、経験豊富って感じの方が多いんです。クリス様は、『経験豊富な方を鳴かせて、落とすのが良いんだ』と仰っていたという話もありますね」
「1回で堕ちなければ、何度でもってことですね」
「他にも――――――――」
「うわぁー。悪趣味！！！」
結果、クリスは熟女好きで悪趣味らしい。
それを聞いたコニーデ達は、何か違うと思いながらも訂正はしなかった。

「じゃ、ラシュ！！」
「ラシュ様はですね、遊んでいるのか遊んでいないのかよく分からない方なんですよ」
「えぇ。女性といたという噂を聞いても、その日は下町の酒場でいろんな人達と飲んでいたとい目撃情報が入ってきますし」
「毎回、そういう事があるので色々疑惑があるんですが、一向に分からないんです」
「でも時々、女性の匂いがして帰ってくるときもあるそうですわ」
「あと他は――――――――」
「不思議だなぁ。ラシュは」
結果、誰にもバレたくない相手と遊んでいるらしい。
これを聞いた侍女達は、首をひねったが詳しい事は何も分からないので反論はしなかった。

「最後は、ヒューズとセシル！！」

「ヒューズ様とセシル様は、一番遊んでいますね」
「身分は平民から貴族までと関係ないらしいですわ」
「『若いうちに、いっぱい遊んどかないと！！』って仰って外出されたという噂がありますね」
「二人で抱くこともあれば、別々で違う方を抱くということもあるらしいです」
「あとはですね――――――――」
「えっと。色々と面倒くさそう」
結果、ヒューズとセシルは若いって良いなと思えるくらい遊んでいるらしい。
これを聞いたコニーデ達は、貴方も十分若いでしょ！！と思ったがあえて何も言わなかった。

「教えてくれて、ありがとうございました。後、皇宮内での人気ってどんな感じですか？」
「人気ですか。一番は、カイン様ですね。二番はグレース様で、三番目はアンジェ様で、四番目はクリス様で、五番目にヒューズ様とセシル様が入ってますね。ラシュ様は、隣国の方なので入ってません」
アオイは、ここで引っかかりを覚えた。それは、自分が知らない名前があったからだ。

「グレース様って？」
「お名前は、グレース・アンバーチェ。アンバーチェ伯爵家の嫡男です。珍しい、騎士団と魔法師団の両方に属しているお方です。今は、なんでも幽閉されているらしいです」
「幽閉！？　なんで？？　なんか、悪いことでもしたの？？」
「それが、まったく分からないんです。なぜ、幽閉されているのか。そして、幽閉されている場所も分かっていないんです」

「皇宮内でも見目麗しく、とても人気があったので皆残念がってますよ」
「そうなんですか」
アオイは、これ以上の情報はないだろうと思いあとは何も聞かなかった。
その後は、華やかにお茶の時間を過ごしたのであった。
そして夕食の時間に、現れたアンジェ達をアオイが白い目で見て、「自分たちは何かをしたのか！？」とアンジェ達が狼狽えていたのは別の話だ。

アオイは、その日の夜に夢を見た。
何もない黒一色の景色の中に、アオイは一人で立っていた。辺りを見回しても誰もしない。そして、
『――――イ。アオイ。はやくおいで。待ってるから』
という声が、どこからか聞こえてきた。ただでさえ、黒一色で平衡感覚も掴めなくて恐怖心が出てきているというのに、この声がさらにアオイの恐怖心を煽った。
「誰！？」
『アオイ。さぁ姫君、はやくおいで。ずっと、来てくれるまで待ち続けているから』
声にならない悲鳴をあながら、アオイは飛び起きた。

女の噂話は恐ろしい（後書き）

本当、女の人の噂話はバカにできませんよｗｗ
今日の話題の生け贄はアンジェ達でした。
さて、次回は誰になるかな？↑ニヤッ

これで、ようやく長い１日が終わりました（汗）
物語も、動き始めますよ。　　多分

恐怖と安心（前書き）

珍しい連続更新ですｗｗ

恐怖と安心

あれから寝るまでの時間は何ともないが、寝ている時にはあの夢を見るようになった。そして、夢を見るようになってから二，三日が経過した。

アオイは、怖くて誰かに相談することができなかった。

その間にあったことといえば、アオイがアンジェに頼み歴史などこの世界のことを教えてくれる先生が来るようになった。

アオイは、その人のことを“ハンス先生”と呼んでいる。人の良さそうな物知りなおじいちゃんだ。

この二人はあっという間に意気投合し今では、先生と生徒という関係よりもおじいちゃんと孫という関係になりつつある。

ハンスはアオイの世界の話に興味を持ち、アオイはハンスが話すこの世界の話に興味を持った。

もはや、授業と言うよりはおしゃべりという形にもなりつつある。

そんな会話の中で、

なぜアンジェは、皇帝でもないのに伝説の花嫁の召還を行ったのか？

というアオイの、疑問も解決された。

答えは、とても簡単だった。

現皇帝は、そろそろ息子に帝位を譲って皇妃と隠居生活をしたい。

だけど、息子にはまだ妃が誰もいない。

皇帝は、「それでは、支えになる人がいないのと同じだ！！　現に、私は皇妃がいたからここまで来れたんだからな！！」と惚気な

がら
「妃を見つけてくるまで、帝位は譲れない。だから、あと一年で見つけろ！！！」と言ったらしい。
しかし当の本人は、「今まで見つけれなかったのだから、すぐに見るけられるわけないだろ！！　何考えてるんだ、うちの父親は！！」と憤慨しながら
「そうだ！　俺は、ちょうど二十歳を越えてるから伝説の花嫁の召還ができる。おい、クリス。召還してくれ！！」

こうして、アオイは呼ばれることになった。
（え？何、この理由。もっと、こうよく小説とかに出てくる王道的で素敵な理由というか大きな理由とかなんとかあると思ってた・・・・・・。なんか、色々と残念な気持ちになるわぁ）
ちょっと、自分が呼ばれた理由に夢みたいなものを持っていたアオイはがっくりと肩を落とした。
そして、その日の夕食時にアオイは恨めしそうな目でアンジェ達を見た。否、主にアンジェを見ていた。それに気づいたアンジェは、誰が見ても分かるくらいに落ち込んだ。「なぜ、自分が？」などぶつぶつ言っていたが、アオイはキッパリ無視をした。
周りはというと、腹を抱えながら爆笑していたことは言うまでもない。

そして、夢を見るようになってから4日目の夜。この日は、前の三日間とは決定的に違かった。
まずは、見える景色が違う。いつもは、黒一色なのに今は何も見えない。ただ、呼ばれているだけの感覚だった。
声の内容は、
『姫さん、聞こえてるんだろ？　ちょっと、オレがいる場所まで来

てくれねぇーか？』
　というもので、なぜかこの声を聞くとすごく安心する。
　だからか、アオイはその声の持ち主が呼ぶところへ行きたいと思った。でも、どうやって行けばいいか分からなかった。
『ただ、オレのところに来たいと願えば良いだけだ』
　声の持ち主のところへ行けますように。とアオイは願った。その瞬間、アオイの体はすでにアオイの部屋にはなかった。

「えっとー？　ここってどこ？？」
　辺りを見渡すと暗くてよく見えないが、誰かの部屋みたいだということが分かる。
「ここは、よく分からねぇーけど皇宮のどっかの部屋だよ。それより来てくれたんだな、姫さん」
　声がした前方を見ると、誰かが寝台に腰掛けていた。

「貴方、誰？？」
「オレ？　オレは、グレース。グレース・アンバーチェ」
「それって今、幽閉されているらしいグレース・アンバーチェさんと同一人物？？」
「まぁな。それより、姫さんに“さん”付けで呼ばれるのって恥ずかしいからやめてくんない？」
「じゃあ、グレースも私の事を“姫さん”って呼ぶのやめてくれる？」
「無理だな。オレの中では、お前という人間の呼び方は“姫さん”しかないからな」
「何その理屈。仕方ない。諦めてあげよう」
　そう言いながらアオイは、はぁとため息をついた。だけど、口角が上がってるのは隠せていない。

「で、グレースは何で私を呼んだの??　そもそも、何で幽閉されてるの??　って、本当にグレースは罪を犯したの??」
「結構、話は簡単だ。聞いてくれるか?」

恐怖と安心（後書き）

グレースくん出てきました！！
アオイちゃんは、悪夢に悩まされていますがそれはどうしてなのかなどは
また次回ｗｗ

先日、アルファポリス様に登録させていただきました。
そして、調子に乗って恋愛遊牧民様にも登録しようと思ったら、新規登録のサイトｉｎｄｅｘＵＲＬの作者名マイページＵＲＬで躓きました。
なんだそりゃー！？です。
だれか、ヘルプ　ミー！！！！です。

同じ属性

グレースは、アオイに手招きをし近づいてきたアオイを自分の隣に座らせた。

「この帝国には、過去に四人の伝説の花嫁が召還されたことは知っているか？」

「うん」

「そうか。なら話は早い。この世界のあるところにな、その伝説の花嫁と波長がよく合う女・・・・・つまり、気が合う女がいたんだ。しかも、四人とも同じ家の出身な。それが、オレの生まれた家である、アンバーチェ家なんだ。今回、伝説の花嫁を召還するにあたってアンバーチェ家の娘を姫さんの、侍女にでも友にでもしたかったんだろうな。

伺いが来た。だけど残念ながら今の、我が家には娘はいないんだよ。いるのは息子のオレ1人な。だから、オレがもしかしたら姫さんを誘惑するかもしれない。という疑いもあったからオレは、この部屋に幽閉されてるわけ。

なんたって、オレは伝説の花嫁とこの世でもっとも気が合う人間らしいからな」

そう言ったグレースは、豪快に笑っていた。少しも、自分が幽閉されていることを気にしていないようだ。

「グレースは、気にしないの？　幽閉されてることについて」

「ん？　まぁな。オレの属性のおかげだな。しかも、オレが外に出れるなんて考えてもないだろうから結界とかそういった類の物も張られてないしな」

「属性って、魔法の？？」

アオイは、小首をかしげて聞いてみる。

「あぁ。おかげでオレはいつでも外に出られるし、いくらでも情報を得られるからな。まぁ、外に出る時は姿を変えてるけどな」
「そんなことができる属性があるんだ？」
「姫さんも、聞いたことはあるはずだぞ」
「え？　なんだろ。外に出れて、情報も得れる・・・・・・。しかも、属性は一つだけだし。んー、炎と水と土ではなさそうだし。風？　でも、風で誰にも見つからないで移動はできないか。それじゃあ、光とか？　光なら、できそうだよなぁ。ねぇ、グレース。光？」
「残念。その反対」
色々とぶつぶつ言いながら結論を出したアオイだったが、あっさりと否定された。しかも、結論とは反対とまで言われてしまった。
（反対？　光の反対って――――――）

「――――――闇？」
「正解。オレの属性は、闇だよ」
「今は、誰もいないって聞いたけど・・・・」
「だって、誰にも言ってないし。言ったら、何されるかわかんないしな。――――――――――――――この世界の人間は、基本的に闇を嫌っているからな」
「え？」
後半の部分は、グレースの声が小さくて聞こえなかった。
「何でもねぇーよ。闇の属性を持ってるのは、オレだけじゃないぞ？」
「他にもいるの？」
「おう。オレの、目の前にな」
悪戯っ子のような目をしながらグレースは、きょとんとしているアオイを見る。次いで、アオイの目が大きく見開かれた。

「わ、たし？」
「そっ。姫さんも、オレと同じ闇属性。つっても姫さんの場合は、

その闇そのものって言っても良いらしいな」
「・・・・どういう意味？」
「姫さんは、誰かに呼ばれてるっていう夢見たことない？　なんか、『はやくおいで。来るまで、待ち続けるから』みたいなこと言われてるような」
「なっ！　なんで、知ってるの？？」
「女神ユリエルから聞いた。詳しくは、自分で聞けばいいと思う。オレも、よくわかんなかったから」
「何それ！！　ぜーったいに、今度会った時に聞いてやるんだから！！！！！」
「だから今度、その夢を見たら素直に呼ばれてる方に行ってみるか、その声を受け入れてみろ。そーすりゃ、大丈夫らしいからな。
　それに、姫さんが女神ユリエルが言っていたように闇そのものだから多分、闇が心地良いと感じるはずらしいんだ」
「へぇー。そーなんだ。分かった。そーしてみる。ねぇ、その話って誰にも言っちゃいけないの？」
「いや。誰か、言いたい奴でもいるのか？」
「うん。コニーデにね、言いたいかなって」
　アオイの言った相手が、グレースにとって予想外の相手だったのかグレースは瞬きを何度も繰り返している。
　そんな姿に小さく笑いながら、
「グレースは、アンジェ達の名前を言うと思ったのかな？」
「まぁな。でも、違ったみたいだな」
「うん。だってアンジェ達のこと、

信用してないから」

今度こそ、グレースは固まった。

「あ、でも間違えないで？　嫌いとかじゃないんだよ？ただ、コニみたいには信用してないだけ。

この世界に来てまだ日にちが経ってないし。アンジェ達のことを、私は知らなさすぎるから。

それに人間、何が起こるか分からない事の方が多いでしょ？だから、いつかは信用したいと思っても、まだ信用するわけにはいかない。

私はまだ、死にたくないしね」

「へぇ？姫さんって、人懐っこいと思ったら心の中では線を引きまくりなんだ。でも、その割にはコニーデだっけ？そいつのこと信用してるよね。

それと、この話をした時点でオレのことも信用してるって事だよね？」

「そうだよ。コニはね、私に専属侍女の誓いを立ててくれたんだ。だから、信用してる。

グレースは、私を裏切らないでしょ？なんたって、私とグレースはこの世でもっとも気が合う人間なんでしょ？」

先ほど、言われた台詞をそっくりそのままグレースに返す。そう

来るとは思っていなかったグレースは、腹を抱えて笑い出した。

「ハハハッ。その通りだな。オレは、姫さんを絶対に裏切れない。きっと、裏切ろうとしてもその考えとか丸分かりなんだろうからな」
「だよね。てことで、お願いしたいことがあるんだけど良いかな？」
「いいぜ。何でも、言ってみろ」
「確か、グレースって騎士団と魔法師団の両方に所属してたよね？」
「おう。優秀だからな」
「だったら私の、専属の護衛になってくれない？グレースが、護衛になってくれたら頼もしくて言うこと何もないんだけどなぁ～」
「それぐらいなら、良いぜ。でも、殿下達は許してくれんのか？」
ニヤニヤしたような顔でアオイを見るが、アオイにはなぜグレースがニヤニヤしているのかが分からなかった。

「大丈夫。人に許可を取るということにおいて私に不可能という文字はないわ！！！　ということで、心配は無用。私、帰るね。もう二の刻だし」
アオイは、先日コニーデからもらった首飾り型の時計を見た。花びらが二十四枚の一輪の花があり、一刻過ぎるごとに花びらが一枚ずつ消えていき一の刻半の場合は一枚消えてもう一枚花びらの半分程が消えるという仕組みになっている。二十四の刻が過ぎると、自動的に花は復活するらしい。
これを聞いた時アオイは、
（なかなか、不思議なものがあるもんだ）
と感心していた。
「分かった。任せたぞ」
「任されました。迎えに来るから。・・・・・・・・・って帰り方がわかんない」
「・・・・だろうな」
と笑いながらグレースは、左手を前にかざした。すると、細長い

ドーム状のような黒い物が床から出てきた。
「この中に、入って歩けば部屋に付くよ。これは、“闇の回廊（やみのかいろう）”って言って闇の属性の人間にしか使えない魔法な。
　また今度、教えてやるから練習な。そうじゃないと、迷子になったりするって事が姫さんの場合ありえそうだし」
「ひどいな。そんなことにはならないよ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・多分」
「やっぱり“多分”じゃぁねぇーか。じゃあ迎えに来るの、楽しみに待ってるぜ」
「そうしてて。じゃあね」
アオイは闇の回廊の中に入り、そこからまた一歩踏み出せば自分の部屋にいた。
(アンジェ達に言うのは、朝食の時間で良いか)
なぜか、全員必ず集まる朝食の時間にアオイはグレースの事を話そうと決めた。
　その日は眠りについたアオイは寝た時間が遅かったからか、それともグレースが呼んでいる夢を見たからかあの夢を見ることはなかった。

同じ属性（後書き）

グレース、憐れw
そんな理由で、幽閉されてたなんて・・・・。←作者が言うなよ！
実はアオイちゃんは、小さい頃からある人物に、「人を1日やそこらで信用しちゃダメ！！」としつけられてるんですw
そのある人もきっとそのうち登場するはず。

先日、ようやく恋愛遊牧民様にも登録することができました。
道のりは、果てしなかったです。
よく自分やれたよな。みたいなw

願わくば（前書き）

遅くなりましたが、お気に入り２００件突破記念の小説です。
突破に感動です！！
読んでくれている人がたくさんいて感動中ですｗｗ

今回は、カイン視点になっております。

願わくば

俺はだんだんイライラがたまってきた。
なぜかというと、

なんで、俺達の知らないアオイの情報をこいつらは知ってるんだ!?
しかも、こいつらさりげなく自分達の息子をアオイにって薦めてくるし。

話は、九の刻を過ぎた辺りからになる。

経済を司る大臣が書類をアンジェに渡しながら、
「殿下、この書類等にカイン様と目を通しておいてください」
そう言った。
ここまでは普通だった。いつもと変わらない光景だった。

なのに、
「姫様は、動物がお好きなんですね。厩舎に行ったら動物がたくさんいて、感動したらしいですよ?」
と言ってきた。

なんで、この大臣は俺やアンジェが知らないアオイの情報を知ってるんだ?

「なぜ、お前がそれを知っている??」

ちょうどアンジェが聞いてくれた。

良いぞ、アンジェ。俺の代わりにどんどん聞いてくれ。

「ここに来る前に、お会いしたのですよ。それで立ち話ついでに、『ここでの生活は、どうですか？』とお聞きしたら、そうお答えくださいましたから」

「何をやってるんだ、あいつは」

まったく仕方のないやつだ。

と言わんばかりにしているアンジェ、お前も仕方のない奴だってこと分かってるのか？

さっきから、黒い雰囲気がお前の周辺を漂ってるぞ。まぁ、俺も腹が立ってきたけどな。

「たしか姫様の結婚相手は、まだお決まりになられてませんよね？」

「あぁ。それが、どうかしたのか？」

「いえ。ちょうど、私には姫様と年の近い息子がいましてね」

おい、こいつ自分の息子をアオイの旦那にって勧めてきたよ。

一応、アンジェのために召還した子なんだけど。まぁ、皇族は多夫多妻制だけどな？

なるほど。アオイは、皇帝陛下よりも位が高い。すなわち、多夫多妻制でも良い。だから進めてくるのか。

「いらん。あいつは、俺のだ。手出しはするな」

コイツ、言い切ったよ。しかも、さっきまで黒かったのがどす黒いに変わっちまってるし。

でも、アンジェの言葉に俺のイライラ度がどんどん上がっていく。

「そうでございますか。それでは、諦めるほかありませんなぁ～」

そう言いながら、大臣は退出していったがあの様子では諦める気

はないようだ。
諦めるなんて、どうせ口先だけだ。ここにいる人間は、そーいう奴らばかりだからな。

今の時刻は、十六の刻を過ぎたところ。
はぁ。疲れた。ただ、大臣の話を聞いてアンジェと話し合って、結論を出していくだけのはずなのに疲れた。
しかも、めちゃくちゃイライラしてきた。
朝からずっと、執務室に来る人間は必ずアオイの事をほめていく。
ここまでは、俺も嬉しく思えるから良いんだ。
でもな？
アオイは、何が好きで元の世界では何をしていたかとかをべらべらとしゃっべってく奴らもいるんだよ。
その中で息子がいる奴らは「私に、息子がいるんですよ」と言っていく。
それを言われるたびにアンジェは、「あいつは、俺のだ」と言ってる。
俺は、宰相だからアンジェの言うことに毎回反論を言っていたら外見的にあまりよろしくない。と言っても、反論する時は反論するけどな。そうじゃなきゃ、この国は成り立ってかないからな。もちろん、陛下の意見にも反論する時はするぞ。でもなー、最近あの人は仕事をアンジェに任せっぱなしでほぼ隠居状態って言っても良いくらいなんだけどな。
まぁ、コイツが結婚するまで完全に帝位を退くことはしないらしいが。
だからアンジェのそれを聞くたびに、俺は、あいつよりも年上だ。

大人だ。我慢だ。と心の中で唱えてる。
だけど、やっぱりずっと我慢は無理だ。
しかもちょうど誰もいない。

「あのな、アンジェ。アオイはお前のじゃない事って分かってるよな？」
「それがどうかしたか？アオイは、俺の花嫁として召還したんだ。だから、いずれは俺のになる。それに、アオイに他の男が触れるのは嫌だ」

まったく、どうしてコイツはこんなにも嫉妬深いのか。前からの性格なら仕方ないが、コイツのこれはアオイが来た日からだ。
アオイに対してだけ、嫉妬深い。
コイツと同じような奴は、後一人いるけどな。

「アオイが、お前を好きになるとは限らない。それに、アオイのことを欲しいと思ってるのはお前だけじゃないんだ。少なくても、俺はお前のようにアオイの事を想ってるんだ」

俺にとって、アオイを見た時に芽生えた感情は初めての感覚だった。始めはこの感情がなんなのか、俺にはまったく分からなかった。
正直言って、女なんかどれも一緒だと思ってた節が俺にはある。
俺の顔を見たり、役職を知ったら媚びを売ってくるような女ばかりしか俺の周りにはいなかったからな。
けど、アオイは違かった。俺の顔を見ても、役職を知っても媚びを売ってくるような真似はしなかった。
それに、ナツメの話をしている時のアオイを見た時、イラっとし

た。
初めてその時に気づいた。
俺が、アオイに一目惚れをした。

ってことに。
しかも、アオイの事は全然と言ってもいいほど何も知らないのに、
もう引き返せないところまで来てる気がする。

異世界から召還されて来た娘。
どこに惹かれたのかんなんて、そんなの分からない。
それでも、俺はアオイに惚れてると断言できる。
もう、アオイしか考えられない。

愛してる、アオイ。
願わくばアオイが、俺を望んでくれることを願ってる。

そうなるように自分が、できることはするつもりだ。
初めてのことで、何をすればいいのかよく分からない。

違う経験なら山ほどあるのにな。
何をすれば良いのか分からないなりに、俺はがんばってみるさ。

願わくば（後書き）

あれ??
おかしいなｗｗ
この前、予告したのと途中から違うんだけど・・・・。
まぁ、それはいいか。うん。それで、納得しよう。

計算高く（前書き）

今回は、ちょっといつもより長めです

計算高く

本日のアオイの格好。
深みのある青と刺繍の対比が美しく、レースリボンも付いているドレス。丈は、膝下くらい。
アオイが本来持っている美しさをさらに引き出していた。その事に、アオイは全く気づいていないが。
今朝の着替えなどの時間、侍女達に
「朝食の席で絶対に許可してもらいたいことがあるから、（可愛くなんて無理だろうけど）可愛くしてください！！！」
と頼んだ。
それを聞いた侍女達は、俄然張り切りだしていつもよりも気合いが入った姿になった。

「これで、殿下達もアオイ様の頼みを絶対に聞いてくれますわ！！」
などとアオイを褒めちぎった。

そしてアオイは、
（いざ、戦場へ！！）
という気持ちで、いつもの部屋に向かっていった。
部屋に行くと、既にアンジェ達が座っていた。しかし、まだ配膳の途中らしい。
「おはよ、アオイ」
アオイが、部屋に入ってきたことに1番最初に気づいたラシュが挨拶をしてきた。
「おはよう、みんな」
もう既に定位置となりつつある場所に、アオイはいつものように座った。

（きっと、今がチャンスだよね）

「ねぇ？　セルにヒュー、護衛決めたんだけど許可くれる？？」
「もう、決めたのか」
「誰にしたの？？」
「グレース・アンバーチェ」

「「「「「「ダメだ」」」」」」

アオイが、許可を求めたセシルとヒューズだけではなくアンジェ達にも反対をされた。

「なんで？」
こうなることは予想済みだったが、実際に断られるとイラっとしたアオイ。
「別に良いでしょ？　私が選んだんだし。グレースだって、頷いてくれたし」
「は？　会ったのか！？　どうやって！？」
「会った。どうやってのかは、秘密ね。そんで、なんで幽閉されてるのかも聞いた」
アンジェ達は、自分達の知らないところで起こったことに対して、驚きを隠せないようだ。

「そうか。言い訳はしない。例え、自分がやっとことではないとしても止められなかった自分と、それを今まで黙認した自分が悪いのだからな」
アンジェのこの言葉は、アオイにとって予想外だった。

（何か、言い訳みたいなのされるかと思った）

「でも、それとこのことは別だ」
「そうだね。僕達も認められない」
「理由は？　私が、グレースのことを好きになることを懸念してっての以外ね。これ、本当に馬鹿みたいだから」
「・・・・・・」
何となく気まずい空気がアオイとアンジェ達の間に流れた。アオイは、心底馬鹿にしたような目でアンジェ達を見た。
「え？　なに、この沈黙。もしかして、本当にそう思ってたの？？」
「・・・・・・・・うん」
「馬鹿じゃないの！？　私が、そう簡単に誰かに惚れるわけないじゃん！！　まず、一目惚れとかありえないって思ってる人間だし」
アオイのその言葉は、刃となりアンジェ達の胸にグサグサと突き刺さっているのだがそれに気づかない。

「だけど、それは召還された後に分かったことだからね。用心に越したことはないよ」
「たしかに、そうだけど。でも、グレースを閉じ込めなきゃいけない理由ってないでしょ？　私が、グレースに一目惚れすることはないって分かった時点で幽閉を解いてもいいはずじゃない？
伝説の花嫁のことが載ってる本を読んだけど、全員が全員、皇族と結婚したわけじゃなかったじゃん。
それに、伝説の花嫁と恋に落ちなくても一年以内に相手は見つかるって書いてあったよ？」
あぁ、そうだ。アオイは鈍感だった。と今更ながらにアンジェ達は思い出した。
自分達の気持ちを全く分かっていない。
アンジェ達が幽閉を解かなかったのはアオイが、グレースに一目惚れをするような性格をしてないと分かっていても、グレースと会

わせたら好きになってしまうのではないかなどを想像すると、どうしてもできなかったのだ。
しかし、そんな心情を鈍いアオイは思いつくこともなかった。

「そうだけど。でも、僕達にも譲れない理由があるんだ。まぁ、今は言えないけどね。それに、“あの”グレースが、アオイの護衛を簡単に承諾したなんて思えないし」
「何で、“あの”がつくの？」
「俺が話しただろ？騎士団と魔法師団の両方に所属する人間は、手懐けるのが難しいって。その最たる人間が、グレースなんだ。だから、そう簡単に承諾するとは思えない」
「そうなんだ。でも、普通に快諾してくれたよ。なんなら、全員は無理だろうけど朝食終わったらグレースのところに聞きに行こうか？」
ここでアオイは、グレースがどこにいるか知らないということは敢えて言わなかった。言ったら、色々と質問をぶつけられることを理解していたからだ。
それと、グレースはアオイ以外の誰にも自分の属性のことを話していないということを言っていたので、アンジェ達にグレースとのことを話すと言うことは必然的に闇属性の話にまで繋がるので何も言わなかったのだ。
（闇の話はまだアンジェ達にはできないし。あー、コニに話さなきゃ）

「んー、その場合行くのは俺とセルは確定だな。あとは、アンジェ？・・・・・・いや、あいつは嫉妬深いから会った瞬間にグレースが殺されかねない。じゃあ、クリス？・・・・・・いや、待てよ。独占欲が強いからアンジェと同じ結果になりかねない。ラシュは、この国の人間じゃないからなぁ～。残ったのは、カインか。うん。

カインなら大丈夫だ！！　ってことでカイン！一緒に行こう！！！！」
「ほぉ？ヒュー、お前は良い度胸をしてるな」
「その命、惜しくないんだね？」
「・・・・・・へ？　ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！」
ヒューズが、叫ぶがアオイやラシュ達は運び終わった朝食を食べていた。セシルでさえも、関わらないように食べている・・・・否、関わりたくてもアンジェとクリスが怖すぎて関われない。
（馬鹿だなぁ。心の中で思っておけば良いのに。でも、正直なことは良い事なのか？　うーん。微妙なところだ）

「じゃあ、行ってくるな。アンジェ、ちゃんと仕事しとけよ？」
「分かってる」
まるで、母が子供の心配をするようにカインはアンジェの心配をした。本人は、一緒に行けないことを拗ねているのかそっぽを向いている。
こうして、アオイたちはグレースの部屋へとヒューズとセシルが前を歩き、その後ろをカインとアオイが歩くという順番で出発したのであった。
歩いて十分くらい経ったところで、一行はある建物の前で足を止めた。そこは、石造りで一階建ての建物だった。
ヒューズは扉を叩いて、「入るぞ」と言い鍵を開けた。
中には、夜に会った時と同じようにグレースがいた。真っ先にアオイは、グレースに近寄り「おはよ」と挨拶をした。
「おはよ、姫さん。やっぱり、来たか」
グレースはここに、アオイたちが来ることを予想していたかのよ

うな口ぶりだった。
（いや、知ってて当たり前か。なんか、情報収集を闇を使ってやってるって言ってたしねー。きっと、さっきの会話も聞いてたんだろうなー）
「だって、信じられないってなら直接信じさせなきゃダメでしょ」
「たしかにな」
グレースはそう言いながら笑い、アオイの前に跪きアオイの左手を取った。

「騎士団・魔法師団所属、グレース・アンバーチェは生涯の主を貴方様ただ1人とし、この命ある限り貴方様をいかなるものからもお守りいたしましょう。

これより、私は貴方様の剣となり盾となり貴方様を害するものや不安など全て取り除きましょう。

私のこの誓いを、ただ貴方様――――――――我が愛しきヒノ・アオイ様だけに捧げましょう。

この誓いを許していただけますか？」

「許すわ」
「ありがたきお言葉」
そう言って、アオイの左手に口づけを落とした。その姿は、絵になるように美しかった。

（うわぁー。グレースが、これやると威力すごっ！！　さすが、皇宮人気ランキング二位！！　いや、待てよ。二位のグレースでこの威力なら、一位のカインの威力はどれだけすさまじいんだ！？　いやー、想像するだけで恐ろしいわ。ってか、契約ってこれで終わり？　コニの時は、これで終わりだったけど）

「終わり？」
「おう。これで、契約完了」
「ねぇ、ヒュー？セル？カイン？信じてくれるよね？もう、契約も終わっちゃったし」
　三人が止める暇なく、契約は済んでしまった。これでは、文句の付けようがないと三人が思ったことはアオイには秘密だ。なぜなら、きっと呆れられるか怒られるかするからだ。きっと、アオイの選択は前者の方だろう。
　それに、最初からヒューズ達はアオイの言うことに反対をするつもりは、ほんの少しだけしかなかった。今回、反対したのは本当にグレースが承諾したのかと疑ったからである。まぁ、そう考えるのはヒューズとセシル、カインだけだが。
　アンジェは、ただ単にアオイの傍にずっといることができる男に嫉妬して、反対をした。クリスは、自分の独占欲の強さから反対をした。ラシュはグレース・アンバーチェという男をよく知らないから用心して反対をした。
　しかしアオイに、グレースを幽閉している理由を知られ絶対に、アオイの中での自分達の信頼度などは全て地に落ちた。そう思ってるからこそ、余計に反対などできなくなるのだ。
　だが、それはアオイの作戦だということに気づいていない。アオイは、会った初日にアンジェ達から言われたことを忘れていない。自分が、どれだけアンジェ達に影響をもたらすか、自分の頼みをどこをどうしたら聞くかなどを計算して、先ほどアンジェ達を馬鹿にしたような目で見たのだ。

それに全く気づかないから、

「分かったよ。アオイの護衛の件、認めることにする」

ヒューズは、グレースを認めた。セシルも同意するように頷いた。

「ありがとう」

そう言いながら花が綻ぶように笑うアオイを見て、この笑顔のためなら何でもしそうだとヒューズ達はこっそり思った。

「じゃぁ、俺は行くな。アンジェが、拗ねてないか心配だし」

「あ、僕も。昨日の仕事残ってるし」

「セルが行くなら、俺も行くぞ」

カインを筆頭に、ヒューズとセシルは部屋を出て行った。

今のところ、アオイとグレースの間に何もなさそうだと判断したのだろう。早々に、退出していった。先ほどまで、グレースがアオイを護衛をすること自体を疑っていたとは思えないほど、あっさりと出て行った。

「あの人達って、意外と単純なんだな」

ボソッとグレースが呟くが、その言葉の意味をアオイは理解できず首をかしげるのであった。

「気にするな。今日から、よろしくな　？姫さん」

「こっちこそ、よろしくね。早速だけど、コニのところに行こうか。

まだ、話してないから話さなきゃだし。どこにいるか分かる？」
「あぁ。姫さんを、探してるぞ。何かしたのか？」
にやりと笑われ、アオイは頬を膨らませる。
「失礼な！　何も、してないよ。ただ、ここに来る事をコニに知らせてなかっただけだもん」
「やってるんじゃねぇーか。専属侍女だろ？　普段の侍女仕事より何よりも主人の傍に控えてるのが仕事だぜぇー？」
「そうなの？　で、場所は？　急いで行かなきゃ」
「ここに、近いな。宰相殿か団長達の誰かに、教えてもらったんだろ。待ってれば着くぞ」
「じゃあ、待ってた方が良いね」
そう言って待つこと四，五分。

扉が、バーンという大きな音を立てながら開いた。もちろん、開けたのはコニーデだ。中に入った後、きちんと扉を閉めることは忘れない。
「見つけたわよ、アオイ！！　もう、心配させないでよ！！！」
「ハハッ。ごめん。今度からは、コニも連れてくよ」
「そうしてちょうだい」
コニーデを手招くと夜と同じようにアオイは寝台に腰掛け、その隣にコニーデを腰掛けさせた。グレースは、手近にあった椅子に座った。

「あのね、コニに聞いて欲しいことがあるんだ」
「なに？何でも、聞くわよ」
「もしかしたら、コニが私との契約を解除したくなるような話でも良い？」
「当たり前じゃない。ほら、さっさと話しなさい」
促されて、アオイは自分の属性の事を話し始めた。

計算高く（後書き）

アオイちゃん・・・・・・あなたって意外と計算高い子だったのね！！w

はい。

ということで、見事に護衛の件を認めさせました。

ほどほどにね（前書き）

ま、間に合った！！！

ほどほどにね

「コニさ、私に属性の話ってしてくれたじゃん？」
「したわね」
「それで、夜にグレースと会った時に教えてもらったんだ」
「へぇ。よかったじゃない。それで？　なんだったの？？」
「……闇」
「え？」
コニーデは、アオイの言葉を聞いて固まった。
（言っちゃったけど、コニはまだ傍にいてくれるかな？？　なんか、グレースが“属性を言ったら何されるか分からない”的なこと言ってたから結構不安なんだよね）

「そうだったんだ！　すごっ！！　人生初だよ。闇属性の人見たの！！」
見事にコニーデの反応は、アオイのこの予想を良い意味で裏切ってくれた。
「私の属性が闇でも、傍にいてくれるの？？」
「何言ってるの。わたしは、アオイと契約を結んだんだから。それに、アオイの属性がどんなのでも傍にいるんだから！！」
「ありがと～！！　コニ、大好き～！！」
そう言って、アオイはコニーデに飛びついた。
「わたしも、アオイの事が大好きよ！！！」
熱い抱擁を終えたら、コニーデが鋭い目つきでアオイを見た。
（え？　まさかのコニ、怒ってる！？　なんで？　私、何かした！？）
内心パニックに陥ってるアオイに、
「さて、アオイ？　何で、わたしが契約解除うんぬんの話に行き着

いたのか教えてくれるかしら？」
　と思わず逃げ出したくなるような、声で問い詰める。
「ひぃっ！！　グ、グ、グレース！！　助けて！！」
　グレースの方へ、手を伸ばしながらアオイは助けを求めた。その様子に、苦笑しながらもグレースは自分に伸ばされた手を掴み、グイッと引っ張り腕の中に閉じ込めた。そうやって、助け出されるとは考えていなかったアオイは驚いたようだが、おとなしく腕の中にいた。

「悪いな。姫さんが、そんな話に辿り着いたのは多分オレの原因だろうな」
「まぁ、グレース様。それは、どういうことですか？　それと、アオイに回している手を放してはいただけませんか？」
　さも、グレースの存在に今気づいたというようにコニーデは言った。しかし、グレースはそれを気にした様子もない。
「まー、それはまだ言えないな。おいおいと、話せたら話すさ。無理な相談だな」
「そうですか。では、おいおいと伺いますわ。いいえ。即刻、放していただきます」
「無理だな」
　永遠と続く様なやり取りを、グレースの腕の中で聞いていたアオイは二人に気づかれないようにため息をついた。

「はいはい。二人とも止まって止まって。コニは、落ち着いて。グレースは、放して。もう、大丈夫だから」
　しぶしぶといった感じで、二人は言い合いをやめた。グレースの、腕から解放されたアオイは、
「まずは、騎士団と魔法師団の詰め所に行かなきゃ。グレースが、復帰するってみんなに伝えないとね？」
「そうだな。行くか」

「うん。いってらっしゃい」
「は？」
「ん？」
なぜか、会話がかみ合ってなかったアオイとグレースはお互い首をかしげた。
「グレース、1人で行くんじゃないの？」
「姫さんも一緒に、言ってくれるんじゃねーの？」
「ううん。私、これからハンス先生の授業あるもん」
「なら、それが終わってからでいいぜ」
「ダメでしょ。早く行っておいた方が良いと思うけどな」
「そうですよ。アオイの傍には、私がいますから行ってくればいいじゃないですか」
「なんだと？　それじゃぁ、もっと行けないな。姫さんの傍にいるのはオレだからな」
「あー！！　もう。やめなさいって」
また、言い合いが始まりそうな勢いだったのを止めたのはやはりアオイだった。
「詰め所に行って、報告とかしてきてくれたら良いから。それで、さっさと帰ってきて？　そしたら、何してても良いから」
「分かった。すぐ、帰ってくるから今言った言葉、忘れるなよ？」
そう言い残すと、部屋から飛び出していった。
「まったく。アオイには、私がいるっていうのに。なんなのかしら、あの男！」
コニーデの憤慨に、アオイは乾いた笑みを浮かべていただけだった。
そこから部屋を移動し、ハンスの授業と言う名の談笑をしていた。
「そうですか。アオイ様の国では、誰もが必ず学校に通っていたのですか。しかも、段階が小学校から大学まであるとは」
「はい。中学までが、義務教育なのですが今では大学まで義務教育

と同じと言われてるんです。それに、義務教育の九年間は国がお金を支払ってくれてました。私は、高校生だったのでお金は自分の家で払ってましたけど」
「この世界では、字の読み書きと計算の仕方を教えるということで小さな学校はありますが、専門的なことを教えるとなると貴族の人間が行く学院くらいですかのぅ。その学院は、貴族の位を持たない者でも優秀な者は、特待生として通っておりますがな」
「そうですか。やっぱり、全員が高等教育を受けるのって難しいんですね、ハンス先生」
「ですのぅ」
頭を悩ませる2人の耳に、扉が勢いよく開く音が聞こえた。
なんだ？　と思ってみると素早く近づいてきた黒い物体に抱きつかれた。

「ただいま、姫さん」
声が、黒い物体はグレースだと物語っていた。
アオイから、離れたグレースを見ると、日射病になるんじゃないか？　この人と思ってしまうほど黒しか身につけていなかった。
「おかえり。ところで、なんで黒なの？」
「ん？　これか？　護衛の格好で、どの色が良いか聞かれたから『黒がいいです』って答えたらこれくれた。黒の理由は、姫さんの髪と瞳と同じ色だから」
「そっか。うん。よく似合ってる」
グレースの灰色の髪と黒に近い藍色の瞳に、黒の制服はよく似合ってた。それから、グレースはアオイの隣に座りべったりとくっついて離れなかった。
「え？　グレース？　何してんの？　離れてくれない？」
「見れば分かるだろ？　いやだ。帰ってきたら何しても言いって姫さん言ったし」

（あれ？　グレースって、こんな性格だったっけ！？　いや、会って全然経ってない人間がなに言ってるんだと思うけど、最初に会った時と印象違くない！？）
　内心、頭を抱えそうになったアオイの疑問を察知したのかハンスが、
「こやつは、アオイ様を溺愛しているんですよ。なんせ、自分のことをよく分かってくれる人間ですからのぅ」
「なるほど。たしかに、伝説の花嫁とアンバーチェ家の人間は相性が良いらしいですからねぇ」
「そういうことです」
「分かりました。それなら、納得です」
　あっさり納得したアオイは、気を取り直して中断された話の続きをすることにした。
　余談だが、お茶を運んできたコニーデはアオイにべったりくっついているグレースを見て、目を吊り上げて怒り狂った。
　曰く、「自分ができないことを、あんたは何でやってるのよ！！仕事は、どうしたのよ！！」
　グレースはしれっと、「できないお前が悪い。ちゃんと、仕事はしてる。姫さんの傍にいて、守るのがオレの仕事だ」と答えた。
　その言葉に、余計にコニーデが怒り狂ったのは言うまでもない。
　そして、夕食の時間にもアオイの傍にはグレースがいた。その姿を見た瞬間、アンジェとクリスがグレースを殺そうとしてラシュ達が必死に止めていたことも言うまでもない。カイン達も、腹が立ったが自分達よりもアンジェとクリスの方が遙かに危険でそれを止めているうちに冷静になっていったのであった。

ほどほどにね（後書き）

いやー、なんかグレースくんの性格が変わってるし。
でも、私的に彼は3番目くらいに好きかな！？
なぜ、２５日に拘ったかの理由は活動報告にてですｗ

歓喜に震える

その日の夜。
アオイは、やはりいつもと同じ夢を見た。黒一色の世界に、アオイは一人で立っていた。

『我らの姫君。はやく、はやくおいで』

いつもは、声にならない悲鳴をあげながら飛び起きるが今日は違かった。

「ねぇ？　どこに、行けばいいの??　どうやって行けばいいの？」

グレースの言葉通り、受け入れてみようとしているのだ。
『あぁ、姫君。そのまま、まっすぐ歩いてきてください』
声の言うとおりにアオイは、まっすぐ歩き始めた。
(黒以外何もないから、平衡感覚がおかしくなるかと思ったらそうでもないんだ。普通に、歩けるわ)
どんどんまっすぐに歩いて行くと、光に包まれうずくまっている長い黒い髪の子がいた。直感的に、アオイはその子が自分を呼んだのだと理解をする。
その子に、

「貴方だよね？　私を、ずっと呼んでいたのは」

と尋ねると、その子は顔を上げた。顔から判断すると、アオイには多分男の子に見えた。悲しみに満ちたような表情をしていたその

子が、アオイの顔を見た瞬間その表情は一変させ喜びに満ちた表情になった。

『姫君！　あぁ、我らの愛しの君。ずっと、お待ち申し上げておりました。貴方様が我らの前から姿を消し後から、我らは我らの価値を見いだせなかった。

しかし、貴方様が姿を現した今、我らは我らの価値を見つけられた。なぜなら、我らは貴方様の手となり、足となり、耳となる存在だから』

とても興奮したように、その子はアオイに言う。

（この子の言い方からして、私はここに来たことがあるの？てか、この子と面識があるってこと？

いやいやいや。そんなはずは、ないと思うんだけどなぁ）

アオイは、頭の片隅で引っかかりを覚えたが、それが何なのかを掴む前に消えてしまった。

「えっと、もしかして貴方が闇？」

首をかしげながら聞くが、その子は首を横に振った。

『その答えに、肯定もできるし否定もできます。我らは、個であり全である。全であり個であるから。今、姫君が見ておられるこの体とて闇が集まってできたもの。

ここは、闇の世界。そして我らは、闇そのもの』

「へ、へぇ。そうなんだ。それで？　どうやって、私はあなたたちを受け入れればいいの？」

『我らが、姫君の中に入るんですよ。今のままでも、十分闇を扱えますが闇そのものの我らが入れば、姫君はさらに自由自在に闇を扱えます。

ねぇ、我らの愛しの姫君？我らを受け入れていただけますか？』

「もちろん。そのために、来たんだから」

アオイが頷いた瞬間、その子は満面の笑みを浮かべアオイにさら

に近づき、アオイの中に消えた。
その瞬間、アオイの胸が歓喜に震えた。無意識のうちに、
（闇が、自分の中に帰ってきた）
と喜んだ。しかし、無意識下に思ったことなのでアオイはそんな自分の心情に気づかなかった。
闇を受け入れた今となっては、なぜ自分が夢を見るたびに飛び起きていたのかが不思議に思えてしかたがない。

「――――――――――ん。――――――めさん！！」

誰かが、自分を呼ぶ声でアオイは目を覚ました。正直、まだあの闇の世界にいたかったとアオイは思っている。それほどまでに、今やあの闇の世界はアオイにとって居心地の良い場所となっていたのであった。

「起こして悪い。なぁ姫さん、闇を受け入れたのか？？」
アオイを起こしたのは、グレースだった。グレースが枕元に立っている。
「うん。受け入れたよ。なんで、分かったの？？」
「オレの中の闇が、歓喜に震えたんだ。そんなことは、これまで一度もなかったから姫さんが闇を受け入れたんじゃないかと思って、悪いけど起こして確認したんだ」
「そうだったんだ。あのね、私の心も闇を受け入れた時、歓喜に震えたの」

「きっと、姫さんの中にある闇が『やっと受け入れてもらえた！！！』って喜んでるんだろ」
アオイの頭を、優しく撫でながらそう言った。
「かもしれないね」
「あぁ。起こして悪かったな。寝ろ。まだ、二の刻を過ぎたくらいだ」
「おやすみ、グレース」
「おやすみな、姫さん」
目を閉じると、すぐに眠りは訪れた。グレースは、アオイが完全に寝たのを確認して闇の回廊を使い消えた。

別の場所では、
「闇そのものを持つ人間が現れたか。っち。探し出すぞ」
そう言っている人物達がいた。

そして、そのまた別の場所では、
「この胸の歓喜の震え・・・・・・。そうか。・・・・・・とうとう現れた、我らが愛しの君。はやく探し出さなければ」
そう言って、部下に指示を出した人物がいたのはまた別の話だ。

誰もが寝ている時間。

皇宮内のとある一室。
ぶっちゃけてしまえば、アオイの部屋の隣室。
さらにぶっちゃけてしまうと、この帝国の皇太子であるアンジェの私室である物事が行われていた。
もちろん、話が漏れないように結界を張ってある。

「これから、第一回どうしようか会議を始めたいと思います。司会進行は、この帝国の宰相である俺がやらせてもらうぞ」
「議長は、僕ね」
どうやら司会進行は、カインが。議長は、セシルという組み合わせで話し合いが行われるようだ。参加しているのは、アンジェ、クリス、ヒューズ、ラシュといったいつもの面々だ。
「議案は、伝説の花嫁であるアオイについてね。何か、意見のある人」
セシルが、辺りを見回すと「はいっ！」と元気の良い声が聞こえた。
「はい、ヒューズくん」
「グレースが、邪魔だ！！！」

「そうだね。今日の夕食だって、グレースがべったりだったしね。あれは、つい殺したくなったよ」
「あぁ、たしかに。あれは、邪魔だ。いっそうのこと本当に殺すか？」
「いいねぇ。ボクは、優しいから苦しまないように、殺してあげようかな」

ヒューズの言葉に頷いていた面々は、クリスとアンジェの言葉に頬を引きつらせた。

「いや、それはダメだから！！　アオイに、嫌わせるよ！？」
慌てたように、セシルが言うと二人は「っち」と舌打ちをした。
やはり、二人はアオイに嫌われることだけは避けたいようだ。
「でもさ、邪魔だよ。今日だって、アオイにべったりひっついててさ」
「まぁ、それはちょっと頭にきたけど！　殺すのはダメだって！！」
「そうそう。アオイが、悲しむぞ。アオイの悲しむ顔は見たくないからな」
「分かってるけど。ボクだって、アオイにべったりしてたいんだよ！！」
クリス、お前の真意は、そこかぁぁぁぁ！！！！！と誰もが思った。叫ばなかっただけ、良しと思っていただきたい。
「あいつの方が、絶対アオイの中での信頼度は高そうだよね」
「そりゃまぁな。仕方ねぇーだろ。俺達が、グレースの幽閉を黙認してたんだからな。アオイの信頼度が落ちるのは目に見えてるよ。しかも、グレースはアンバーチェ家の人間だからアオイと合わないはずがない」
「そう。そこが問題だね。どうやって、彼女の信頼を取り戻せばいいのかな？」
自分が惚れた人間がいた経験が少ない面々は、思いっきり頭を悩ませている。

「あー、ダメだ。何にも思いつかない」
「同じく。難しいね。好きな人にどうやったら信頼してもらえるかって考えると」
「だな。アオイって、警戒心強そうだし。まだ、俺らのことをろくに信用してなさそうだしな」
「分かる。なんとなく、線を引かれてる感じがする。まずそれを取り払うところからかな」
意外にもアンジェ達は鋭かった。それは普段、腹の中を見せない

ような人間達と案件などを巡って熾烈な言い争いなどをしているからだろう。だから、アオイが自分達を信用していないことをすぐに理解した。しかし、それで諦めるわけがなかった。
　それくらいで、諦められる程度ならこの二，三日で諦めていたはずだから。
「うん。それは、各自でやっていけばいいかな。それじゃ、今日の第一回どうしようか会議を終了します」
　セシルの言葉で第一回目の会議は終了した。

歓喜に震える（後書き）

真夜中に、変な会議を開いていたアンジェ達でした。
一応、国のトップ近くにいる人達なんですが（汗）
アオイちゃんのことになると、どんどん過激になっていく人が約二名ほどw

信用して欲しい

翌日、コニーデに夜の話をして「よかったじゃない」と喜ばれた。
そして、グレースに闇の回廊を「簡単だし、他の属性は光で結構な腕前の奴にしか使えないしな」と言われて習っているのだが上手く進んでいない。
なぜなら、

「なぁ、姫さん。どうやったら風呂場に行くんだ？　しかも、湯の中に！！」
「ご、ごめんなさい！！」

そう、アオイは自分が行きたいところになかなか行くことができないのである。湯の中に落ちたアオイとグレースはずぶ濡れになってしまった。グレースはアオイと共に湯から上がり魔法を使い、自分の服とアオイの服を乾かしため息をつく。
何も闇の回廊を使って変なところに出るのは、これが初めてのことではないのだ。木の枝の上に出たりとか、皇宮の屋根に出て危うく足を滑らせて落ちるところだったりとか様々なところへアオイは、移動していたのだ。それも全部、アオイの行きたいところとはほど遠いところだが。

「はぁ。力の制御は、完璧なのにな。オレが言った“迷子になりそう”ってあながち嘘じゃなさそうだな。姫さんって、方向音痴だろ？」
「そんなことないよ？」
「じゃぁさ、出かける時とかどうだったわけ？？」
「えー？出かける時？？　大抵は、ナツメと一緒だったな。あ、お母さんとかお父さんとも一緒の時もある」

「そいつらがいない時は??」
「んーっと、友達と出かけたりするときは友達がわざわざ迎えに来てくれたりとか自分達がすぐ分かるところとかで待ち合わせしてたよ?」
「そりゃ気づかないわけだ」
ボソッとグレースは呟いた。

「なんか、言った??　聞こえなかった」
「いや、なんでもないぜ」
アオイは、全く自分が方向音痴だということに現在進行形で気づいていない。
なぜなら、ナツメや両親、友達などがフォローしているからだ。普段、しっかりしているアオイにギャップを感じて「可愛い!!!」と全員が思いながらアオイを迷子にさせないようにしていたのであった。
「よし、次は自分の部屋を思い浮かべてみろ」
「はい!!」
闇の回廊を出し、アオイは自分の部屋を思い浮かべた。そして、闇の回廊の中に入り歩いて行くと自分の部屋に行くことができた。

「やった!!!　グレース、成功したよ!!!!!」
思わず、アオイはグレースに抱きついた。いきなりの行動だったが、グレースはしっかりとアオイを抱き留めた。
「よかったな、姫さん。十一回目で、ようやく成功だな」
「何?　それは、嫌みですか!?」
「まさか」
と心外そうに言うグレース。そんなグレースを、疑いの眼差しでアオイは見ている。
「いやいやいや、本当に嫌みなんて言ってないぜ」

「ふーん」
納得してなさそうな声で、アオイは相槌を打つ。

「あら、アオイ？　移動は、成功できたのかしら？？」
洗濯などに行っていたため、アオイの傍から離れていたコニーデが戻ってきた。
「そうなんだよ！！　成功したんだ！！」
「あぁ。十一回目にしてな」
「うるさい！　十一回目は余計だよ」
グレースの言葉に、アオイは項垂れた。
「まぁ！　グレース様？　アオイをいじめないでいただけますか？？」
「だってなぁ、姫さんをからかうと面白いし」
「面白がらないでください。可哀想にわたしのアオイ」
「はぁ？　面白がっても大丈夫だ。なんて言ったってオレの姫さんだからな」
（また、始まったよ・・・・・・・・）
「アオイは、グレース様のではありません！！　わたしのです！！」
「何だと？　姫さんは、コニーデのじゃないぜ。オレのだ！！」
「良いですか！！　アオイと出会ったのは、わたしの方が早いんです。貴方よりもアオイの事を知ってるんですよ！！」
「はっ。オレと姫さんの間に、出会った時間なんて関係ねぇーな。なんたって、この世界で一番相性が良いんだからな！」
毎回、グレースとコニーデはアオイの事で言い争いをしていた。
互いにアオイのことになると何か、譲れないものがあるようだ。
「それが何か？？　同性ではないと知ることのできない事だって世の中にはあるんですよ？？」
「逆に、異性じゃないとできないことだってあるんだぜ？」
「そう簡単に、アオイがあなたに許すわけないじゃないですか！！

それに比べてわたしは、アオイの全てを見てるんですよ？」
「わかんないぜ。それは、入浴の手伝いとかしてるからだろ」
言い争いは、止まることを知らないようにどんどん白熱していく。そして、どんどん話がそれていく。けれども、内容はアオイについてでどこまで言い争いをしてもその論点は変わることがない。
その争いの原因となっているアオイは、「もう好きにして」とでも言うかのように紅茶を飲んでいた。止めようとは、既に思っていない。止めても無駄なことが分かっているので、それなら気の済むまで言い争いでもなんでもしていろ。という考えだ。

そんな中、トントンと扉を叩く音が聞こえたのと同時に、
「オレだが、入っても良いか？？」
と言うアンジェの声も聞こえた。

「アンジェ？？　どうぞ？」
アオイが、許可をするとすぐにアンジェは部屋に入ってきた。
「どうかした？」
「いや。仕事が一段落付いたから、アオイとお茶でもしたいと思ったのだが迷惑だったか？？」
「んー？　そんなことないよ。コニ、お茶の用意お願いね」
「わかりました」
瞬時に感情を切り替えたコニーデは、アオイたちに一礼をしてお茶の準備のため部屋から出て行った。
「座らないの？？」
「いや、座らせてもらう」
そう言ってアンジェは、アオイの隣に座った。
（え？　何で、私の隣！？　机を挟んだ向こう側の席でも良くない！？）

アオイは、気づいていない。なぜ、アンジェが自分の隣に座ったのかを。

「殿下、姫さんと二人で座らず向こう側に座ったらどうですか??」

グレースは、気づいていたので敢えて邪魔をする。

「いや。ここが良いんだ。気にするな。それから、アオイがいないと意味がないから席を移動するとか言うなよ?」

「アンジェがそう言うなら、別に良いよ」

「ありがとう」

コニーデが、お茶とお菓子を出して部屋から下がる時、グレースは引きずられていった。なぜなら、「殿下達の逢瀬を、邪魔してはいけません」と言うことらしいのだ。グレースは、最後の最後まで抵抗したが他の侍女達も来て「何か、あったらすぐにオレの名前を呼べ」と言い残して連れて行かれた。

「で、アンジェは本当に私に何か用があるから来たわけじゃないの??」

「あぁ。本当に仕事が一段落したから来たんだ。それろも、用がなければ来てはいけないのか?」

「いや、そういうことはないけど。初めてのことだから、何か理由があるのかなー?って思っただけだよ」

「そうか。そうだな。一つだけ理由があった」

「え??」

いきなりアンジェは、横に倒れ頭をアオイの膝の上に載せた。属に言う、膝枕というやつだ。

「しばらくこのままでいさせてくれ。良いだろ??　これが理由でも」

「いやいやいや。これは、恥ずかしいよ!?」

「気にするな。それに、理由があるのかと聞いたのはアオイだ。なら、聞いてもらうほかないだろ」
「・・・・・はーい」
下からアオイを見上げるアンジェは、なんとなく色っぽくてアオイは顔を下に向けられない。
（誰かに膝枕って、あんまりしたことないから恥ずかしい）
チラッとアンジェの方を見てみれば、アオイが下を向かないせいか目を閉じていた。アオイの視界に、アンジェのさらさらとした金色の髪が入って来た。そのさらさらした髪に触りたい衝動に駆られた。
（なに、この髪！！　触ってみたいわ。いいかな？？　いいよね）
自己決定をして、アオイはアンジェの髪に手を伸ばした。梳いてみると、想像以上にさらさらしていて気持ちよかった。

「アオイ？　何やってるんだ？？」
自分に起こっている異変に、気づいたアンジェはアオイに問いかける。
「ん―？　ただ、髪を梳いてるだけだよ」
「・・・・・・・そうか」
「うん。アンジェの髪って、気持ちいい触り心地だね」
ふにゃりとアオイが笑うとアンジェは、少し顔を赤くして「ありがとう」とお礼を言った。
アオイの笑顔は、アンジェ達に対して警戒をしているとか、信用していないとは思えないような表情だ。しかし、瞳の奥には確かに警戒をしていて信用していないというようなものがあった。
そっとアオイの頬に、アンジェは手を伸ばした。
「分かってるんだ」
と頬に触れながら言う。
「何が？？」
「アオイが、俺達のことを警戒してること。信用してないこと」

驚いたようにアオイは、目を丸くさせた。
（知られてたんだ。なんか、意外かも。あ、でもそんなことないか。毎日、いろんな人達と接しながら仕事してるんだし。分かっちゃうか）

「それは、自分達のせいだからしょうがないと思うし、まだ出会って間もないから信用しろって言っても無理なのも分かってる。けどな？　俺達よりも後に、出会ったのになんでグレース達は信用するんだ？　とも思う。
だからちゃんと、アオイの瞳に俺を映して欲しい。俺のこと、俺らのことを信用して欲しい。線を引かないでくれ」
「アンジェ・・・・」
切なげな瞳で、アンジェはじっとアオイを見つめる。見つめられているアオイは、なぜか目がそらせないと思っていた。
「嫌なんだ。アオイにだけは、拒絶されたくないんだ」
「信用したいと思ってる。だから、もう少しだけ待ってて」
「ありがとう」
アオイのこの言葉に、アンジェがホッとしたことが分かった。

「それとアオイは、一目惚れを信じないと言ったが、俺は信じてる」
「うん？　良いと思うよ。考え方は、人それぞれだし」
遠回しに「俺はアオイに一目惚れをしたんだ」と言っているが、話がいきなり違うものになって思考が追いつかないアオイは気づかない。いや、通常時でも気づいていなかっただろうが。

「やっぱりそうなるか。遠回しがダメとなると、直球か？　いや、だがそれでも気づかなさそうだし。態度がダメなら行動か？」
ぶつぶつ言いながら「そうか、行動か」と思いついたように言う。

アオイは、そんな様子を不思議そうに見ていた。
頬に触れていたアンジェの手が、アオイの後頭部に回り手に力を込められた。必然的に、アオイは下に・・・・・・つまり、アンジェの顔に近づいていく。
（え？　は？　ちょ、何ですか！？　このシチュエーションは！！）
あともう少しで唇が重なるというところで、

「アーンージェー！！　仕事が、一段落したからってアオイのとこに行ってるんじゃねーよ！！」
と言う声と、

「でーんーかー！！　俺の姫さんに、何しようとしてるんですかー！！」
と言う声と共に扉が蹴破られて、カインとグレースが入って来た。
そのおかげで、後頭部に回されていた手は離れ、アンジェはアオイの膝から頭を起こした。

「っち。良いところを邪魔するな！！」
「うるさいな。仕事が、まだあるんだよ！！　それに、邪魔するなって言われても邪魔するからな。お前だけだと不公平だろ？」
「不公平ではないな。仕事に戻るぞ、カイン。さっきの言葉、期待してるぞ」
そう言ってアンジェは、カインと共にアオイの部屋から出て行った。歩きながらカインが、「さっきの言葉って、何だよ」と尋ねているのが聞こえた。

「姫さん、大丈夫か！？」
グレースは、心配そうにアオイを見ている。
「大丈夫だよ。それに、見てたんでしょ？」
「侍女達が、ずっと話しかけてきてて最後の方しか見れなかった」
カインが部屋に乗り込んできたのは偶然だが、グレースが乗り込んできたのはアンジェがアオイに口付けようとしているのを見たからであった。思いの外、侍女達がグレースに話しかけていたので、闇でアオイたちの様子を見ることができなかったが、ようやく一息ついたところで闇を使うことができたのだ。しかも、見た時があれだったのでグレースは、アオイがアンジェに何かされていないかと心配らしい。
「“信用してほしい”って言われた以外、何もなかったよ」
「そんなこと言われたのか。それで？　姫さんは、殿下達を信用するのか？？」
「したいって思ってる」
「そっか」
密かにグレースが、信用なんかしなくても良いのにとちょっとだけ思った事はアオイには内緒だ。

信用して欲しい（後書き）

はい、ということで未遂に終わりました。
Ｒ１５を付けているからには、そういうシーンの一つや二つや三つは欲しいですよね。
なのに、未遂です。
アンジェのヘタレー！！
もしくは、
カインとグレースのバカー！！
と叫んでやってください。

襲撃（前書き）

長いくなったので、分割しました。

襲撃

ある天気の良い日。
アオイはコニーデに、薦められて皇宮内にある中庭で色とりどりの花を眺めながらグレースらとともにお茶をしていた。
「今日は、いい天気だし花だって綺麗だし。なんか、もったいないね。わたし達しかいないって。クリスとか、呼べば良かったかな？」
「それはダメね。あの方達がいると、わたしがアオイと話す機会があまりないもの。今だって、余分なのがいるしね」
「へぇ。余分なのってそれは、自分の事じゃないのか？　少なくても、オレのことではないと思うけどな」
「余分なのは、貴方様ですよ？　グレース様！！　私が、自分の事を邪魔だと言うはずがないじゃないですか。私は、自分の事をアオイに必要な人間だと思ってますから」
また始まってしまった、コニーデとグレースの言い争い。何で、毎回起こるのかがアオイには不思議だった。しかも毎回争いの原因が、自分自身というところにアオイはげっそりしてきた。
しかし、止めても無駄なので止めないが。

「コニーデよりも、オレの方がアオイには必要な人間だな。絶対に、オレの方がアオイの役に立つし」
「それはないと思いますよ？　グレース様に、アオイの身の周りの世話ができまして？　私のような、侍女がする仕事ができるんですか！？」
「じゃあ、こちらも聞くがコニーデにアオイを守れる自信があるのか？」
「あー、はいはいはい。止めだよ、止め！！　」
何か、怪しい空気が流れてきたのでアオイは止めることにした。
（まったく。できることなら、止めたくないのに。止めた後、怖い

もん。「アオイは黙ってろ」って言われるし。でも、さすがにこれは止めなきゃダメだよね）
「安心して。二人とも、私にとって必要な人間だから。人には、適材適所ってものがあるの。コニーデには、コニーデにしかできないことがある。グレースには、グレースにしかできないことがあるの。だから、二人とも私に必要な人間だよ」
アオイの口説き文句ともいえる台詞に、二人は顔を綻ばせた。

「嬉しいこと、言ってくれるじゃねぇーか。さすが、姫さん。ってことで、コニーデ。ちょっと、お使いに行ってこい。団長達に知らせてこい。」
「はぁ？　意味分からないわ。ヒューズ様達に、何を伝えてこいと？」

「もうすぐ、敵に囲まれる。だから、早く行ってくれ！！　姫さんを連れて、逃げたいところだがどうせ追いかけてくるだろうからここで始末する」

「わかったわ！！！」
コニーデが、騎士団・魔法師団の詰め所に向かって走り出したのと同時に、フードを深く被った白ずくめの人間、三人にに囲まれグレースは剣を抜きアオイを庇うように前へ一歩進む。
「ねぇ、ちょっと。普通はさ、こういう場合に出てくる人達が着てる服の色って黒でしょ！？　相場で、黒って決まってるじゃん！！
なのになんで、白なの？？」
ちょいちょいとアオイが、グレースの服の袖を引っ張る。
「わぉ。さすがだな、暇さんは。緊張感がまったくねぇーな。まぁ、

白なのにはそれなりに理由があるんだろ」
「えー！？　やっぱり、黒でしょー」

「話はそこまでにしてもらおうか。」
白い集団の一人が、声を発した。

「我々が用事があるのは、キミの後ろにいるお嬢さんだ。さぁ、我々に渡してもらえるかな？？」
「断る。姫さんは、オレの唯一無二の主だ。どうしても姫さんを渡せて言うのなら、まずはオレを殺してからじゃないとな」
グレースの言葉を聞き、声を発した者はやれやれと首を振った。
「お嬢さんをもらえれば、貴方は死ななくても済むというのに」
「それでも、だ。姫さんを絶対に、オレの命を懸けて守る。そう決めてるんだよ。それにオレは、そう簡単には死なないぜ？」
「そうですか。少々の手荒なことは、致し方ありませんね。我々が、憎いのは闇のお嬢さんただ一人だけだというのに」

（・・・・・・え？私が憎い？　何で！？）
アオイには、自分があの集団に対して何かをしたという記憶は一切無い。
だったらなぜ？
と、グルグル考えていたから反応が遅れた。何か、鎌鼬のような鋭い風がアオイに向かって放たれたのだ。
間一髪で、グレースがアオイの腰を抱いて避けてくれた。しかし、左の頬に違和感がある。そっと、触ってみるとぬるっとした感覚があった。手を見ると、赤く染まっていた。
（つまり、顔にかすったって事？　・・・・・・よくも。よくも女の子の大切な顔に傷を付けてくれたわね！！）
グレースには、何かがプツっとキレる音が聞こえた。音がした方

を、そーっと伺いすぐに視線をずらした。
あまりにも恐ろしかったのだ。アオイの形相が。例えるのなら、鬼、悪魔、般若などなど。幼い子供が、アオイを見たら一発で泣き出すこと間違いない顔だ。

「アハハハハ、ハハハハ。よくも、女の子である私の顔に傷つけてくれたじゃない！！　傷つけたからにはそれなりの、覚悟できてるんでしょうね??」
アオイが問題としているのは、自分を殺そうとしたことではなく、自分の顔に傷を付けられたということだけであった。キレたアオイは、無意識に闇の力を操り白の集団を正座させ動くことも立ち上がることでさえも不可能にした。

襲撃（後書き）

キレたアオイちゃん。
笑い出しちゃって、なんともまぁ、怖いですよー。

居場所（前書き）

分割したのに、長くなってしまいました（汗）
ごめんなさい＞m（__）m＜

居場所

「いいですか？　女の子の顔に傷を付けることは、どんな理由があったとしてもダメなことです。今の時代、中身も大事だろうけれど第一印象は顔で決まるんですよ！！

　それなのに、女の子の顔に傷を作ってどうするんですか！！　もしも、跡が残ったら皆さんは責任を取ってくれるんですか！？　取ってくれないでしょう？　顔に傷が残ったままだと、お嫁にも行けないじゃないですか！！」

　ニコニコ笑って言うアオイだが、目は全く笑っていなかった。少し後ろで何があっても大丈夫なように警戒をしているグレースでさえも、ぶるっと身震いをしてしまうほどだった。

　しかし、アオイは完全に忘れている。なぜ、自分がこの世界に来たのかを。花嫁として召還されたのだから、嫁に行けないことは絶対にない。

「いや、あのな？姫さん。一回、落ち着けって、な？」

「これが落ち着いてられるか！！！　人生で三番目に大切な物を傷つけられたんだから！！　もちろん、一番は命でしょ。二番目が、金ね。三番目が、顔！！　あんまり可愛くない、私の顔がさらに不細工になったらどうするの。そんなの嫌だからね。だから、グレースは黙ってて」

「そ、そうか。わわ、悪かったな」

　やや引きつったような顔で、グレースは謝った。アオイの怒りが凄まじくて「姫さんは、十分可愛いよ。それにオレが、嫁にもらうから安心しろ」と言う予定が言えなかった。

「だいたい、私が憎いとかなんとか言ってましたけど私何かしましたか？　私自身には、身に覚えがないんですが。だいたいにおいて、

この世界に来てからまだ一，二回しか皇宮外にでてないんですよ？
それなのに、憎いっておかしいですよね？　そこら辺もおしえていただきましょうか？
ほら、とっとと言えよ。テメェらの口は、飾りもんか？　え？
違うだろ？　だったら、早く言えよ。それともあれか？
痛めつけられるのが好きとかいう趣味でもあんのか？　だったら、腕の一本や二本、足の一本や二本切り落としてやろうか？
それとこれ以上、私を怒らせると何するか分からないよ？」
途中で少し口調が変わったことから、アオイがどれほど本気なのかが伺える。
やられたら、やり返す。しかも、倍以上で。これが、アオイの信念だ。
まさに、「目には目を歯には歯を」という某法典に載っている言葉がぴったり当てはまるとアオイは思っているが、地球にいる友人達が聞けば「いやいや。倍以上の仕返しをしてる時点で全然違うでしょ！？」と鋭い突っ込みを入れながら、「なんかずれてるアオイも、可愛いわー」とアオイの頭を優しく撫でるだろうが、残念ながらここは地球ではない世界なのだから突っ込む人は誰もいない。

「お嬢さんが持つ、漆黒が憎い。闇が憎い。だから、貴方が憎い。我々を育てたところの理念は、この世からの闇を持つ者の排除。
だったら、闇を持つお嬢さんを殺さなければならないでしょう？
闇自身を排除できないのならば、闇を持つ者を排除しなければならない。そのため我々は、光のためにも闇を憎むべきものとして教えられてきましたから」
話を聞きながら、自分の頬がぴくぴくと痙攣していくのがアオイには分かった。
「馬鹿じゃないないんですか？　なーにが、“光のため”ですか。良いですか？
光と闇は真逆の存在ですけど、光は闇がないと存在できませんし、

闇も光がないと存在できないんです。どちらも欠けてはいけない。光と闇は二つで一つ。表と裏の関係。

だいたい、闇がなかったら影がないって事なんですよ？　どんなに暑くても、木の下とかにできる木陰がないから休憩もできません。夜だって来ないから、暑い太陽がある中で寝なくちゃいいけないんです。そんなの苦痛以外になんて表したらいいか分かりませんよ。

それに影がないと、雨も降らない。曇り空もない。天気は、ずーっと晴れのまま。そんな世界で、ありとあらゆる生命体は生きていくことはできないんですよ。

そんな色々と根本的に、間違っていることを教えるような人達のところにいちゃダメでしょ。こんな簡単なことさえ、分からない人はただの馬鹿です。阿呆です。役に立ちません。即座に、見捨てるべきです」

先ほどまでの怒りは、どこに行ったのやら。アオイは、呆れたような目で集団を見る。

「しかし、我々は闇を憎む以外の生き方を知らない。ならば、闇を憎んで生きていくしかないでしょう？」

「まったく。本当に、馬鹿な人達ですね！！　どうして知らないなら、これから知っていこうっていう考え方にはならないんですか。結局、逃げてるだけなんじゃないんですか？　知らない方が楽だから。闇を憎んで生きていくのが、自分達にとって楽な道だから」

最後の言葉に、集団の体がピクっと反応したのが分かった。だから、アオイには分かった。彼らが、そのことをよく分かっているということを。

「そうだとしても、我々にはそれ以外にないんですよ。そこ以外に、生きていく場所もない。そこ以外に、我々の居場所はないんです。だから、選択肢は一つ以外にない」

（だったら――――――――――）

「私が、あげるよ」
「え？」
「姫さん？」
戸惑ったような声を発した、集団とグレース。それを気にせず、アオイは続ける。
「だから、私が選択肢をあげる。もう一つの選択肢は、私と共にいること。っていうか生きることかな。あなた方の別の選択肢ができるまで」
そう言うと、アオイは拘束を解いた。集団は、立ち上がりアオイをまっすぐに見つめる。
「お嬢さんこそ、お馬鹿じゃなんじゃないですか？　頭大丈夫ですか？　我々は、お嬢さんを殺そうとしたんですよ？
それなのに、お嬢さんと共に生きるって。我々に、殺されるとは考えないんですか？？」
「分かってるよ。でも、私はあんまり優しくないから、機会は今回のただ一度きり」
そう。これは、ただのアオイの気まぐれに過ぎない。アオイの気まぐれに、二度目はないのだ。
「次に、殺されそうになったら私は情け容赦なくあなた方を殺す。でも、死にたいからといってわざと私を殺そうとするのはなしだから。あと、勝手に死のうとするのもダメだよ。勝手に死なれたら、あなた方を拾った意味がない。
それで、どう？　私と生きてみない？　闇が憎い気持ちが消えなくても良いよ。ただ、私が居場所になってあげるから。見つけよう？　あなた方が求める生き場所を。心の拠り所を。
だからさ、見つかるまであなた方の人生を私にちょうだい？」
柔らかくアオイは微笑み、すごい口説き文句を言葉にした。
その言葉を聞いた途端、白の集団達は心の中にある闇への憎しみ

が馬鹿らしくなった。
ただ、あぁ、この方なら自分達が求める行き場所、心の拠り所になってくれると確信した。
アオイになら自分達の人生を、本気であげても良いと思えたから。
“私が居場所になってあげる”と言ってくれたのは、今まで生きてきた中でアオイだけだったから。
その言葉が胸に響き、とても嬉しかったから。
もう、あんなところに我慢を重ねながら、苦しい思いをしながらもいなくても良いんだと喜べたから。
だから、跪いて頭を下げた。それは、一人だけじゃなかった。白の集団の全員が、アオイに跪き頭を下げたのだ。

「我々の負けですよ。我々の人生を、お嬢さんにさしあげましょう。お嬢さんとなら、見つけられる気がします。どうぞ、よろしくお願いしますね。我が君」

そう言うと、集団はフードを取った。
（これは、また全員がカラフルな色だなー。白に緑に青にか。あれ？　女の人も一人いた。かわいいなー。ってか、男の人達は、イケメンだよ。あ、忘れてた）

「ねぇ、グレース？　勝手に色々やっちゃったけど、大丈夫かな！？　グレース自身は、私のやったことに納得いかないとかある？？」
「大丈夫だろ。殿下達は、姫さんに甘いからな。オレ自身は、別に良いよ。自分が、やりたいことをやれ。もし、やっちゃいけないことをやろうとした場合は止めてやるから安心しろ。それにもしも、こいつらが姫さんをまた殺そうとしたら、姫さんじゃなくオレが殺す」
「それなら、良いわ」
アオイは、アンジェ達が自分に甘いと言うことについて否定をし

なかった。
「そうだ。名前は？」
「ありません。ですから、我が君がつけてください」
「えー！？　分かった。うーん。えーっと」
しばらく悩んでいたアオイだが、何かを思いついたように手をポンと叩いた。
「白の髪の貴方が、シュネ。緑の髪の貴方が、ヴァルト。青の髪の貴方が、レーゲン。で、どう？　一応意味は、雪と森と雨ね。ダメなら、ポンタン一世とかレースカス五世とかバッフラン九世とかどう？」
「いや。最後の方の、ポンタン一世とかはダメだろ！！」
「そう？」
アオイは結構良いと思っているが、グレースにしたら奇抜的な名前だ。
「で？　どう？？」
「ありがたく、ちょうだいいたします。素敵な名前をありがとうございます」
恍惚したような表情で、三人はアオイを見ている。
「それはよかった」
青の髪の男は、
「これより私は、レーゲンと名乗ります。年は、二十五歳です」
と言った。
白の髪の女は、
「あたしは、シュネと名乗ります。年は、二十三歳です」
と言った。
緑の髪の男は
「オレは、ヴァルトと名乗ります。年は、二十七歳です」
と言った。

「「「これから、末永くよろしくお願いします。我が君」」」
「こちらこそよろしくね。私は、アオイ・ヒノ。一八歳だよ。で、隣にいるのがグレース・アンバーチェ。二十歳で、私の護衛」
「よろしく頼む」
ほどなくして、和やかな雰囲気になったところで、
「アオイ！！」
と切羽詰まった声と共に、コニーデとセシル、ヒューズがすごい勢いで走ってきた。
「どーしたの？　って、ヒューとセル？？　帰ってきたのって、コニだけじゃなかったんだ」
なぜ、コニーデがヒューズ達のところに行ったのかをアオイは忘れている。
「アオイ、怪我は？？」
「敵は？？」
「へ？　ないけど。敵？　いないけど？？　あ、そうだ。紹介するね。えーっとなんて言えば良いんだろう」
「私達がしますよ。初めまして。我が君の配下に下った、レーゲンと申します。そして、こちらはシュネ。あちらは、ヴァルトです。これから、私達は我が君のお傍にいますので。一応、よろしくお願いします」
「どういうことだ？　グレース、説明しろ」
ヒューズとセシルは、理解できなくなりグレースに説明を求めた。
「元は、レーゲン達は姫さんを狙ってたんですけど、姫さんがキレた後に口説き落として配下に下ったというわけです。ですから、心配は何もいりません。こいつら、本気で姫さんに人生を捧げるつもりらしいですし。まぁ、そんなこと言ったらオレの人生も姫さんのものですけど。
あと、姫さんを怒らせちゃいけません。本当に、怖いですから」

とグレースは説明をした。ただし、最後の言葉は余計が。

「アオイ！！　何、危険なことをやってるんだ。アオイが、襲撃されたと聞いて生きた心地がしなかったんだぞ」

「そうだよ。今回は無事だったけど、次はこんな偶然起こらないと思うから気をつけてね？」

結局、ヒューズ達はアオイに甘いのでレーゲン達のことを何も言わない。ただ、注意を促すだけだった。

「分かったよ」

アオイは、きちんと頷いた。

（ちゃんと、分かってるし。今回が、特別だって事。でも、この世に偶然はなくて必然しかない。だからきっと私が、レーゲンやシュネ、ヴァルトと出会ったのも必然なんだよね。

・・・・・・ん？　ッてことは、私がアンジェ達と出会ったのも必然？？）

「それと、夕食の時他の奴らが絶対に心配してくることを忘れるな」

「うん。このこと、報告が行ってるからね。きっと忙しくて抜け出せないから、夕食の時にどっと来るよ」

「はーい」

がっくりとしながら、アオイは頷いたのだった。

「あ！！　頬に怪我してる。治してあげるね」

セシルは、そう言いながらアオイの頬に手をかざし怪我を治した。

「どうやって治したの？」

「んー？　ただ、手をかざして意識を集中させて『治れー！！』って念じただけだよ。傷が軽いと、大概は魔力をそんなに消費しないで使えるよ。傷が大きければ大きいほど、消費する魔力は膨大になってくんだ。あ、首が取れたりとか、確実に死んでる場合は使えな

いよ」
「へー」
感心して、アオイは頷いた。そして、顔にできた傷が治ってルンルン気分だったのであった。

本当に、その日の夜は大変だった。アンジェ達が、アオイにぺたぺた触って怪我がないかを確認して安心したかと思うと、
「もう、危ないことをするんじゃないぞ！！」
と説教までされた。一応、シュネ達を紹介したらすごく驚いていたのであった。
危うく、アオイはその表情に吹き出すところだったとか。

居場所（後書き）

アオイちゃんは、配下を三人ゲットしました。
キレたアオイちゃんには、注意が必要です。
こわいですからw

６／２６に加筆修正をしました。
最後の部分を書き足したのと本当にちょっとした書き足し程度です。

知りかけた真実

「我が君、お休みになられますか??」
「そーだね。もう、眠いし寝ようかな。あ、シュネも一緒に寝よう??」
アオイが、シュネ達を配下にしてから早いことに半月経った。そして、アオイがこの世界に来てから一ヶ月経った。
つまり、花冠の月から迅雷の月に変わったということだ。

だいたいアオイは、この世界に慣れてきたからか気持ちの変化が現れるようになってきた。
寂しくなってきたのだ。特に、夜が。
色々と驚くことや慣れないことが多すぎて、寂しいなんて思うことがなかった日々を送っていたが、一ヶ月も経てば驚くことなどはほとんど無くなってきたのである。
だから、最近は寝る時には必ず誰かを寝台に引きずり込んでいるのであった。
いや、アオイが誘ったら自分から寝台に入ってくるといった方が適切である。

「では、失礼して」
一言そう言って、シュネはアオイの隣に潜り込んだ。
「役得です。女に生まれて良かったと思いますわ。男だったら、グレース殿達がお呼ばれされることがないように、我が君の寝台にあたしがお呼ばれすることはなかったと思いますから」
シュネの言葉通り、アオイはグレースやレーゲン、ヴァルトを寝台に引きずり込むことはしない。一応、自分は女でグレース達は男だということを考えて呼ばないのであった。だからか、グレース達

は落ち込みコニーデとシュネが順番にアオイの寝台で寝るようになった。

「おやすみ、シュネ」
「はい。おやすみなさい、我が君」
ぎゅっとシュネに抱きついて、アオイは眠りについた。シュネも、アオイを抱きしめて寝た。今の季節は、夏で暑いのだがアオイもシュネも何も気にせずに寝た。

アオイは、初めてユリエルの声を聞いた草原にいた。
前回、ユリエルの姿を見ることは叶わなかったが今回は、目の前に白に近い金色の髪をしていて金色の瞳をしている女性がいた。
（もしかして、ユリエル？）

――そうよ。この前、次に会う時は顔を見て話すって約束したから――

（したね。ねぇ、ユリエルに聞きたいことがあるんだけど）
そうアオイが言うと、ユリエルは分かったいるという感じに頷いた。
――聞きたいのは闇のことと、配下に下した者達がいた組織の事ね？――

（うん。教えてくれる？）

――えぇ。でも、全部は教えられない。きっと、アオイ自身の力で知った方が良いことだと思うから――

（いいよ。それで）
ユリエルは、アオイの手を取り草原に腰を下ろした。
――最初に、アオイの魔力はこの世界には滅多にいない程強大だと言ったわね？　あれは、アオイが闇そのものだから。普通、魔法を使う時は自然の力に干渉しなくてはいけないの。そうでなければ、自然の力や生活していく上で必要な力は得られないから。でも、アオイの場合は干渉していないの――

（へぇ。他の人が、自然に干渉して力を使う中で私はいらないと。不思議だね。でもさ、私が強大な魔力を持ってても誰も何も言わないよ？）

――あぁ、それはアオイの力が暴走した時にアオイが魔力を制御できるようになるまで私が魔力の半分を封印してたのと、闇の制御ができるようになってきてるから解かれた封印の魔力は隠れてるのよ。アオイの魔力の源は、闇だから闇の力を制御できるようになればそれに比例するように、魔力の制御もできるようになってるの――

（そうなんだ。便利なんだね。次、レーゲン達がいた組織のことを教えてくれる？）
アオイが、今一番知りたかったのは自分の事ではなくレーゲン達のことだった。アオイの中で、レーゲンが最初に告げた“闇が憎い”という言葉が引っかかっていたのだ。
一瞬、ユリエルの顔が悲しみに歪んだがすぐに元の笑顔に戻した。だから、アオイは何か理由があるのかと思って敢えてそれに気づかないふりをした。
――この世界には、光が善で闇が悪だと思っている人達の組織があるの。きっと、アオイの配下に下った者達はそこで生まれそこで育った者達だわ。
その組織内で生きる全ての人間に、“闇は、この世の敵だ。光こ

そが正しい存在。だから、闇を憎め。光を敬え”と教えてるらしいの。馬鹿らしい考えでしょう？　でも、本気でそれを信じている人間が大勢いるわ。

さて、この話はここまでよ。きっと近いうちに、アオイは知ることになるわ。だから、覚悟をしておいてほしい。それと一応、彼らを信じてあげて欲しい――

ユリエルの話に、アオイは眉間に皺を寄せた。

（本当に、馬鹿みたいな考えだね。彼らっていうのは、アンジェ達のことだよね？　大丈夫。もう、とっくに信じてるよ）

一ヶ月以上一緒にいて、アオイはアンジェ達を信用するに値する人間だと判断した。それでも、まだ闇の力の話はしていないが。

――そう。それは、よかった。・・・・・・ところで、アオイ？　最近、侍女達を寝台に入れてるようだけど？――

（だって、寂しいんだもん。この世界にある程度慣れてきて、心に余裕が出てきたら寂しくなった）

――なるほど。そのことだけどね、もしかしたら近いうちにこの世界に一人訪れるかもしれない。多分、期待はしてても良いかもしれないわね。結構、良いところまで来てるから。それほど、アオイの事を想っている――

（誰だろ？）

アオイの頭の中に、ある人物が思い浮かんだ。いつも、一緒にいてくれたアオイにとって、とてもとても大切な人。

――秘密よ。きっと、その時になったら分かるわ。もし、来たらわたしがアオイに教えてあげるから。それとね、そのうちにアオイが全部を知る手伝いをしてくれる人が現れるわ。その人は、信じても大丈夫よ。アオイに、嘘をつけない人間だから――

知りかけた真実（後書き）

ごめんね、ユリエル。
もうちょっと早く出したかったのに出せなくて（汗）

守りたいと願う

「グレース殿、こちらは終わったよ」
「あぁ。オレも、コイツを片付けて終わりだ」
ヴァルトの言葉にオレは、躊躇いもなく目の前にいるやつを斬り殺す。そうじゃなければ、姫さんが危険なだけだからな。
絶対に姫さんを、危険になんてさせたくねぇー。そのためなら、オレは何だってやる。それが、人殺しだろうがなんだろうが関係無いな。
それに、レーゲン達が姫さんの配下に下ってから姫さんを狙う奴らが確実に増えた。昼夜問わず、姫さんに仕掛けてくるようになった。
姫さんは、日を追う事に闇を扱う力が強くなってきてる。オレのように、闇を使っての情報収集もできるようになってるんだ。
だから、姫さんはこのことに絶対気づいてる。
だけど、何も言わずオレらに任せてくれてる。それって、オレらの事を信頼してるって事だろ？
このことが素直に嬉しい。
可愛いく思うと同時に、愛しくも思う。

正直オレは、姫さんが来るまで伝説の花嫁がアンバーチェ家の奴と必ず波長が合うって事が信じられなかった。
ただの偶然だと思ってた。
伝説の花嫁が召還された時代に、生きてて仲良くなったっていう婆さん方が「同性じゃなかったら、結婚してたのに！！　我が子孫で、召還されし者と異性である場合は結婚しとけよ、馬鹿やろー！」って悔しそうな言葉を残したってのを聞いても、どこか馬鹿にしたような感じだった。
あー、でもな。

いるんだわ、これが。同性同士で結婚したっていうの。
なんか、四代目は両方大丈夫っていう人間だったらしくて婆さんも別に同性同士っていうのは気にしなかったらしい。それで、三人仲良く暮らしたらしいぜ。
けどな？
やっぱり、同性同士っていうのは問題があったらしい。公表されてねぇーし。公では、一般庶民とだけ結婚したって事になってるな。
一応事実は、四代目は婆さんと一般庶民と結婚したってことになる。

話逸れたな。
姫さんを、召還するにあたって今のところアンバーチェ家には男のオレしかいないから念のためってことで幽閉された。
でも、オレは闇属性だからどこでも移動できるし、影を使えば情報収集だって簡単だ。
いつ自分の属性を知ったか。そして、なぜ闇が嫌われてるのかってことは、まだ姫さんも知らないから秘密な。
まぁ、言えることはただ一つ。

人間って馬鹿だな！！

って事くらいだ。

おっと、いけねーな。また、逸れちまった。
盗み聞きと盗み見は、オレの趣味じゃないが姫さんが召還されたのを影から得た情報で知って覗きに行ったんだ。
いやー、やられちまったよ。
婆さん方、ごめんな？
信じなかったことと馬鹿にしたような感じのことは、真面目に謝

るぜ。なんなら、土下座でもして良いくらいだな。
それぐらい、オレにとって衝撃的だった。
この子こそが、オレの姫だって直感的に思った。そして、自分がアンバーチェ家の人間なんだって初めて実感した。
何よりも、その存在にオレは心惹かれた。手に取るように、考えてることが分かった。何に、悩んでいるのかも分かった。
きっと、闇のことで悩んでるんだろうな。女神ユリエルも、「きっと、あの子はすっごく悩むと思うわ。なにせ、元々世界にはないことだもの。しかも、アオイ自身が闇そのもの。
だから、アオイは闇に呼ばれてる。でも、今のアオイには恐怖以外のなにものでもない。だから、闇を持つ者よ。あの子を助けてあげて」
って言ってたからな。
だから、早く会いたいって思った。勝手に、夢に侵入して連れてきた。
色々と悩んでる姿は、正直可愛かったな。
でも、さすがに姫さんの「信じてない」発言には驚いたな。殿下達は、姫さんに一目惚れしたみたいでそれが態度にはっきりと出てるのに気づいてないみたいだからな。
アレには、涙が出たよ。もちろん、同情心でだよ。
まぁ、ざまーみやがれ！！　って思ったけどな！！
姫さんは本当に、無自覚で鈍感で困るわ。
だから、殿下達を信じてないのも納得できる。
オレの場合は、一発で姫さんの信用を得たけど。

でも、オレの前に姫さんの信用を得た人間がいるなんてなんか屈辱的だった。
その相手は、女だった。一安心したオレだったけど、あることを思い出した。

四代目のことだ。だから、姫さんにそれとなく「姫さんって、両方大丈夫な人間か？」って聞いてみたんだ。
「んー。基本的には異性だけだけど、がんばれば同性もいけるかなぁ」って言ってたから、「がんばらなくて良い」って言っておいたよ。
それにしても、コニーデは邪魔だ。姫さんにとって、必要な人間でもオレにとっては邪魔な存在だ。オレと姫さんの二人だけの時間が、ほとんどない。
もっと、姫さんと二人だけでいたいのにいちいち邪魔してくるんだ。まぁ、向こうもオレと同じようなことを思ってるだろうけどな。
コニーデだけでも、十分邪魔だってのに姫さんは三人も拾って来やがって。しかも、姫さんにべったりと来ると腹が立つ。
特に、シュネ！　あいつは、同性なのを良い事にべたべたと姫さんに触りやがってよぉ！！　しかも、「どうよ？　羨ましいでしょ？？」とでも言うかのような目でオレらを見るんだ。
本当に、腹が立つ。はいはい、とても羨ましいよ。異性であるオレでは、姫さんにベタベタ触るのはよろしくないことくらい分かってるっての。

けどな？
異性だからできることだってある。異性だからこそ、やっても問題視されないことだってあるんだ。
姫さんが、オレに身も心も許してくれたら絶対にオレ無しじゃ生きてけないようにしてやる！！　って決めた。オレは、それだけの実力はある。

おっと、回想に浸ってたらどうやら口元がだらしなく緩んでたらしい。ヴァルト達が、怪しい者を見る目つきでオレを見てくる。お

いおい、ひでーな。
こいつらは、大丈夫だな。全くとは言えないが、問題はないと思う。
姫さんに絶対の忠誠を誓い、自分の人生も差し出した。つまり、完全に姫さんの配下に下るということ。
だったら、姫さんを女として愛するという危険はねぇ。姫さんの事を愛するだろうけどそれは親愛から来るものであって、オレらのような愛情から来るものではない。
それに、こいつらは役に立つ。諜報活動に長けていて、姫さんを暗殺をしようとしてる人間の素性を調べてきてくれる。その、情報をオレは団長に一応報告する。こっちで、勝手に報復することもあるが基本的には報告している。オレらよりも団長や殿下方の方が、そいつらを罰することのできる可能性は高いからな。

オレが、この皇宮周辺に展開してある闇の結界のような物に反応があった。
「また、おいでなさったぜ。次は、五人。オレが、二人もらうぞ」
「了解です。こっちは、残りをもらいますよ」
あいつらと別れて、姫さんの部屋の前まで行くと二人が堂々と侵入しようとしてるやがる。
オレは、闇を使い二人を拘束する。

「なっ！！」
「どうなっている！？」
ハハハ、慌ててやがる。

「どうもこうも、オレの力でお前らを拘束しているだけだ。分かってるよな？　この部屋の主に手を出そうとしたんだ。生きては、帰すわけにはいけねーな」
気配を殺して、近づいていたオレに二人はビビっている。よく、

それで暗殺の仕事ができるよな。ばかみてーだろ。
オレは、音もなく剣を抜き無感情に切り裂いた。錆びた鉄の匂いが、辺り一面にするが魔法で綺麗に消した。
扉の向こう側で、姫さんは寝ている。もしかしたら今での、姫さんを起こしたかもしれないが中には入らない。どうせ、姫さんも起きても外には出てこないからな。
コニーデやシュネの代わりに、オレが姫さんの隣で寝たい。だけど、オレの場合は理性が吹き飛ぶかもしれないから無理だ。
それほどまでに、オレは姫さんを望んでいるんだ。

最初は、オレ以外の人間でこの子を守る者が現れるまで守ってあげたいって思っていただけだったのに。
今となっては、とても愛しい。オレの傍にずっといて、オレがずっと守りたいって気持ちが大きくなっている。
この気持ちを持ったことに、オレは絶対に後悔しないな。
それだけ、もう姫さんに溺れてるって事。

愛してるよ、姫さん。
今、オレの目の前から姫さんが消えれば簡単にオレは狂える。姫さんと、関わることのできない人生なんてオレはいらない。
きっと、ここまでオレの気持ちを揺れ動かすのは姫さん、ただ一人だな。

守りたいと願う（後書き）

はい、グレース視点でした。
アオイがコニーデ達を寝台に連れ込んでいる間に、彼らはなにやってるのか？
っていう裏話的な感じかな！？

色を失った世界

オレは、最近自分でも分からない感情に悩まされている。
寂しくて哀しいと思うのは何でだ??
何かが足りないと思うのはなぜだろう。

「棗??　もう一回しないの??」
「そんな気になれない。それにオレは、一回だけって言っただろ」
裸のまま抱きついてくる女を冷たく振り払って、オレはシャワーをさっさと浴びてホテルを出た。
家に帰るまでの道中、オレの頭の中の半分以上を占めているのは、自分の中にある意味が分からない感情のことだ。

学校にいても家にいても、家族といても友達といても女といても心にぽっかりと穴が開いているようで寂しい。
最近、同じ夢を見るようになった。
暗闇の中、誰か分からない奴の背中を見て追いかけようとしても自分の足がまったく動かない。そして、オレは手を伸ばしながら叫ぶんだ。「オレを、置いていくな!!!」って。だけど、そいつは一度も振り返ることはなくまっすぐどこかへ歩いて行っちまうんだ。そのことに対して、胸が張り裂けそうなくらい哀しい!!!!
だからか、オレはいつも目が覚めると泣いてる。

分からない。まったく分からない。オレは、どうしたんだ??
なぜ、だれといても満たされない?
なぜ、だれといても寂しい?
なぜ、だれのことも

愛せない??

オレは、女といても女を抱いていても愛せない。それよりも先に、好きになることができない。抱くって言っても、ただの性処理に近いものがある。どんなに、周りが可愛いと言ってもオレ自身は可愛いと全く思えない。

まるで、自分が誰もが可愛いという女と誰かと比べているように。

は?

“誰かと比べてる”だと?

オレが、誰と比べるって言うんだ。誰のことも愛せないのに。

けど、頭の中で“絶対あいつの方が可愛い”って毎回思ってる。

これは、紛れもない事実だ。

でもさ、その“あいつ”って誰なんだよ。分からない。そんなことを考えるくらいだから、オレは絶対にそいつを知っている。でも、分からないのは何でだ??

もしかして、オレは思い出せないだけなのか??

だったらオレは、誰を忘れているっていうんだ!!!!!

あー！！！
思い出せない！！
思い出そうとするたびに、誰かがってか何かが邪魔するように頭に靄(もや)がかかった感じになる。掴めたと思っても、するりと逃げるようにすぐに消えちまう。だけど、思い出そうとする中に今まで誰にも抱けなかった感情があふれ出てくる。
それは、

“愛しい”

って気持ちだ。
あぁ、オレはあいつをこの世の誰よりも愛してた。
いや、今も愛してるんだ。だから、オレは絶対に思い出さなきゃいけない。
愛しい奴の記憶がないなんて、絶対に嫌だ。無理だ。泣きそうになる。
いつまで経ってもあいつは、泣き虫だからオレが傍にいて抱きしめてやらなきゃダメなんだ。それに、オレはあいつが他の男の腕の中で泣いてるなんて考えたくもない。もしかしたら、今この瞬間にも泣くのを我慢しているかも知れないと思うと嫌になる。自分の弱い部分を、強がりで全て隠そうとしていたから。我慢なんてしてほしくないんだ。溜め込んで結局は、溜め込みすぎで爆発して泣くんだ。そんな、泣き方をしてほしくはない。素直に、オレのことを頼って欲しい。
なぁ、そうだろ？

……葵

あぁ、そうだ。葵だ。オレが、愛してるのは葵だ。思い出した途端、葵と過ごした愛しい日々の記憶がどんどん色鮮やかに甦ってきた。

葵、お前がオレの傍からいなくなってオレの世界は色褪せた。白黒の世界にしかならない。

お前はこのことが、おかしいと思うか？　オレは、おかしいと思わない。分かってたことだから。お前が、オレの前から姿を消したらオレ自身がどうなるかなんてな。

今、どこにいるんだ？　やはり、オレは葵がいないこの現実に耐えられそうもない。

昔から、オレの願いはただ一つだ。葵が、オレの傍にずっといること。いや、オレが葵の傍にずっといられることだ。

オレの人生は、とうの昔に葵にあげた。オレは、自分の人生を懸けて葵を愛すって決めたから。

だから、

会いたい。会いたい会いたい会いたい！！

この気持ちが、狂気に変わる前に葵に会いたい。

会って、愛してると告げたい。葵の身も心も、全てをオレのものにしたい。

葵の傍に行けるなら、神にだって縋れる。

誰か、頼む！！

葵の傍にいさせてくれ。オレには、葵が必要なんだ。オレが生き

ていける理由は、葵なんだ。葵が、いないならオレが生きている意味なんて無い。
オレが、葵に執着しているのは分かってる。依存してるのも分かってる。だけど、求めずにはいられないんだ。

――そんなにも、アオイの事を想っているのなら彼女のところに連れて行ってあげましょう――

（誰だ！？）

突如、オレの頭の中に響いた声。この声の主は、葵がどこにいるか知っているらしい。

――わたしの名は、ユリエル。今、彼女がいる世界で女神をしている者。そして、この世界での、彼女の存在を消した物でもあるわ。この世界での彼女の存在を、完全に消したはずだったのにも関わらず貴方は思い出した。それは、魂に刻まれし記憶。だから、貴方にはあちらの世界に行く権利がある。
さぁ、どうする？
行く？
それとも行かない？？――

（もちろん、行くに決まってる。葵がいるなら、オレはそこがどこでも行く）

――この世界に、二度と戻れないとしても？　それで、貴方の家族は悲しまないのかしら？――

（葵への気持ちを、なめないでもらいたいな。葵がいないなら、この世界に用はないし未練もない。家族は、二人の本当の子供が生ま

れるらしいから良いだろ）
　それでもオレは、父さんと母さんには感謝してる。あの二人が再婚をしなかったら、きっとオレは葵に出会えなかったから。だけど、父さん達と葵を天秤にかけても重さは断然葵だから。

　――――そう。それじゃぁ、貴方を連れて行きましょう。忘れないで。アオイも、貴方に会いたがっていたことを。その気持ちを、狂気に変えないで。もう二度と、わたしは失いたくない。だから、今のままでアオイを愛してあげて――

　ユリエルの言葉の意味が、オレには理解できなかった。
　だけど、

（アイツが、オレのことを見ていてくれる限りこの気持ちは狂気にはならない）
　オレが、そう言った瞬間オレの体は光に包まれた。

色を失った世界（後書き）

やっと、出てきた棗くんでしたー。
プラス
ユリエルの意味深な発言でしたー。

求めていた再会

食堂で昼食を食べ、部屋に戻ってきたアオイが、長いすに座りながらうとうとしていた時だった。
女神の声が、頭の中に響いたのは。
眠りかけていた思考は、瞬時に覚醒しアオイは走り出した。
今まで、うとうとしているアオイを可愛いと思いながら変態のようにじっくりニヤニヤしながら見ていたグレース達はアオイが走り去っていったことにしばらくは気づかなかった。今日の可愛いアオイの姿を頭の中に、焼き付けておくことに夢中になっていたからだ。特に、あの二人が。
アオイがいないことにようやく気づき、慌ててグレース達はアオイを探しに走り出した。
そんな人間の事情を知らないアオイは、とにかく全速力で走った。
（うわー。こんなに一生懸命、走ってるのっていつ以来だ？　うん。わかんないって事は、すっごく昔って事かー。まぁ、マラソン大会とかテキトーに走ってたし）

辿り着いたのは、神殿だった。
肩で息をしながら、儀式などでよく使われるという部屋の扉を、開けた。
そこで見たのは、少なからずここ最近のアオイが求めていた人だった。一番最初に見えたのは、後ろ姿だけだけどアオイが見間違えることはない。
（あぁ、あの後ろ姿は棗だ。でも、もし万が一棗じゃなかったら？）
そんな風にも思ったが、アオイは期待を込めて、

「棗？」

と呼んだ。その声に、ピクリと反応し勢いよく振り返ったのは、やはり棗本人。

「あ、おい？　本当に葵？　夢じゃないよな？」

「棗！！」

アオイは、棗の問いかけには答えず、ただその胸に飛び込んだ。尻餅をつきながらも棗はアオイをしっかりと抱き留めている。

「触れるってことは、本当だな。良かった。会えて良かった」

「ユリエルが『アオイが会いたい人に、神殿に行けば会えるわ』って言われたから、猛ダッシュでここに来たの。来てくれたのが、棗で良かった。会いたかったよ、棗」

じんわりと涙で視界が滲んできた。それでも、アオイは泣くのを我慢する。そんなアオイを見て棗は、アオイの頭をぐっと自分の肩の辺りに引き寄せ、

「泣きたいなら、泣けばいい。我慢なんて、オレの前でする必要はないんだ」

と言いながら、もう片方の手でアオイの背中を優しく撫でる。

「本当は、怖かった。誰も、知らない世界が怖かった。家族も友達も誰もいなくて、寂しかったのっ！」

アオイは、自分の目から涙があふれ出てくるのを感じ、棗はアオイの頭を寄せた方の左肩が湿ってくるのを感じた。それでも、それを気にした風もなく、ただ背中を撫でるだけだった。

普段は何があっても泣かないのに、棗を目の前にすると簡単に涙が出てくる。それが、なぜなのかアオイには不思議で仕方なかった。

しかし、唐突に理解した。

（あぁ、棗が私の全てを受け止めてくれるからだ。私がいくら強がっても、それを平気で崩してくるからだ）

そう思うと、心に明かりが灯ったように暖かくなる、この感情の名をアオイは知らない。それだけではない。アオイは、グレースやアンジェ達と過ごしている中で、ドキッとしたり、急に心臓の鼓動が速くなったりする意味も、そんな中から溢れだしてくる感情の名さえも知らない。

「そうか。でも、今からはオレがいる。もうお前に、寂しい思いをさせないよ」
「ありがとう、棗」
「うん？　気にするな。ところで、オレに会いたがってたって本当か？」
「え？」
アオイが顔を上げると、棗と目が合う。まだ、アオイは涙を流しているが、棗はそれを優しく拭った。
「女神？　だっけ？？　そいつが、言ってた。」
「だって、今まで毎日会ってたのに、急に会えなくなったから。寂しいじゃん」
「・・・・その言葉を、聞いただけで地球から存在を抹消されてまで、お前のところに来た甲斐があったってもんだな」

（・・・・・・・は？　まっしょう？　何それ。まっしょう。・・・・抹消！？）

「はぁ！？　抹消！？　何で、こっちに来ちゃってるの！　棗に、拒否権はあったでしょ？　地球に未練あるでしょ！？」
「何でって、お前に会いたかったから。確かにオレには拒否権はあったけど、そんなのは存在してないのと同じだ。地球になんか、未

練は全くないよ。良いか？　葵。よく聞け」
「うー、はい」
「オレは、お前がいないだけで世界は色褪せて見える。この意味が分かるか？」
　優しく問う棗だが、アオイはただ首をかしげるだけだった。そんなアオイに棗は、ただ苦笑するだけだった。
「あのな？　オレは、お前が好きすぎる。だから、お前がいないだけで世界は色褪せて見えるんだ」
「そうなの？？」
「あぁ。この際だから全部言うけど、オレはお前がいないと生きていけない。お前がいない現実に耐えれるほど、オレは強くないんだ。失うと考えるだけで、狂えるほどオレはお前に執着してる」
　ずっと心の中に溜め込んでいたものを吐き出すように、棗はアオイに自分の気持ちを吐き出していった。
「だから、傍にいさせてくれ。オレは、お前の存在を思い出した。もう、忘れたくないし、失いたくもない。頼む、オレの前から姿を消さないで」
　アオイは今まで、こんなにも棗が弱々しく何かを言うところを見たことがなかった。だから、すさまじく衝撃を受けた。
「棗が、そんなこと考えてるなんて全然知らなかった。私は、棗が離れていくまで離れるつもりないから」
「それなら、安心しろ。オレが、お前から離れるなんて絶対にあり得ないから」
　笑いながら、互いを強く抱きしめる。

　その時、大きな音と共に扉が吹っ飛んできた。

　なぜ、扉が飛んできたのか分からず扉が元々あったところを見て

みると、アオイが部屋からいなくなったのに気づいて皇宮中を探しまくっていたコニーデ達と、クリスから何者かが召還されたかも知れないという知らせを受けて急いでやってきたアンジェ達がいた。

求めていた再会（後書き）

長くなりそうな予感が、とてもとてもしたので分割です。

初めてアオイちゃんが泣きました。
次は、誰の腕の中で泣かせましょうか。
この人が良い！！　と言う人がいましたら教えてくださいませ♪

勘違いはいけません

最初に反応したのはアオイだった。
「あれ？　みんな、どうしたの？？」
「ひ、ひ、姫さん！！　オレに、内緒で浮気してたのかぁぁぁぁ！！　この浮気者ぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」
「えぇー！？　グレースの恋人が、浮気してたの！？　ダメじゃない！　グレースが、可哀想よ。
ちょっと、お説教に行ってこなきゃじゃん。『浮気なんて、気の迷いなんだからグレースだけで我慢しなさい』ってね。
ていうか、グレースって恋人がいたんだ。いるならいるって、早く言ってよ」
かなりずれたことを言うグレースに対し、さらにずれた回答をアオイは返した。そんなアオイに、ナツメはやれやれと首を振り、いまだに座ったままだったので立ち上がり、アオイにも手を貸して立ち上がらせた。
ついでにナツメは、立ち上がったアオイの腰に腕を回し抱き寄せた。その姿に、そこにいた全員の目つきが刃物のように鋭くなる。
「ちがーう！！　オレじゃない。てか姫さん、ひでぇーぞ。何？『グレースだけで我慢しなさい』って！
オレ、ちょーいい男だから、オレ以外の男なんて視界から消えちゃうよ？
つーか、そもそも、オレには恋人は存在しない！！　そいつだよ、そいつ！　姫さんの腰になれなれしく、腕を回してる奴！！」
「んー？　あぁ、この人？　この人は――――――」
「良いよ。自分で言う」
アオイの言葉を遮りナツメは、
「初めまして。緋野　棗と言います。こちら風に言うと、ナツメ・ヒノになるのかな？　よろしく」

と笑いながら言った。しかし、目は笑っていなかったのだった。

「ナツメだと？　コイツが、前に言っていた奴か？？」

今にも舌打ちしそうな勢いで、ヒューズがアオイに問う。

「そうだよ」

「似てないよね。双子って言ってたけど、本当に双子なの？」

（・・・・・口調は柔らかいけど、目が笑ってなくて怖いですヨ、クリスさん！！　よく見れば、みんな怖い目つきシテル。特に、レーゲン達こわっ！　目線で、人が殺せるなら、私とナツメは死んでるな。ハハハハ）

ダラダラと、背中に冷や汗が流れ出した。顔が、引きつってないだけ褒めてもらいたい。

「オレとコイツが双子？　んなわけないじゃないですか。オレは母さんの連れ子で、コイツは父さんの連れ子ですよ。だから、血は一滴たりとも混じってませんよ」

「あ、やぱり。おかしいと思ったんだよねー。私が、黒髪黒目なのに対して、ナツメって綺麗な茶髪に茶が混じった黒目だもんね。顔のパーツも、似てるところないし。納得だわー」

「納得してくれて、なによりだよ。オレは、お前がこのことについて知らないと思ってたから手が出せなかったけど、そうじゃないなら出しても良いよね」

アオイは、棗が言っている意味が全くと言って良いほど分からなかったが、アンジェ達には分かったのだろう。眼力がさらに、鋭くなってアオイではなくナツメを睨みつけている。

「で、コイツは何でこっちに召還されてきたんですか？　あなた方は、コイツの何ですか？」

「アオイは、伝説の花嫁としてこの帝国に召還された。

基本的には、皇族もしくは王族のための花嫁になってもらいたいのだが、女神ユリエルの次の位に位置づけられる伝説の花嫁には、皇族達と同じように恋愛結婚が求められる。
しかも、この世界では皇族達は多婦多夫制で、それも伝説の花嫁は認められてるんだ。
だから、ここにいる俺達のほとんどは、アオイの伴侶候補になる。もちろん、この世界に来たナツメもな。」

「へぇ。でも、良いんですか？　花嫁は、処女じゃなくて。言っときますけど、コイツは処女ではありませんよ？」

ナツメは、とてつもなく大きい爆弾を落としてくれた。その爆弾は、アオイにまでダメージを与えた。
「なっ。お前、経験済みだったのか！？」
「まじで！？」
「え？　うん。まぁ。普通に、恋人いたし。て、ちょっ、ナツメ？　何で知ってるの！？」
アオイは、いそいそとナツメの方を向き、胸ぐらを掴みあげた。
「教えられたんだよ、由哉（ゆうや）に！」
その名前を聞いた時、アオイの手から力が抜けた。由哉とは、アオイが二人目に付き合った彼氏であり、ナツメの親友・・・・・・・らしい。ナツメに教えた理由は、おそらく、アオイの事が大好きなナツメをからかいたかったのだろう。
「なに、ちゃっかりナツメに言っちゃってるの。由哉のばかぁぁぁぁぁぁぁ！！」
今、この世界にもいないし、地球でもアオイとナツメの存在を忘れているであろう、かつての恋人にアオイは暴言を吐いたが意味をなしていない。
「まぁ、花嫁には処女では無いということは珍しくないらしいし、

その男の子を妊娠しているわけじゃないから大丈夫だ。妊娠していたら、召還対象から外れるだろうからな」

話が一段落付いたところで、

「アオイ様ー！」

「我が君ー！」

と言う声と共に、コニーデとシュネが駆け寄ってきたのでアオイはナツメから離れ、二人に抱きついた。その二人の近くに、レーゲンとヴァルトがゆったりとした足取りで近づいて来た。

「皇宮中を、探したんですよ。何か、事件に巻き込まれたのではないかと、心配いたしましたが何ともなくて良かったです」

「本当に、大変だったんですから。今度、どこかへ行く時はちゃんと声をかけてください」

「ごめんね？　でも、探してくれてありがとう」

「いいえ。我が君のことなら、我らは何だってしますから」

「そうです。オレらは、我が君がどこへ行こうと探し出してみせますよ」

どこか誇らしげに、レーゲンとヴァルトは笑った。

一方、他の男達は自己紹介という名の腹の探り合いをしていた。

その光景が、何とも不気味というか近づきにくいとアオイは思うが、言ったら可哀想という気もしたので言わないのであった。

勘違いはいけません（後書き）

驚愕の事実を知ってしまった、アンジェ達です。
そして、コントみたいになってしまっていたグレースとアオイでした。

あ、これからは絶対に地球での過去話以外は、「アオイ」と「ナツメ」になります。

由哉がナツメに教えた事についての詳しい事は、活動報告にて。

嫌がらせを受けています

扉をノックする音が聞こえ、それにコニーデが応え、扉を開けるとナツメがいた。アオイは、読んでいる本から顔を上げナツメを見る。

「なぁ、アオイ」

「んー？　どうしたの？　ナツメ」

「この世界って、魔法があるんだよな？」

既に、女神ユリエルによってナツメがヨームルダン帝国に召還されてから一週間程度が経った。その間、ナツメは主にクリスからこの世界の説明などを受けていたのだ。

その合間に、アオイは自分が、闇そのものであるらしいということについても話しておいた。ナツメの反応は、とても彼らしく、

「アオイは、アオイだろ？　どんな、アオイでもオレは拒絶しないよ」

だった。でも、ナツメは知らない。この言葉に、ナツメの反応がどんなのか分からなくて内心ビクビク怯えていたアオイが、ナツメの言葉に救われたことを。

「あるね。それが、どうかした？」

「いや。オレにも、使えんのかなぁーって思っただけだから」

「どうだろ？　使えるんじゃないのかな。私も使えるし。あ、セルのところに行ってみる？　たぶん、セルなら分かると思うんだけど」

「そうするか。行ってくるわ」

「私も、行く！　ねぇ、グレース？　闇の回廊使っても良い？？」

珍しく、扉の近くに控えていたグレースにアオイは問う。いつもアオイの傍にいるシュネやレーゲン、ヴァルトはアオイの指示で最近、アオイに嫌がらせのような物をしてくる人物を割り出すために

諜報活動に行っていた。

そう。最近、アオイは嫌がらせを受けていたのだ。ここのところ毎日、部屋の前に動物の死骸が置いてある。これは、グレースが普通に拾って、闇を使いどこかそこら辺に捨てていた。

「さっさと化けの皮をはがされると良い。そして、殿下達にこっぴどく振られて捨てられろ」という謎の手紙を何通か受け取ったりもした。読み終わった後、コニーデが問答無用で手紙を奪い取り、「kれは、良い証拠になるわ」と真っ黒な笑みを浮かべ、自分の部屋にしまっている。

魔法で出現した水を頭からかぶせられそうになったりしたが、これは闇がアオイが防御を考える前に動いて防いでくれた。

（どうせ、アンジェとか、カインとかと過去に関係を持っていた人とかでしょ―。めんどくさいな。でも、そろそろ我慢の限界かも）

今まで、アンジェ達に心配をかけたくなかったので笑って過ごしてきたが、人にも限度というものがある。

「私に、こんな幼稚な子がするようなことをしてくる人・・・・あぁ、幼稚だからこんなことするのか。まぁ、良いわ。とにかく見つけ出してきて。見つけ出したら、名前とか性格、素行など詳しいことを全て調べて、まとめて私に提出ね。きっと、一人じゃないだろうから手分けして行ってきて」

絶対零度の微笑みを浮かべながら言うアオイの意見に、ヴァルト達は諸手を挙げて賛成をした。自分達の大切な主に、嫌がらせをする人物達が許せないのだ。過去に、アオイを暗殺しようとしていた人間も、アンジェ達に許可をもらい報復をしてきた。調べるなんて、造作もないことなのだ。

「いやいや。やめてくれ。オレが、使うから。・・・・・・姫さんの闇の回廊は、どこに行くか分からないからハラハラドキドキもんなんだからな」
「あー、確かに。アオイは方向音痴だからな。まぁ、そこが可愛いところでもあるんだけどな」
　言葉の後半部分は、誰にも聞こえないように呟いたはずなのにナツメには聞かれてしまったようで、困ったように言葉を返された。しかし、その表情から困ってるなんてものは読み取れない。むしろ、可愛くて可愛くてしょうがないという感じだ。
「まぁな。それじゃ、行くか」
「はーい。あ、コニも一緒に行く??」
「生きたいのは山々だけど、アオイたちが帰ってきたら美味しいお菓子とお茶が出せるように用意しに行かなきゃだから、今回は遠慮しておくわ」
　本当に、残念そうにコニーデは目を伏せる。その言葉に、喜ぶのはグレースだ。
「よっしゃ。コニーデが、来ないなら邪魔者はいなくなるな」
「フフフ。グレース様、貴方は馬鹿ですか？　阿呆ですか？　間抜けですか？」
「はぁ！？　なんでそうなる」
「これから、行く場所はセシル様もいるところですし、それに、ナツメ様もアオイの傍にいますけど？」
「ちっ。そうだな。まぁ、コニーデよりは姫さんの傍にいられるから良いとするか。行くぞ。姫さん、ナツメ」
　グレースは、闇の回廊を開きアオイとナツメを先に通した。出た先は、騎士団と魔法師団詰め所近くだった。しかし、そこはどの角度からも死角となっていて見えない場所だからか、誰も闇の回廊に気づかなかった。
「へぇ。便利だな、これ。でも、オレには使えないんだろ？」

「あぁ。使えるのは、闇属性の人間だけだからな。ナツメの属性は、闇ではないみたいだから使えねぇーな」
「そうか。オレの属性ってなんだろうな。うーん。オレ的には、炎とか水が良いな。襲われても困らないし、生活の役にも立つし」
「さぁ？　団長にでも、調べてもらえばいいだろ」
「だな。行くぞ、アオイ。て、オイ！　どこに行く？」
「え？　詰め所じゃないの？」
「そっちは、詰め所とは違う方向だぜ、姫さん」
さっそく、方向音痴ぶりを発揮したアオイはグレースとナツメに呼び止められ、自分が違う方向に行こうとしていたことを知る。
（こっちじゃなかったんだ。これじゃ、私が方向音痴みたい・・・・・・・。方向音痴じゃないはずなんだけどな）
いまだにアオイは、自分が方向音痴だと言うことを自覚していなかった。

嫌がらせを受けています（後書き）

アオイが黒いです。そして、方向音痴だということに気づきませんでした。

アルファポリスファンタジー小説大賞にエントリーしてみました。
初めてのことなのでドキドキ気分です。
応援よろしくお願いします！

９／３に第１９話の魔法の説明の部分についてちょこっと変更しました。
基本的には、あまり変わっていませんが気になる人はぜひ読んでみてください。

秘密にしておくことにしました

鍛錬所に着くと、多くの人達が剣を交えていた。遠くの方では、魔法師達がなにやら魔法を打ち合ってるのが見えた。
（打ち合って、危険じゃないのか！？　いや、どう考えても危険だよね・・・・・・）
アオイは、そう思ったが誰も気にしていないようなので、あんなものなのかと無理矢理納得させた。グレースが、隅で休憩している人の方へ近づき、
「セシル団長、部屋にいるか？」
と尋ねていた。「おぉ。いるぞ」という答えを得られアオイたちの方へ戻ってきた。
「いるって、話だから行くぞ」
詰め所に入ると、まっすぐ廊下を突き進み一番奥にある二つの扉のうち右にある扉を叩く。「どうぞ」と応える声を聞くとグレースは扉を開け、
「魔法騎士部隊隊長、グレース・アンバーチェ、入ります」
と言いながら入っていった。

（えぇー！？　グレースって、隊長さんだったの！？　知らなかったわ。てか、そんな凄い人に護衛を頼んでたのか・・・・・・。良かったのかなぁ？　まぁ、本人が引き受けてくれたんだから良いのか）
一人、うんうんと頷くアオイにナツメはただ首をかしげていた。

「どうしたの？　なにかあった？」
「いえ。ナツメが、自分は魔法が使えるのかと気になったらしいので、こういうのは団長が詳しいだろうと思って連れてきました」
「なるほど。じゃあ、試してみようか。えーっと、どこへやったっ

け？」
　部屋の中から、がさがさと音がしたので気になってアオイとナツメが中を見てみると、セシルとグレースが家探しを行っている最中だった。優しげで、可愛らしい雰囲気を持っているセシルの部屋とは思えないほど、中は散らかっていた。だからか、探すのに手間がかかっているようだ。
「何、探してるの？？」
「え？　あ、アオイだ。んーっとね、属性が何か調べられる水晶を探してるんだ」
「そんなのがあるの？」
「うん。この部屋のどこかに、あるはずなんだけどな・・・・・・・」
　引き出しという引き出しを開け尽くしても、見つからないようでセシルは首をかしげる。
「おかしいなぁ。やっぱり、ここはヒューに聞かなきゃかな。ねぇー、ヒューー！！」
　部屋から出て、正面にある扉を遠慮せずドンドンと大きな音を出しながらセシルが叩くと、「うるせーっ！」と言う声と共にヒューズが扉を開けて出てきた。
「何だよ？」
「あのね、僕の水晶が消えちゃったんだけど、どこにあるか知らない？」
「俺みたいに、いつも整理整頓してねーからそうなるんだろ」
　ヒューズの言葉は、アオイにとって少し・・・・・・いや、かなり意外だった。
（部屋とか、いつも整理整頓して綺麗に片付けてるのってセシルの方かと思ってた。言っちゃ悪いけど、ヒューってなんかガサツなイメージがあるというか、片付けとかしなさそうなイメージ持あるのに。ごめんね、ヒュー）
　そう思ってたことに、心の中で深くお詫びをしておく。

「はぁ。お前の執務机の一番下の引き出しに入ってるだろ」
「そうなの！？　鍵がかかってる箱しかなかったよ？？」
「それが、水晶だろ。大事な物だからって、代々その箱に入ってんの知ってるだろ。ちなみに、鍵はセルが持ってるはずだよな？　俺は、知らないからな」
「あー、うん。大丈夫。持ってる」
「じゃあ、それで開けろ。俺は、もっとアオイといたいけど、急ぎのやつが何枚か残ってるから諦めるわ」
　そういうと、肩を落とし明らかに落胆しているような表情になる。
「がんばってね、ヒュー」
「ありがと、アオイ。アオイの応援のおかげでやる気が増した」
　単純なヒューズは、意気揚々と部屋へと戻っていった。アオイたちも部屋へ戻り、セシル執務机の一番上の引き出しから鍵を取り出し箱を開けた。
　中には、透き通った水晶が入っていた。大きさは、手のひらにのせられるくらいの大きさだ。

「はい。これで、属性が調べられるよ。そうだ。アオイも調べる？？」
「ううん、いいや。私には、グレースとかヴァルトとかいるし。いざ、使うとなったら頑張って頭の中で構成して使うよ」
　内心、ギクリとしたがそれを表情に出さないように注意を払い、否定の言葉を口にした。セシルは、アオイのそれに違和感を覚えたが、その正体が何かまでは分からなかった。
「で、これを持ったけど、どうすればいいわけ？」
「その水晶を、意識して見てればいいよ。しばらくしたら光り出すから。属性が、炎なら赤に。水なら青に。土なら黄に。風なら緑に。可能性としては低いけど、光なら金に。闇なら黒に光を発するんだ」
「なるほど。じゃあ、やってみるか」

ナツメは、ジッと水晶を見つめ意識を集中させた。集中力を乱さないように、その様子をアオイたちは黙って見守っていた。いきなり、水晶がまばゆい金色の光を発し、部屋を包んだ。
「金ってことは、ナツメの属性は光？」
「そうなるね。うーん、貴重だなぁ。ナツメが自衛できるようになるまでは、アンジェ達以外には内緒にしておこうか。
そうじゃないと、誘拐とかされちゃうと思うから。光の属性って珍しいから、自分の傍にとか自分の味方に欲しいっていう欲望だらけの人達が大勢いるからね。
実際に僕は、誘拐されそうになってるところを見て助けたことだってあるし」
セシルの言葉を聞いて、ナツメはあからさまに眉を顰(ひそ)めた。
「それは、嫌だな。見たことがあるって事は、俺の他に光属性の人間って誰がいるんだ？」
「僕が知ってるのは、アンジェとクリスかな。カインは、水だし。ヒューは炎で、僕は土だからね」
「なかなか、その人の性格に似た様な属性だよね。だけどさ、アンジェが光だってのは理解できるよ？　けど、なんでクリスもなの！？」
（クリスが、光属性？　ないないない。だって、お腹の中は真っ黒じゃん。光ってイメージ的に、暖かい光で優しく照らしてくれるって感じがするけど、クリスの性格って全くの逆だよ。奈落の底まで突き落とすって感じだよ・・・）
アオイは、自分がクリスに対してとても失礼なことを思っている事に気づいていない。
「血筋かな。二人の家系って、光属性が現れやすいんだ。元々、この帝国の初代皇帝とその親友である神官長が、光属性の持ち主だったみたいだからね」
「なるほど。じゃあ、闇は？　セシルの知り合いの中に、闇属性の人っていないの？」

「闇かぁ。いないかな。闇属性の人間は、大昔に“闇の女神”が死んでから一度も、生まれていないって話だからね」
「何？　その“闇の女神”って」
初めて聞く言葉なのに、アオイは初めて聞いた気がしない。だけど、この感覚について全く分からないし理解もできなかった。グレースは、この言葉にピクリと反応したがアオイはそれに気づかなかった。
「僕もよく知らないんだよね。他の属性にはいないけど。
光と闇の両属性には象徴となる女神がいるんだ。光は、女神ユリエル。闇は、女神サーリア。
で、この闇の象徴である女神サーリヤが死んでしまったから闇属性も消えたって話だよ」
「そうなんだ。ふーん、分かった。そーだ、魔法の練習しよう？」
セシルからは、これ以上何も情報が引き出せないと判断したアオイは、素早く話題転換をした。
「だね。ナツメには、どんどん覚えていってもらわないと困るからねー」

秘密にしておくことにしました（後書き）

ちょこっとだけ、これからこの物語が進行していく上で、重要な単語が出てきました。
これから、だんだんと重要な単語などを出していく予定です。

報復の下準備

セシルに、魔法を教えてもらった。結果から言うと、頭の中で魔法を構成して力に表すのはアオイは少し不得意というより、威力が半端なく強くセシルから魔法を使うのは緊急事態を除き禁止を言い渡された。反対に、ナツメはとても上手かった。

「うーん。ナツメの魔力は普通程度だけど、アオイの場合は、きっと魔力が強すぎるんだろうね。しかも、なんとなく自然に干渉せずに使ってる感じに思えるし」

グレース指導の下で、ナツメが魔法の練習を離れたところでしていた時に、困った顔をしながら、そう言うセシルにアオイも困った顔しかできなかった。さすがに、「私は、闇そのものだから自然に干渉しなくても良いの」とは言えなかった。もう少し、秘密にしておきたいのだ。話すとしたら、アオイが全てを知った時。闇を嫌う者達の存在の真実、自分が闇そのものだという意味。この全てを知った時には多分話せるとアオイは信じている。

「だから、魔法の使用は禁止。使って、アオイが傷つくなんて、僕は嫌だからね。何かあっても、僕がアオイを守る。だから、安心して」

困った顔から一転して、蕩けるような甘さを含んだ笑みでこちらを見られたら、頷くしかない。「闇を使えるから、守られなくても大丈夫」とは、やはり言えない。

「でも、私にはグレースとかシュネとかいるよ？」

「それでも、僕は守りたいんだ。僕が、守らないとしてもアオイには大勢守ってくれる人がいるのも分かってるし、アオイが大人しく守られてくれるような性格をしていないのも知っている。

もしかしたらアオイは、誰かを守ろうとして傷つくかもしれない。それでも、僕は自分勝手かも知れないけど、アオイに傷ついて欲しくない。だから、アオイの事を守りたいと願うよ」

「じゃあ、何かあった時はお願いね」
そんな約束をした次の日の午前中に、シュネ達は戻ってきた。

「ただいま戻りました、我が君」
「おかえり。それで？　どうだった？」
「ちゃんと調べてきましたよ。素行や人格が悪い人ほど調べやすいんです。だから、楽に調べられましたよ」
「なるほど。じゃあ、報告よろしく」
「はい。我が君に、嫌がらせの数々を行った女は三人いました。

まず一人目は、シシリア・フォレス。年は、二十歳。位は、伯爵家三女。

家族構成は、帝国の小うるさいじじぃとして居座っている父親とその父親に従うしか脳のない母親。そんな両親から生まれたとは考えられないほど優秀な三十歳の長女と二十七歳の次女。そして、自己中な二十歳の三女です。

父親の方は、殿下がやる事為す事全てに反対をしているようですね。古い考え方に囚われず、どんどん新しいことを取り入れていく殿下が、お嫌いだとか。今では、若手全員から『もう、隠居生活でも送ってろよ』と邪険に扱われているみたいです。それも、気に入らないんでしょうね。

母親の方は、そんな夫に従うことしかできない低級な脳みそしか持っていない愚かな女ですね。

長女の方は、そんな両親を見て育ったためか、とても優秀になん

たようです。婿を取って今は、両親に代わり領地で夫婦共々、仕事に励んでいるようです。子供は、二人で跡取りも決まっているみたいですね。

次女の方は、そんな姉に憧れてか、姉と同じように優秀に育ったようですね。現在は、隣の国のライウィン帝国と繋がりを持つために公爵家へ嫁いだようです。夫婦仲は、良好のようで子供が三人います。

そして、三女は年を取ってから生まれた子供と言うことで溺愛のしすぎて、我が儘で自己中な女に育ったようです。父親に一人甘やかされて育ったせいか、優秀な姉二人を馬鹿にしているようです。父親が、『嫁になんぞやりたくない！』ということで婚約者もいません。

まぁ、長女と次女は良いとして、こんな女と結婚したいという男はいないでしょうね。あぁ、でも持参金をたんまりと積めば、嫁のもらい手の一つや二つはあるんじゃないんですか。

この女と関係を持ったのが、カイン殿のようです。しかし、関係は一回だけだったようです」

人畜無害そうな顔をして、ヴァルトはサラッと毒を吐く。

「次に、ハミール・グレッチェ。年は、十九歳。位は、男爵家次女。

家族構成は、欲丸出しの脂ぎった父親とその父親を見限って家出をした二十四歳の長女と十九歳の次女です。母親は、次女が生まれてから二年後に亡くなったようです。死因は、病死ということですが、詳しい原因は不明だそうです。噂では、賢い妻を妬んだ夫が毒殺をしたというものがありました。

父親は、領地に引っ込んでいいますが、欲望だけは人一倍らしく何かに付けては皇都に来てますね。ついでに言うと、税が重すぎて領民からの反発も強いみたいです。

あと、国に納めるはずの税は、『今年は、たいそう最悪な年でして』とか言いながらあまりだしていないみたいですが、最悪と言うことはなく例年通りだそうです。領民から納められたものの中で、国に納めたほんの僅かな物以外の物は自分の物にしているみたいですね。

家出をしたという長女ですが、今はここからずっと南に行ったところにある国境近くにある街で、飲食店で働きながら幸せに暮らしているようです。最近、結婚をしたらしいですよ。

次女の方は簡単に言うと、シシリア・フォレスの腰巾着一号ですね。何かあれば、すぐにシシリア・フォレスの味方をして信頼を得ているようです。だからか、何かと援助してもらっています。シシリア・フォレスからの信頼を落とすのが怖いのか、いつも黙っていてここぞという時にだけ発言をしているみたいです。

夫も婚約者もいないみたいですが、これはシシリア・フォレスがさせないようにしているという話です。曰く『わたくしよりも、先に結婚しようなんて認めませんからね？　何せ、わたくしの方がお前よりも身分は上ですし魅力的ですから』だそうです。

この女が関係を持ったのがヒューズ殿とセシル殿。二人で相手をしたようで、関係は一回で終わっています。」

ヴァルトは、何を考えているのか分からない表情でアオイに報告していく。

「最後は、カラリア・デルク。年は、十六歳。位は、ハミール・グレッチェと同じく男爵家で長女です。

家族構成は、両親は素晴らしい領主として有名ですね。兄弟はいません。必然的にカラリア・デルクが婿を取り、その婿が跡継ぎとなります。

父親も母親も領民思いの人達らしく、無理な税の搾取や領民を虐げるなどの事はないようです。

その血を受け継いでいるはずのカラリア・デルクは、シシリア・フォレスの腰巾着二号ですね。気が小さく何でもシシリア・フォレスに従っているという話ですが、それは表の顔での話のようです。裏では、傲慢で高飛車で捻くれた性格をしているようですね。あと、自分より身分が高い者には逆らわず、おとなしく気が小さい子を演じるという猫かぶりな性格もしてますね。

このような性格になった原因は、多忙な両親にほとんど構ってもらえずにいたら、そうなったみたいです。まぁ、簡単に言ってしまうと、寂しがり屋の甘ったれた馬鹿な娘という事ですね。普通に、贅沢を言い自分より身分が下の領民を見下しているみたいですね。領民の専らの悩み事は『なぜ、あの両親からこんな娘が生まれるのか』だそうです。

そして、皇都で開かれた豊穣祭でアンジェ殿下に一目惚れをしたらしいです。殿下が出る夜会という夜会に出席し、迫りに迫って、あまり貴族の娘と関係を持たないという殿下に、ようやく関係を持ってもらえましたが、一回で終わったみたいです。

そこに我が君が出てきたので『なんなのあの女！　私のアンジェ殿下様に取り入っちゃって！！　キィー！　悔しい！　所詮は、泥棒猫のくせに！』と変な妄想が出てきて、同じようなことを思っていたシシリア・フォレスに『シシリア様のカイン様に、色目を使っていてシシリア様から奪い取ろうとしているみたいなんです』と言って唆したみたいです。

あ、ハミール・グラッチェもヒューズ殿とセシル殿に対して同じようなことを思っていたようです。

そこから、我が君に対しての嫌がらせが始まったというわけです。ですから、首謀者はシシリア・フォレスではなく、カラリア・デルクでした。要は、この三人は可哀想な妄想癖の持ち主と言うことになりますね」

シュネはそう言って、締めた。

「なるほど。で、その三人が犯人だっていう証拠は？　ちゃんと、揃えた？」

「当たり前です。三人とも思ったよりも馬鹿で助かりました。家が遠いとかで、あまり集まれないからと言って手紙でやり取りしていたようでそれを入手してまいりました」

「手紙でやり取りって・・・・。しかもその手紙を、捨てないで置いておくなんてどれだけ馬鹿なんだろう。それを手に入れたことは、気づかれていない？」

「はい。家にちゃんと侵入して、盗んできた物と同じような紙をちゃんと置いてきましたから」

人は、それを「不法侵入」と言うだろうが、それに気づく者は誰もいない。なにせ、盗んできた張本人達を含めこの場にはアオイとアオイ至上主義でアオイのためならなんでもするという人間だけしかいないからだ。

「よろしい。報復の準備をしようか。やられたら倍以上にやり返す。

そうじゃないと、気が済まないし。コニーデは、アンジェのところに行って空いている時間を聞いてきて。報復には、アンジェ達の力を借りなきゃだからね」
「分かったわ」
短くそう言うと、コニーデはさっそく部屋から出て行った。グレースは、その後ろ姿を見つめた後、視線をアオイに戻した。
「姫さんは、具体的に何をするつもりなんだ？」
「そうだなー。グレースは、女が一番好きな人にやられて傷つくもしくは絶望するのは、どんなことだと思う？」
悪戯っ子のような目でアオイは、グレースを見た。
「わかんねぇーな。女心を考えた事なんて、ほとんどないからな」
困ったように首をかしげながら言う。
「私も経験したことないから、よく分からないんだけど、浮気や裏切り、捨てられること。相手の心変わりって事かな。
まぁ、今回のことは相手の心変わりって話じゃないけどね。だって、結局は彼女達の気持ちの一方通行でしょ。
要は、関係を持った時に、気持ちを割り切れるか割り切れないかで、彼女たちは割り切れなかった。
だから、私にあんなことをしてきた。だったら、それ以上のことをしてあげなきゃじゃん。その割り切れない気持ちを利用して、ね」
悪魔のような微笑みを浮かべて言うアオイだが、その目は全く笑っていないことから本気だということが、容易に想像できる。
（私は、知っているし。このことで、どれだけ女が打ちのめされるかを。ナツメや他の人でさんざん見てきたんだし）
口に出したら、ナツメが可愛そうかな？　と思ったので心の中でそう付け足すだけに止めた。
「なるほどな。さすが、姫さん。頭良いな」
グレースは、アオイの言葉に感心して軽く拍手を送った。

「どうぞ、我が君が、なさりたいようになさいませ。あたし達は、それに従い、その目的が為せるようにするだけですから。もちろん、汚れ仕事は、喜んで引き受けますわ」
「ありがとう。でも、シュネ達ばかりに任せてちゃダメだし。汚れ仕事だって、あんまりさせたくないもん。私は、シュネ達を道具として扱いたくないよ。対等な存在として、扱いたいんだ」
「我が君のその言葉だけで、私達は十分ですわ」
嬉しそうに笑うシュネ達に、アオイやグレースもつられて笑ってしまう。

「『本日の一五の刻までには、仕事の目処が付くからお茶を一緒にしながら話を聞く』ということです」
戻ってきたコニーデはそう言った。
（なるほど。三時のお茶の時間は、この世界でも地球でも同じみたいだからな）

報復の下準備（後書き）

アオイちゃん、静かに怒ってましたね。
怒ったら悪魔になるんだ・・・。
怖っ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1276p/

黒の冥王

2011年9月24日03時10分発行